

仙台市文化財調査報告書第309集

# 仙 台 城 跡 7

—平成18年度 調査報告書—



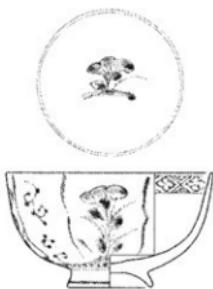
2007年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第309集

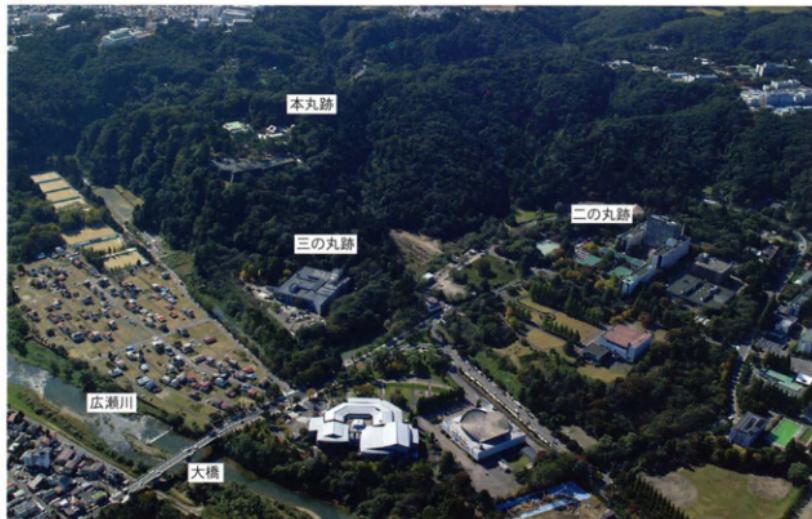
# 仙 台 城 跡 7

—平成18年度 調査報告書—



2007年3月

仙台市教育委員会



仙台城跡鳥瞰写真（北東より・2005年10月撮影）



仙台城跡航空写真（北が上・2002年1月撮影・赤ラインは国史跡指定範囲）



「奥州仙台城并城下絵図（北が上、本丸・三の丸部分、天和2年[1682]）宮城県図書館蔵」



「青山公造制城郭木写之略図（北が上、本丸部分、17世紀後半～18世紀）宮城県図書館蔵」



第15次 調査区全景（北東から）



第15次 1区北東部遺構検出状況（東から）



第15次 1区基本層序（北東から）



第15次 1区出土金銅金具（No.146）縮尺約1/1



第15次 1区KS-432検出状況（北から）



第16次 3区Ⅲ層出土磁器



第16次 3区Ⅲ層出土土師質土器他



第16次 3区Ⅲ層出土陶器



第16次 3区Ⅲ層出土金属・石・ガラス製品



第16次 3区Ⅳ層上面・Ⅳ層出土陶磁器



第16次 3区北壁断面（南東から）



第16次 3区Ⅲ層遺物出土状況



第16次 1区全景（南西から）



第16次 2区全景（東から）

## 序 文

慶長5年〔1600〕、初代仙台藩主伊達政宗が仙台城の縄張り始めを行い、城下に仙台のまちづくりを行ってから、四百年余りが過ぎ、仙台市は人口100万人を超える東北地方の中心都市となりました。市の中心部が、近代的なビルの林立する都市化の波にさらされていく中にあって、仙台城跡は市街地から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で、市民から親しまれてきました。

遺跡としての仙台城は、平成9年度から15年度まで行われた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や平成13年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城、そして伊達氏の居城としての全容が徐々に明らかとなっていました。

これらの発掘で新たに判明した複数の時期に亘る石垣構築の変遷や、ヨーロッパ産のガラスや金銅金具等の貴重な出土品などから、仙台城跡は平成15年8月、我が国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けた、仙台城跡整備基本計画が策定される等、仙台城跡の様々な魅力を引き出すための取り組みが始まっています。

こうした中で、平成18年度は本丸御殿の主要な建物である大広間跡の周辺を中心とした発掘調査、二の丸巽門跡周辺の発掘調査が行われました。大広間跡に関する調査は今年度で6年目を迎、北東周辺における堀跡などの区画施設を発見し、大広間と他の建物や庭園などの位置関係を考えていく上で大きな成果が得られました。また、昨年度に引き続き大広間よりも古い玉石敷きを発見し、大広間完成以前の遺構の拡がりが明らかになりました。

巽門跡周辺の調査では、近代に埋没したとみられる堀跡の北岸と西岸を確認し、南北幅が35m以上、深さが現地表面より6m以上となる大規模なものであることが明らかになりました。

今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げますとともに、本報告書が研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成19年3月

仙台市教育委員会  
教育長 奥山 恵美子

## 例　　言

1. 本書は、仙台城跡の平成18年度遺構確認調査及び史料調査の報告書である。

2. 本調査は、国庫補助事業である。

3. 本報告書の作成にあたり、次のとおり分担した。

本文執筆　鹿野仁子（I・II・III章）

鈴木 隆（IV・V・VI・VII章）

渡部 紀（VIII章）

編集は、渡部・鈴木がこれにあたった。

4. 土壌サンプル分析は歴古環境研究所に委託した。

5. 本書中の地形図は、国土地理院発行の1:50,000『仙台』と1:10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。

6. 遺構図の平面位置図は平面直角座標系X（日本測地系）を用いており、文中で記した方位角は真北線を基準とし、高さは標高値で記した。

7. 遺構略号は、全遺構に通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS-）を付した。

8. 本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・佐藤：1970）を使用した。

## 目　　次

序　　文	V	第16次調査
例　　言	1.	調査目的及び調査経過.....33
I はじめに.....1	2.	旧地形及び基本層序.....34
II 仙台城跡の概要.....3	3.	検出遺構.....37
III 調査計画と実績.....6	4.	出土遺物 .....57
IV 第15次調査	5.	考察 .....84
1. 調査目的及び調査経過.....8	6.	まとめ .....87
2. 旧地形及び基本層序.....9	VI	理化学分析 .....88
3. 検出遺構.....10	VII	絵図・文献史料の調査 .....91
4. 出土遺物.....28	VIII	総括 .....97
5. まとめと考察.....32		

# I はじめに

平成18年度は、仙台城跡遺構確認調査第2次5カ年計画の1年次にあたり、下記の体制で臨んだ。(敬称略、順不同)

調査主体 仙台市教育委員会(牛込学習部文化財課仙台城史跡調査室)

充創調査、整理を適正に実施するために調査指導委員会を設置し、指導・助言を受けた。なお、平成18年10月をもって調査指導委員会の任期が終了したため、同年11月から新たに調査指導委員会を組織した。

委員長 斎藤 銳雄(宮城県農業短期大学名誉教授 近世史)

副委員長 岡田 清一(東北福祉大学教授 中世史)

委 員 鈴木 啓(福島県考古学会会長 考古学)(平成18年10月まで)

西 和夫(神奈川大学教授 建築史)

北垣龍一郎(奈良県立橿原考古学研究所共同研究員 石垣・城郭研究)

千田 駿博(奈良大学文学部助教授 城郭考古学)(平成18年10月まで)

藤沢 敦(東北大特認助教授 考古学)(平成18年11月から)

岡崎 修子(御仙台ひとつ・まち交流財團仙台市山田市民センター館長)(平成18年11月から)

仙台城跡調査指導委員会開催日

第15回：平成18年11月10日 第1次5カ年計画成果報告・第2次5カ年計画報告・第16次調査中間報告

第16回：平成19年3月23日 第15・16次調査最終報告・追跡調査報告

(仙台城跡の調査指導会を平成18年7月12日に実施し、平成18年度調査計画報告・第1次5カ年計画成果報告・第15次調査成果報告を行った。)

充創調査及び遺物整理にあたり、次の方々からご協力をいただいた。

宮城県護国神社

資料提供 宮城県図書館、財團藤籠恩会、仙台市博物館

さらに、下記の諸機関の方々から適切な御教示・御協力をいただいた。

本中 賢、板井秀弥、白崎恵志(文化庁文化財保護部記念物課)、後藤秀一、笠原信男、(宮城県教育庁文化財保護課)、

須藤 隆(東北大)、北野博司(東北芸術工科大)、関根達人(弘前大学)

藤沢 敦、高木暢亮、柴田恵子(東北大埋蔵文化財調査研究センター)、鈴木裕子(株式会社 四門)

佐藤 洋、高橋あけみ、菅野正道、斎藤 潤(仙台市博物館)

調査担当	文化財課	参事兼課長	阿部 功
	主幹兼仙台城史跡調査室長	金森 安孝	
	主任	熊谷 俊朗	
	主任	渡部 紀	
	主事	鈴木 隆	
	文化財教諭	鹿野 仁子	

調査参加者 相澤 守、相澤美佐子、天野美津枝、伊藤章子、伊藤美代子、内山陽子、遠藤誠子、太田裕子、小野寺美智子、小山政志、曾家婦美子、木幡真喜子、小林正夫、古山友子、佐藤悦子、佐藤 央、庄司明美、菅野 元、清藤智子、瀬川和代、大黒洋一郎、高野誠、高橋弘子、竹内美江子、田中世津子、田中春美、対馬悦子、水野くみ子、畠田 岩、后山昌子、菱沼みのり、星野宗行、堀内泰子、増田瑞枝、三上 利、三嶋典子、山田君代、結城龍子、吉田秘綱子、渡邊 優



番号	跡跡名	位置	跡跡名	位置	
1	仙台城跡 天守記念物百選の「城かむ傳承」	15 深堀西御門 16 深堀けんとう城跡 17 宮城城跡 18 神野城跡 19 日志跡跡 20 今泉道跡 21 小原（上・下）城跡 22 小郡城跡 23 和八城跡 24 鶴谷新宮伊達家居所 25 東照宮 26 大輪八幡宮 27 鬼塙八幡宮 28 鬼塙新宮伊達家居所	29 仙谷御城跡 30 朴浦城跡 31 五城中学校北空跡 32 与兵衛山城跡 33 西ノ森方石碑 34 東昌寺古墳石出土場 35 河手寺古文木一軒板界 36 連六大口町家の碑 37 大柳本缺武の碑 38 連六建武碑 39 片内古跡群 40 片平御骨丸津宮の板界 41 馬頭石碑 42 法華舎古跡群	43 西台無住跡 44 井利駒三跡 45 生瀬城跡 46 古春日社仮牌 47 由利田塚東古跡 48 鹿渡人道跡 49 仙台北城多賀跡 50 カナクツノ跡 51 鬼塙城跡 52 菊桜城跡 53 錦平造跡 54 駒田造跡 55 伊吉田造跡 56 七ツ松造跡 57 仙居前造跡 58 大野田古城跡 59 水口上ノ跡 60 仙日上ノ跡 61 仙日上ノ竹道跡	59 山村鬼里遺跡 59 萩次造跡 60 山口前跡 61 下ノ内野跡 62 八反田造跡 63 安賀造跡 64 下ノ内造跡 65 伊吉田跡 66 三ノ松造跡 67 仙居前造跡 68 大野田古城跡 69 水口上ノ跡 70 仙日上ノ跡 71 ハラコ造跡
2	若林城跡				
3	北目城跡				
4	西伊藤				
5	度々崎城跡				
6	小郡城跡				
7	和八城跡				
8	鶴谷城跡				
9	鶴谷新殿跡				
10	国分寺跡跡				
11	東日城跡				
12	等地城跡				
13	茂庭大野跡				
14	茶都跡				

第1図 仙台城跡と周辺の遺跡

## II 仙台城跡の概要

### 1. 仙台城跡の地理的環境と現況

仙台城跡は仙台市街地の西方に位置し、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を流れる広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流の竜ノ口渓谷の浸食により高さ70mほどの断崖を形成しており、その丘陵上の平場（標高115～117m）に仙台城の本丸は位置する。本丸の規模は、東西245m、南北267mを計り、南側は落差約40mの竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる高さ約70mの断崖に守られた天然の要害となっており、比較的傾斜の緩やかな本丸北側には約17mの高さを有する石垣が築かれている。尾根続きとなっている本丸西側には御裏林と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残るために国指定天然記念物青葉山となっている。御裏林跡では、3条の大規模な堀切などが確認されている。本丸跡の麓部の河岸段丘には二の丸跡と三の丸跡が位置しており、二の丸跡は仙台上町段丘面、三の丸跡は仙台下町段丘面と高度を下げている。蛇行する広瀬川に西から一本の大きな沢が走り、この沢に挟まれ御裏林を背にした場所に二の丸跡が位置する。二の丸跡東側に位置する大手門跡付近には、約9mの高さの石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和12年に復元されている。さらに低位に位置する三の丸跡は、外郭を水堀と土塁に囲まれ、門跡付近には石垣が残存している。三の丸跡の東側、河岸段丘の最も低位に位置する追廻地区の広瀬川護岸部分には、260mに及ぶ石垣が残存している。

### 2. 仙台城跡の歴史的背景

仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。関ヶ原の戦い直後の慶長5年〔1600〕12月24日、城の縛張りが開始され、翌年1月から普請に着手、工事は慶長7年〔1602〕5月には一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。残された絵図などからみると、本丸への登城路は、大手門を通じて中門を経て本丸詰門に至るものと、巽門・清水門・沢門を通るものがある。

絵図や文献などによれば（註1）、本丸には詰門に入った東側に天皇家や将軍家を迎えるための御成門があり、華麗な障壁画や欄間彫刻に彩られた大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖面に造られた懸造、さらには能舞台・書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって造られた桃山文化の集大成といえる建物群が威容を誇っていたと考えられている。西脇櫓・東脇櫓・長櫓・巽櫓は三重の櫓であったが、正保3年〔1646〕4月の地震によって倒壊したとする記事がみられ（註2）、以後復興されずに明治を迎えたものとされている。

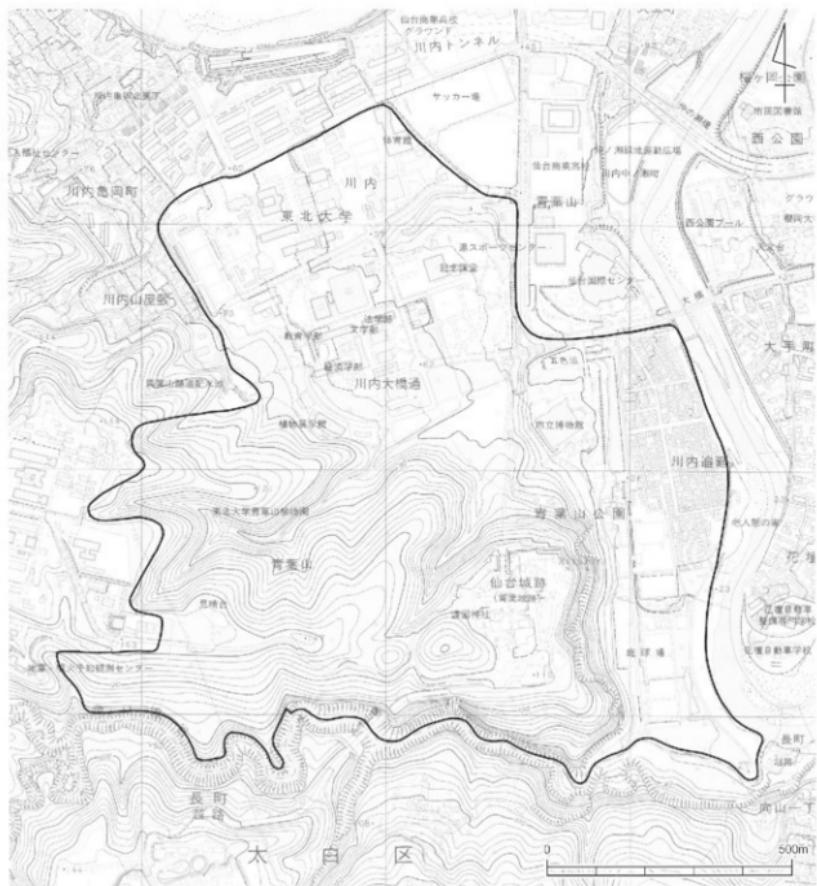
本丸の建物群は江戸時代の度重なる災害に加え、明治維新後の取り壊しなどにより失われ、二の丸の御殿群も明治15年〔1882〕の大火によって焼失した。唯一仙台城の面影を伝えていた国宝の大手門及び脇櫓も昭和20年〔1945〕

7月、太平洋戦争による米軍の空襲によって焼失した。

現在では、本丸北壁や隨所に点在する石垣、本丸西側の堀切、三の丸の周囲を閉む堀と土塁などが往時の仙台城を偲ぶ貴重な遺構となっている。また、伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた郡分氏の居城「千代城」に関する16世紀代の文献記録も残っており（註3）、中世山城が存在していた可能性も指摘されている。



第2図 焼失以前の大手門と脇櫓（1935年頃）



第3図 仙台城跡（現況地形図と遺跡範囲・1/10,000）



第4図 仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣  
解体修復工事前（北西から）



第5図 仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣  
解体修復工事後（北東から）

### 3. 仙台城跡の発掘調査

仙台城跡のこれまでの調査には、昭和58年〔1983〕から継続的に実施されている東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査（註4）と、仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58・59年〔1983・1984〕に実施された三の丸跡の発掘調査（註5）があり、本丸跡では石垣修復工事に伴う発掘調査が第1次発掘調査である。

本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が平成9年〔1997〕度から実施されている。（註6）この石垣修復工事に伴う本丸1次発掘調査は、平成9年〔1997〕7月から石垣解体に先行する事前調査と、翌年10月から開始した解体工事と並行する発掘調査からなっている。解体工事は平成12年〔2000〕9月に石材9,106石と、Ⅱ期石垣124石の解体をもって終了し、石積工事を同年12月から開始し、平成16年〔2004〕3月に工事が終了した。

石垣解体に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より二時期にわたる旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、石垣基部の調査や石垣断面構造の記録化により、Ⅰ期からⅢ期までの石垣の変遷や構造を確認した。石材調査では各種の刻印や朱書、墨書などを多数検出し、矢穴や石材加工技術の変化も確認している。石垣は表面の「石積み」様式の変化とともに、背面の土木工法の変容が顕著であり、発掘調査で石垣背面の土木工事の痕跡を考古学的な手法によって層位的に精査し、盛土の重複関係や採集遺物の分析からみた石垣変遷を、文献調査との照合により大別している。築城期には、旧地形や中世山城「千代城」の縄張りを利用して斜面を切り土しながら石垣を構築（Ⅰ期）し、地盤によりこの石垣が倒壊した後、築城期の石垣形状を一新する修復工事が行われて石垣が再構築（Ⅱ期）され、その後の地盤によりこのⅡ期石垣も倒壊し、現存石垣に全面改築（Ⅲ期）されたとして検討を重ねている。（註7）

註1 「仙台城下絵図」（寛文4年〔1664〕宮城県図書館蔵）や「脇山公造胡城郭本写之略図」（四代藩主綱村時代、17世紀後半（推定）宮城県図書館蔵）には本丸御殿の建物群が描かれ、「貞山公治家記録」にも大広間の記事が散見できる。建物群の考察については、佐藤巧「仙台城の建築」（仙台市教育委員会「仙台城」1967）・「仙台城館および岡辺建物復元考」（仙台市博物館「調査研究報告第6号」1986）・伊東信雄「仙台城の歴史」・三原良吉「仙台城年表」（仙台市教育委員会「仙台城」1967）などががある。

註2 貞山公治家記録、正保3年〔1646〕4月28日條

註3 貞山公治家記録、慶長5年〔1600〕12月24日條

註4 東北大大理藏文化財調査年報1～17（東北大理藏文化財調査センター1985～2002）

註5 発掘調査報告書「仙台城三ノ丸跡」（仙台市教育委員会1983）

註6 仙台城跡石垣修復等調査指導委員会（平成13年度に仙台城石垣修復工事専門委員会と改編）資料・議事録（仙台市建設局1997～2003）

註7 本丸1次発掘調査成果に係る主な参考文献：金森安孝「仙台城本丸跡の発掘調査」（『考古学ジャーナル』42号）1999・金森「仙台城本丸の発掘と出土陶器」（『貿易陶磁研究』No.19）1999・金森/我妻「仙台城本丸跡 築城期及び修復石垣の発見」（『考古学ジャーナル』46号）2000・我妻「仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷」（『宮城考古学第2号』2000）・金森「仙台城本丸跡石垣修復に伴う発掘調査」（『日本歴史』635号）2000・我妻「仙台城本丸跡石垣における階段状石列の構造と役割（予察）」（『宮城考古学第3号』2001）・金森/我妻「仙台城本丸跡日明石垣の発掘調査－現存石垣の構築技術－」（『考古学ジャーナル』47号）2001・金森/根本光一「仙台城石垣の石材調査」（『考古学ジャーナル』484号）2002・伊藤隆「仙台城石垣の石材調査」（東北芸術工科大学『石垣普請の風景を読む』2003）・金森「仙台城本丸跡、1次調査 第4分冊 石垣図版編」（仙台市教育委員会 2004）



第6図 本丸北壁石垣北東角部  
旧石垣（Ⅰ・Ⅱ期）検出状況（北東から）



第7図 本丸北壁石垣背面  
階段状石列検出状況（北西から）

### III 調査計画と実績

平成18年度は、仙台城跡造構確認調査の第2次5カ年計画1年目にあたる。昨年度までの第1次5カ年計画では、国指定史跡仙台城跡の全体像を把握することを目標として、造構の遺存状況、種類、規模、配置等の確認を目的とする造構確認調査と、石垣の破損状況や石積みの特徴を確認することを目的とする石垣現況調査、測量調査を実施してきた。また、これまで5年目にわたる調査により、本丸大広間跡や翼櫓跡、本丸での造構現況調査などを行ってきた。

第1表 これまでの調査実績

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	大広間跡（1次）	185m <sup>2</sup>	平成13年9月17日～12月27日
第2次	清水門跡付近石垣	210m <sup>2</sup> （立面）	平成13年11月30日～平成14年2月13日
第3次	大番士上手跡・御守殿跡・懸造跡	1,400m <sup>2</sup>	平成14年5月20日～平成15年1月31日
第4次	翼櫓跡	110m <sup>2</sup>	平成14年5月20日～8月31日
第5次	大広間跡（2次）	470m <sup>2</sup>	平成14年8月5日～12月20日
第6次	仙台城跡（全域）	約145ha	平成15年5月7日～8月8日
第7次	大広間跡（3次）	258m <sup>2</sup>	平成15年8月4日～12月25日
第8次	登城踏跡	58m <sup>2</sup>	平成15年11月12日～12月25日
第9次	広瀬川護岸石垣	50m <sup>2</sup> （立面）	平成15年12月9日～平成16年2月5日
第10次	大広間跡（4次）	397m <sup>2</sup>	平成16年7月20日～12月24日
第11次	登城踏跡・広瀬川護岸石垣	349m <sup>2</sup> （立面）	平成16年12月18日～平成17年3月31日
第12次	大広間跡（5次）	446m <sup>2</sup>	平成17年5月26日～10月19日
第13次	三の丸堀跡（1次）	86m <sup>2</sup>	平成17年11月1日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣	627m <sup>2</sup>	平成18年1月16日～1月20日

第2次5カ年計画では、引き続き、国指定史跡仙台城跡における全体像の把握を目的として、造構確認調査と石垣現況調査、測量調査、絵図等の資料調査などを実施する予定である。今年度は、本丸大広間周辺及び三の丸堀跡周辺における造構確認調査を実施した。発掘調査費については総経費36,532千円、国庫補助額18,266千円との内示を受けたことから、以下の調査計画を立案した。

第2表 調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間
第15次	大広間跡（6次）	230m <sup>2</sup>	平成18年5月22日～8月31日
第16次	三の丸堀跡（2次）	472m <sup>2</sup>	平成18年9月1日～11月30日

これまで、本丸では5次にわたる調査により、仙台城本丸御殿の中心的建物である大広間の礎石跡や雨落ち溝跡などを検出し、大広間建物跡の位置及び規模（東西33.5m、南北26.3m）を確認した。また、大広間の西側に位置する御成門跡の礎石や、そこから大広間跡に延びる通路跡と考えられる石敷き造構を検出した。さらに大広間の北側では、大広間に先行する、石敷きを伴う礎石建物跡を一棟、確認した。

第15次調査は、大広間跡の北東角および北東周辺（1区）、南東角（2区）における造構確認等を目的として実施した。調査では、大広間雨落ち溝跡北東角、南東角を検出した。また、大広間内部の整地層直下より、石敷き造構を検出した。石敷きは大広間跡内部から雨落ち溝跡の外側にも分布しており、昨年度の調査成果と合わせて大広間に先行する造構の拡がりが明らかになった。大広間跡の北東周辺では暗渠や堀跡等と考えられる溝跡5条を検出した。これらには時間的な変遷が認められ、大広間とその周辺の建物や庭園などとの位置関係や御殿全体の配置を検討する上で重要な成果である。遺物は、瓦・磁器・陶器・金銅金具・銅釘などが出土した。

第16次調査は、三の丸堀跡東側周辺の遺構確認を目的として実施した。堀跡の調査（1区）では、堀の北岸と西岸を確認し、北岸・西岸ともに杭列を検出した。堀の規模は、南北幅が35m以上、深さが現地表面より6m以上となる大規模なものであることが明らかとなった。土塁の調査（3区）では、土塁の積み土を検出し、異なる上を版築状に積んでいることを確認した。遺物は、瓦・磁器・陶器・木製品・鉄製品などが出土した。特に3区では、18世紀後半から19世紀前半を主体とする良好な遺物包含層が確認された。

第3表 調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第15次	大広間跡（6次）	311m <sup>2</sup>	平成18年6月1日～8月4日
第16次	三の丸堀跡（2次）	522m <sup>2</sup>	平成18年9月1日～11月30日



第8図 仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図（1/5,000）

## IV 第15次調査

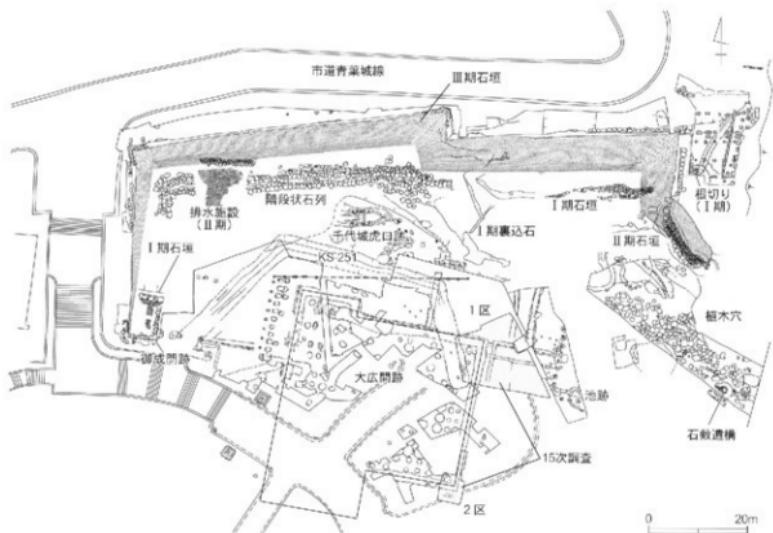
### 1. 調査目的及び調査経過

第15次調査は、大広間跡の北東角および北東周辺（1区）、南東角（2区）における遺構確認を目的として平成18〔2006〕年6月1日から同年9月30日まで実施した。調査面積は、青葉山公園として管理されている仙台市有地内の311m<sup>2</sup>である。大広間跡に関する調査としては第6次にあたる。

調査目的は、①大広間北東側周辺における遺構確認、②昨年度調査で大広間の北側より確認された、大広間に先行する石敷きを伴う礎石建物跡に関する遺構の確認、③大広間南東角および周辺の遺構確認の3点である。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影、遺物の表面採集等の後、5月24日から安全フェンスを設置し、6月1日から重機による表土の除去作業を開始した。人力による遺構面の検出作業は6月1日から開始した。電気ケーブルや水道管を埋設した際の掘り方といった極めて新しい時期の遺構である、搅乱の除去作業に伴い、その壁面および平面の精査を行なながら明治時代以降の整地層であるⅡ層を除去し、江戸時代の盛土層または整地層であるⅢ層の上面で遺構検出作業を行った。

調査では、大広間雨落ち溝跡北東角、南東角を検出した。また、大広間内部の整地層直下より、石敷き遺構を検出した。石敷きは大広間跡内部から雨落ち溝跡の外側にも分布している。雨落ち溝跡北東角の北30cmでは、これらの石敷きを伴う礎石を1基検出しており、昨年度検出した礎石建物跡と一連のものと考えられる。これにより、大広間に先行する遺構の折がりが明らかになった。大広間跡の北東周辺では暗渠や断跡等と考えられる溝跡5条を検出した。これらの間には時間的な変遷が認められ、大広間とその周辺の建物、庭園などとの位置関係や御殿全体の配置を検討する上で重要な成果である。遺物は、磁器、陶器、土師質土器、金銅金具、銅釘、瓦などが出土した。



第9図 仙台城本丸跡北部・大広間跡調査区位置図 (1/1,000)

第15次調査は、平成18年3月23日の第14回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了解を得て実施した。

7月4日に宮城県、7月11日仙台城跡調査指導委員の現場指導を受け、平成18年7月12日に開催された仙台城跡調査指導委員会において、調査成果の中間報告を行いました。7月20日に記者発表、7月22日に現地説明会（450名参加）を実施した。8月2日には調査区の埋め戻しやフェンス撤去等の作業を終え、調査箇所は現状に復した。平成19年3月23日に第16回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な確認を行った上で、本報告書を刊行するに至った。



第10図 調査前状況（北から）



第11図 調査前状況（南から）

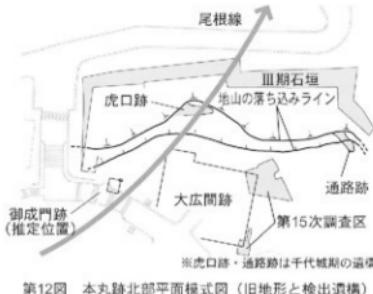
## 2. 旧地形及び基本層序

大広間周辺の原地形をみると、その北側前方に中世千代城の虎口跡が検出された尾根の張り出しがある（第12図）。この尾根線は、御成門跡付近から大広間跡の北西角部を通り北東方向へ延びるもので、大広間のある平場の地形は、本来東へ向けて緩やかに傾斜していたものと考えられる。

基本層は、I層（現表土）、II層（近代以降の整地層）、III層（近世の整地層）、IV層（地山直上の旧表土層）、V層（地山）に大別される（第4表）。以下、概要を記す。

II層はa～c層に細分した。IIa、IIb層は、一部白色粘土ブロックを含む近代以降の盛上層で特に2区に分布する。IIc層は、大広間雨落ち溝底絶直後の盛土層である。1、2区ともに分布するが、2区でより厚く堆積している。上面は硬く結まっており、一定期間路面であったと考えられる。

III層は1区の大広間外側に堆積する盛土層のIII-1層、III-2層と2区を中心に確認されたa～d層とに細分した。III-1層は近世期の最も新しい盛土層で、その上面はKS-403・406（東西方向の導溝）やKS-405（暗渠状造構）の検出面である。III-2層はV層またはIV層の直上にのる整地層で、KS-404・407（南北溝跡）の検出面である。大広間に先行する石敷き造構もこの層の上面で構築されたものと推測される。IIIa層はII層直下にみられる旧表土層で、特に2区においては層厚10～15cmと一定の厚さで堆積している。一部雨落ち溝底石抜き取り後のくぼみ内にも堆積していることから、大広間雨落ち溝底絶時からIIc層が堆積するまでの旧表土層であったと考えられる。IIIb層は2区でのみ確認された盛



第12図 本丸跡北部平面模式図（旧地形と検出遺構）

第4表 第15次調査基本層注記表

層序 番号	遺構・部位	本 色	土質	土 性	備 考
I	30YR32	黒褐色	砂質シルト	有 粘	塊状土塊
IIa	30YR26	黄褐色	砂質シルト	有 粘	白色粘土ブロック、複数多量含む
IIb	30YR45	灰褐色	砂質シルト	有 粘	暗褐色柱状シルトブロック、複数多量含む
IIc	30YR34	褐色	砂質シルト	有 粘	暗褐色柱状シルトブロックや多く含む。灰褐色多量含む
III-1	23YR8	明褐色	砂質シルト	有 粘	
III-2	30YR69	黄褐色	砂質粘土	有 粘	30YR69は30YR26と並んでV層土に含む。V層土をブロック状に多量含む。
IIIa	30YR44	褐色	砂質シルト	有 粘	
IIIb	30YR45	褐色	砂質シルト	有 粘	
IIIc	30YR25	黄褐色	シルト質粘土	有 粘	30YR25は30YR69と並んでV層土に含む。V層土をブロック状に多量含む
IIId	30YR45	灰褐色	砂質シルト	有 粘	
IV	30YR45	灰褐色	砂質シルト	有 粘	30YR45は30YR25と並んでV層土に含む。V層土をブロック状に多量含む
V	30YR26	黄褐色	シルト質粘土	有 粘	砂山群

土層である。この盛土により、大広間内部の整地面と雨落ち溝上面との間にあった10cm程の段差を埋め、その上面から雨落ち溝を掘り直していることが確認された。Ⅲc層は、2区で確認された大広間跡内部の整地層である。地山土を主体とする。1区における大広間内部の整地層（Ⅲe層）に対応する（Ⅲe層については「仙台城跡6」参照）。Ⅲd層は2区北部の大広間の外側に分布する盛土層で層相は異なるが1区Ⅲ-1層に対応する。

IV層はV層（地山）上面に堆積した旧表土層とみられ、1区東側でのみ検出された。IV層上面では焼土遺構（KS-411）や溝跡（KS-410）などが一部的に検出されている。断面観察でも、IV層上面およびV層上面でそれぞれ遺構が確認されており、いずれも中世以前のものと考えられる。

### 3. 検出遺構

#### （1）大広間跡

大広間礎石跡（KS-133, 426, 132, 425, 166, 242）、雨落ち溝跡（KS-53）について記述する。

・KS-133礎石跡 1区、大広間落縁の北東角に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。検出面はⅢe層上面である。平面形は、南側大部分を搅乱に切られているがほぼ円形であったと推測される。規模は、東西110cm以上、南北30cm以上、深さ34cm以上である。根固め石は、径5～10cmとKS-426に比べて小さく、多くが埋土下部にみられる。埋土はⅢc層土に極めて類似している。KS-426とKS-133は、その検出位置から、ともに大広間落縁の北東角にあたる。擾乱のため直接の切り合い関係は無いが、根固め石の大きさの違いとその位置関係から、両者には時間差があったものと考えられる。後述するが、大広間南東角では2基の礎石跡に切り合い関係が確認された。

・KS-426礎石跡 1区、大広間落縁の北東角に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。検出面はⅢe層上面である。平面形は、北側大部分を搅乱に切られているがほぼ円形であったと推測される。規模は、東西70cm以上、南北20cm以上、深さ25cm以上である。根固め石は径5～25cmで、一部Ⅲc層上面より露出した状態で検出された。

・KS-132礎石跡 1区KS-426の南約1.8mで検出された。大広間落縁東辺に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。検出面はⅢ-1層上面である。平面形は、不整円形である。規模は東西79cm、南北70cmである。根固め石の大きさは面的な検出に止めているが、径5～20cmのものが確認されている。

・KS-425礎石跡 1区KS-132の南約2mで検出された。大広間落縁東辺に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。KS-251（近代溝状造構）の壁面で検出されており、造構上部のほとんどが削平されている。規模は、東西38cm以上、南北51cm以上である。根固め石の大きさは径5～10cmである。

・KS-166礎石跡 2区、大広間落縁の南東角に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。検出面はⅢb層上面である。平面形は不整円形である。規模は東西100cm以上、南北99cm以上である。根固め石の大きさは径5～15cmである。南東に隣接するKS-242礎石跡を切る。

・KS-242礎石跡 2区、大広間落縁の南東角に位置する。礎石は無く、根固めのみが検出された。検出面はⅢc層上面で、Ⅲb層に覆われる。平面形は不整円形である。規模は東西140cm以上、南北110cm以上である。根固め石の大きさは径5～25cmである。北西に隣接するKS-166礎石跡に切られる。

・KS-53 雨落ち溝跡 今回の調査では、北東角（1区）および南東角（2区）を検出した。縁石はほとんど抜き取られており、両縁石の間に充填されていた瓦石のみが帯状に検出された。今回の調査でも特に2区において、昨年度と同様、雨落ち溝跡に掘り直しによる改修の痕跡が確認された。

2区西壁の観察から、雨落ち溝に2つの掘り方を確認した。それぞれ、Ⅲc上面、Ⅲb上面と掘り込み面が異なり、時間差が認められた。

古段階の掘り方はⅢc層上面を掘り込み面とする。この段階では、雨落ち溝から大広間内部にかけて高さ10cmほどの段差がみられる。2区の雨落ち溝南辺より検出された6石の縁石は、帯状に残る瓦石の上面より、いづれも10～15cm低く、かつ面的にほぼ水平で内側の面も揃っていることから、雨落ち溝古段階の縁石であると推定される。縁

石は割り面または平坦な自然面をもつ石材で、周囲には形状を整えるための剥離痕が複数認められる。

新段階の掘り方はⅢb層上面を掘り込み面とする。この段階の埋土は、おおむね縫石抜き取り後に堆積したⅢa層に切られ、わずかに残されている。Ⅲb層の堆積によって、雨落ち溝と大広間内部の整地層との間にあったレベル差は無くなってしまい、これに伴い縫石、玉石とともに少なくとも20cm程度かさ上げされたものと推測される。

・KS-84素掘り溝跡　I区西寄りの箇所で雨落ち溝を東西に切る擾乱の底面で長さ90cmを検出した。上部を雨落ち溝の掘り方に切られており、掘り込み面は不明である。規模は、上端幅25cm、下端幅15cm、深さ18cm以上である。断面形は、底面がほぼ平坦で壁がやや外傾して立ち上がる逆台形を呈する。埋土は地山十を含む人為堆積土である。これらの特徴から、これまで大広間西辺、北辺で検出されてきたKS-84素掘り溝跡に連続するものと判断した。埋土中より遺物の出土は見られなかった。

## (2) 大広間北東周辺の検出遺構

ここでは、I区大広間北東周辺より検出された、大広間建物跡と基軸を同じくする遺構を一括して扱う。これらの遺構には時間的前後関係が認められる。検出面の古い順に記述する。

・KS-407溝跡　大広間雨落ち溝北東角から東約5.5mで検出された南北方向に延びる溝跡である。調査区の北端から南端の壁面でも確認されており、全長約14.5mを検出した。その軸線は大広間南北軸線にはほぼ平行する。規模は、上端幅約100cm、下端幅約60cm、深さ35cm以上である。断面形は、壁が湾曲して立ち上がるU字形を呈する。埋土は1層であることから、比較的短期間に埋没したものと考えられる。

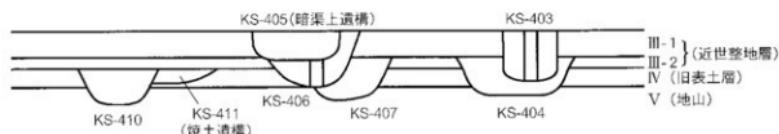
・KS-404溝跡　KS-407にほぼ平行して、その東約3mで検出された南北方向に延びる溝跡である。KS-407と同様、掘り込み面はⅢ-2層上面で、Ⅲ-1層に覆われる。調査区の南端でも確認されており、全長約8.5mを検出した。規模は、上端幅約200cm、深さ40cm以上である。断面形は、壁が湾曲して立ち上がるU字形を呈する。埋土は1層であることから、比較的短期間に埋没したものと考えられる。

・KS-406堀跡　雨落ち溝跡北東角の東約2mで検出された、東西方向に延びる堀跡である。検出面はⅢ-1層上面である。約3.5m分を検出した。雨落ち溝跡北辺ラインの延長線上に位置するが、その西端でKS-405に切られる。しかし、擾乱の壁面観察によりそこから西へは延びないものと考えられる。

規模は、上端幅推定70cm、深さ約40cmで埋土中央に幅10cmの柱痕跡が確認された。断面形は、底面がほぼ平坦で壁がやや外湾して立ち上がる。

・KS-405暗渠状遺構　KS-406の北約30cmでそれとほぼ並なるように検出された暗渠状遺構である。検出面はⅢ-1層上面である。KS-406の西端で南に90°折れるL字形に全長約10.5mを検出した。規模は、上端幅60~70cm、深さ20cmで、断面形は皿状を呈する。埋土上部には径5~20cmの円礫が帶状に配されている。中央が一段低く、砂質土の堆積がみられた。堆積環境を調べるために土壤サンプルの珪藻分析を行った。(VI理化学分析参照)。

・KS-403堀跡　KS-406に平行して、その南約2.5mで検出された。大広間建物跡推定ライン北辺の延長線上に位置する。検出面はⅢ-1層上面である。規模は、上端幅50~60cm、深さ40cm以上である。断面形は、両壁がほぼ垂直に立ち上がる長方形を呈する。埋土は1層である。KS-403は雨落ち溝東辺の中心から東約4mの箇所で途切れており、その端部に柱痕跡がみられることから、この部分に戸がついていた可能性が高い。柱痕跡は四隅でのみ検出し



第13図 大広間北東周辺断面模式図

たが、対となる柱との間隔は1.5m程であったと推測される。遺構の西端は雨落ち溝跡に近接するが、KS-430に切られる。

- ・KS-430 KS-403の西端で検出された。検出面はⅢ-1層上面である。規模は、東西110cm、南北65cm、深さ26cmである。柱の抜き取り等KS-403痕跡の廃絶に関わる可能性が高い。

### (3) 大広間南東周辺の検出遺構

ここでは、2区大広間南東周辺より検出された遺構を一括して扱う。

- ・KS-458 北部で検出された。検出面はⅢd層上面である。雨落ち溝跡掘り方に切られる。長軸は東西方向を向くが、平面形は不整形を呈する。規模は東西50cm、南北40cmである。雨落ち溝との関係は判然としないが、この部署に残された縁石の向きが東西方向となっており、何らかの関連性を持つ可能性が指摘される。

- ・KS-442 KS-166(大広間落縁南東角礎石跡)の東約2.5mで検出された。検出面はⅢa層上面である。規模は南北35cm、深さ46cmである。断面形はV字形を呈する。埋土は2層に分かれ、底面に径5~8cmの円礎が多量見られる。

- ・KS-455 KS-442の直下から断面のみ検出した。上部を雨落ち溝跡の掘り方に切られており、掘り込み面は不明である。規模は、南北38cm、深さ46cm以上である。底面が20cmの幅で一段低く窪んでおり、柱痕跡である可能性も考えられる。

- ・KS-439 雨落ち溝南東角の南約2.5mでL字形の溝跡で全長約2.5mを検出した。掘り込み面はⅢd層上面である。規模は、上端幅40cmで深さ42cmである。大広間と軸線を同じくする性格は不明である。

- ・KS-440 KS-439に切られる形で部分的に検出した。掘り込み面、規模とともに不明である。

- ・KS-456 雨落ち溝跡南東角から南へ延びる暗渠状遺構であるが、東西の幅は不明である。深さ約52cmで埋土中に多量の円礎を含む。KS-439を切る。

- ・KS-452 2区南壁寄りで東西に長く検出した。検出面はⅢa層上面である。規模は、東西長2.3m以上である。

### (4) その他の近世遺構

上述した以外の近世遺構を一括して扱う。記述は検出面毎に行う。遺構は全て1区より検出されたものである。  
〈Ⅲ-1層上面検出遺構〉

- ・KS-402 調査区南東部の東壁際で検出された。北半を搅乱で切られており、平面形は不明である。規模は、東西36cm以上、深さ20cmである。断面形は浅い皿形を呈する。

- ・KS-408 調査区東部より検出された。平面形は不整円形である。規模は、東西90cm以上、南北70cmで、深さは12cmと浅い。底面の凹凸が著しい。埋土中に多量の炭化物を含んでいる。KS-413を切る。

- ・KS-424 調査区中央より平面のみ検出された柱穴。規模は、径約31cmである。やや北寄りに径13cmの柱痕跡が確認された。

- ・KS-428 調査区東部より検出された土坑。平面形は不整形である。規模は、東西125cm以上、南北100cm以上、深さ39cmである。断面形は碗形を呈する。KS-403痕跡を切る。

- ・KS-429 調査区東部より平面のみ検出された。平面形は東西に長い椭円形である。規模は東西185cm以上、南北118cm以上である。埋土中に径10~30cmの非常に風化した凝灰岩礎を多量含む。

- ・KS-431 雨落ち溝跡北東角付近で検出された。検出面はⅢe層上面である。一部北側を搅乱により切られるが、平面形は不整円形である。規模は、東西78cm、南北65cm以上、深さ30cmである。雨落ち溝跡の掘り方を切る。KS-403,430の延長線上に位置する。

- ・KS-438 調査区中央より断面のみ検出された柱穴。規模は、上幅30cm、深さ43cmである。埋土中に幅10cmの柱痕跡が確認された。

・KS-451 調査区中央より平面のみ検出されたピット。平面形は円形である。規模は、径約15cmである。雨落ち溝跡の掘り方を切る。

#### 〈III-2層上面検出遺構〉

・KS-400 調査区南東部より検出された土坑である。検出面はIII-2層であるが、付近が近代以降の削平を受けていたため、III-1層上面より掘り込まれた可能性もある。西半部を擾乱で切られるが、平面形はほぼ円形を呈するものと考えられる。規模は、東西80cm以上、南北85cm以上、深さ30cm以上である。断面形は鐘形を呈する。

・KS-401 調査区南東部より検出された。遺構の中央を搅乱で切られており、西側をIII-1層で覆われるため平面形は不明である。規模は、東西110cm以上、南北88cm以上、深さ29cmである。埋土は3層に分かれるが、均質な褐色粘質シルトを含むことから、植栽痕である可能性が考えられる。

・KS-416 調査区南東部より断面のみ検出された。規模は、深さ26cm以上である。KS-401を切る。

・KS-417 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅58cm、深さ42cmである。KS-416に切られる。

・KS-422 調査区東部より断面のみ検出されたピットである。規模は、幅18cm、深さ30cmである。

・KS-433 調査区北西部より断面のみ検出された。規模は、上幅70cm以上、深さ38cm以上である。堆土は2層に別れるが、中央が柱状に立ち上がり、瓦片が出土した。

・KS-441 雨落ち溝跡北東角付近より断面でのみ検出された。掘り込み面については、上部を雨落ち溝跡の掘り方に切られており、III-1層上面である可能性もある。規模は、幅20cm、深さ40cmである。断面形はV字形を呈する。

・KS-444 調査区北東部より断面のみ検出された。規模は、幅22cm、深さ42cmである。III-2層に覆われる。

・KS-445 調査区東部より断面のみ検出された。規模は、幅26cm、深さ41cmである。III-1層に覆われる。

・KS-457 調査区中央やや南側より検出された。平面形は長楕円形である。規模は、東西71cm、南北160cmである。堆土中に割り礫、瓦片を多量含む。KS-405暗渠状遺構を切る。

#### 〈その他〉

・KS-443 調査区東部、KS-408の直下より検出された。掘り込み面は不明であるが、埋土の特徴がKS-407に類似することから近世遺構の可能性が高いと判断した。規模は、上幅46cm、深さ42cm以上である。

#### (5) 大広間に先行する近世遺構

・KS-432 碓石跡 1区の北側から石敷き

を伴う礎石跡を1基検出した。礎石は、長径35cm以上、短径33cmで平坦面を持つ安山岩質の石材である(第5表)。柱の痕跡等

は確認されなかった。

遺構の構築順序は、地山(V層)上面から掘り込まれた掘り方内に礎石を据えた後、その周縁部に直接して層厚2~5cmの粘質土(III-2層)が貼られている。III-2層は昨年度調査のIII-2層に対応する。さらに、その粘質土の上面に径1~3cmの玉砂利が敷かれており、玉砂利の一部は礎石の周縁を覆うように検出された。なお、KS-432は雨落ち溝跡の外側で検出されたが、周囲の石敷きの一帯が、雨落ち溝跡の掘り方に切られており、大広間に先行するものと考えられる。これらの特徴は、昨年度大広間の北側で検出された礎石建物跡と同様であり、一連のものである可能性が高い。ただし、礎石上面をレベルを見ると、大広間北側の礎石群に比べ10~18cm低い。礎石近くの擾乱壁面において、III-2層中より近世期と思われる瓦片が出土した。

・石敷き遺構 大広間内部の整地層(III-2層)直下または大広間の東側III-1層に覆われた状況で検出した。石敷きは、擾乱等の壁面や一部的に確認されており、分布は、1区北西部より南部にかけて拡がっており断続的ではあるが南北約7m、東西約3mの拡がりが確認された。

第5表 磚石観察表			
調査次数	No.	真高(cm)	幅幅(cm)
15	KS-432	22.0~	35.0~
12	1	28.5	26.5~
12	2	33.5	26.5
2	1	31.0	31.0~
2	4	40.0	29.0

第5表 磚石観察表

備考

火門、安山岩質

やや瓦礫を含む火門、安山岩質

火門、多孔質

やや古磚を含む火門

灰化色、安山岩質

#### (6) 中世以前の遺構

掘り込み面は、近世整地層直下のIV層（旧表土層）上面とV層（地山）上面の2面認められる。近世整地層より下位の遺構として中世以前と括したが、埋土中からの遺物の出土は無く、より詳細な遺構の年代については不明である。以下検出面毎に記述する。

##### 〈IV層上面検出遺構〉

・KS-410 1区北部より検出された溝跡である。調査区北東より緩い弧を描きながら西へ延びており、今回の調査では全長約8mを検出した。規模は、上幅50~90cmで、深さは東側で40cm以上となるが、西側では20cmと浅い。断面形は皿形を呈する。KS-411焼土遺構を切る。

・KS-411 1区北西部より平面のみ検出された焼土遺構。平面形は不整形である。規模は、東西112cm、南北135cmである。埋土中より、放射性炭素年代測定用サンプルを3点採取した。その結果、層年代補正値で、概ね15~16世紀の年代が得られた（VI 理化学分析参照）。KS-410に切られる。

・KS-435・436・437 いずれも1区西側のKS-251近代溝状遺構の東壁で断面のみ検出された。KS-435・436はKS-410の直下で検出された。規模は不明である。掘り込み面も不明であるが、埋土の特徴がKS-410に類似することから同じIV層上面の遺構と判断した。KS-437についても同様である。KS-437はKS-436の南50cmで検出された。規模は、上幅78cm、深さ20cmである。断面形は皿形を呈する。石敷き遺構に覆われる。

・KS-453 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅30cm以上、深さ20cmである。

##### 〈V層上面検出遺構〉

・KS-415 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅23cm、深さ21cmである。

・KS-419 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅38cm、深さ24cmである。埋土中に、柱状の立ち上がりがみられる。

・KS-420 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅68cm、深さ22cmである。埋土中に、柱状の立ち上がりがみられる。

・KS-421 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅26cm、深さ8cm以上である。

・KS-423 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅26cm以上、深さ16cm以上である。KS-407に切られる。

・KS-454 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅94cm、深さ24cmである。KS-419に切られる。埋土中に、柱状の立ち上がりがみられる。

・KS-446 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅20cm以上、深さ16cm以上である。KS-404に切られる。

・KS-447 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅36cm、深さ42cmである。KS-448を切る。

・KS-448 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅26cm以上、深さ10cmである。KS-447に切られる。

・KS-449 1区南東部より断面のみ検出された。規模は、幅54cm、深さ22cmである。

##### 〈その他〉

・KS-434 雨落ち溝跡北東角付近で断面のみ検出された。掘り込み面は不明であるが、黒色の均質な埋土は、他の近世遺構には全く見られず、上部を雨落ち溝に切られることと合わせて中世以前のものと判断した。規模は、推定で東西150cm以上、南北160cm以上、深さ20cm以上である。

#### (7) 近代遺構

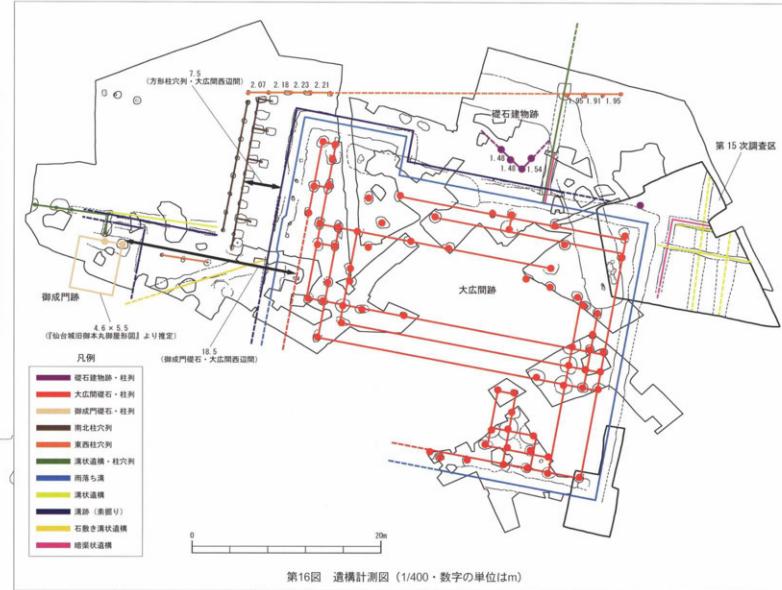
・KS-251 大広間跡を一部壊しながらその北側にみられる大規模な溝状の遺構である。これまでの調査成果から、全長は約90mに及び全体形は両側が開いた「コ」字状をなす。規模は上端幅4m、下端幅1mで深さは約1.6mである。昨年度の調査で底面より19世紀後半の磁器皿が出土している。



### 第12次調査 遺構検出状況（南から）



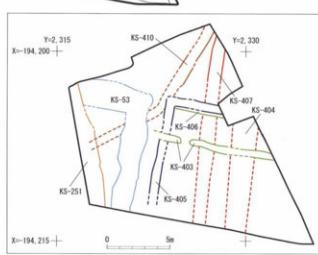
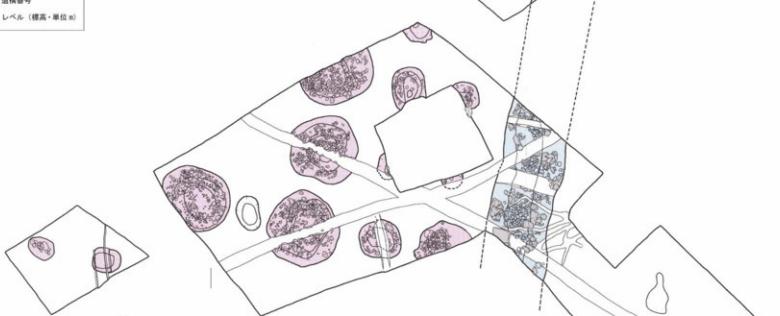
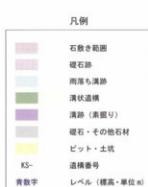
#### 第12次調査 碇石建物跡検出状況（北から）



第16図 遺構計測図 (1/400・数字の単位はm)



1区雨落ち溝平面合成写真 (1/100)



1区溝状遺構模式図 (1/300)



2区平面合成写真 (1/100)

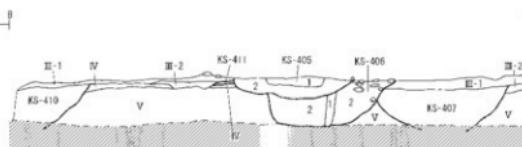
第43圖～第45次調查全體遺構平面圖（1/100）



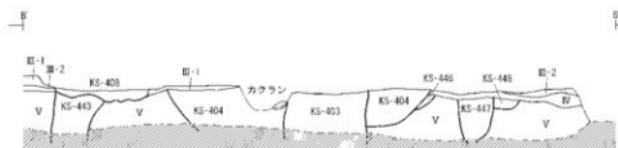
南壁断面図 a



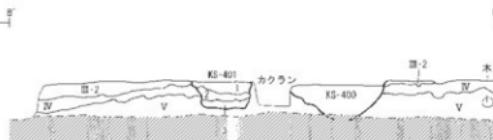
南壁断面図 b



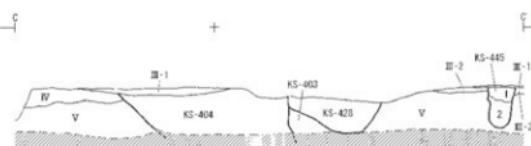
東部カクラン東壁北部断面図 a



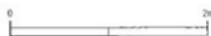
東部カクラン東壁北部断面図 b



東部カクラン東壁北部断面図 c



東部カクラン西壁断面図



第18図 第15次調査 1区断面図 1 (1/50・S.L.=116m)



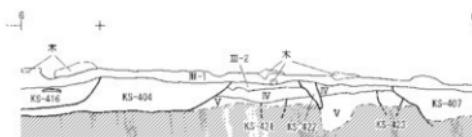
雨落弓北東角部断面図



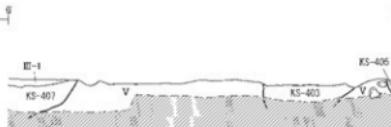
中央カクラン東壁断面図



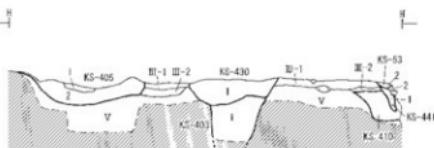
北西部カクラン断面図



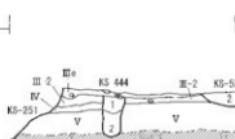
東部基本層序断面図 a



東部基本層序断面図 b



### 中安カクラン西壁断面図

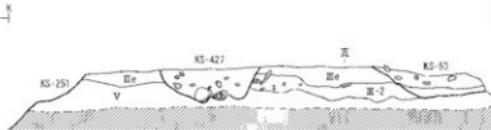


北西部カクラン北壁断面図



北西部カクラン南壁断面

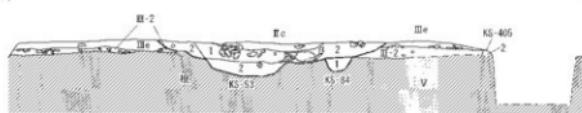
第19図 第15次調査 1区断面図2 (1/50・SL=116m)



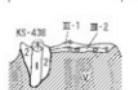
北西部カクラン北壁断面図



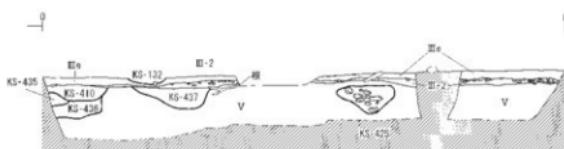
北西部カクラン南壁断面図



西部雨落ち断面図



中央コンクリート柱  
カクラン南壁断面図



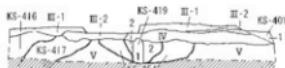
KS-251断面図



南東部KS-415断面図



南東部カクラン南壁断面図



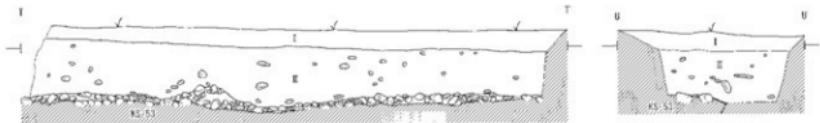
南東部カクラン北壁断面図



南東部カクラン南壁断面図

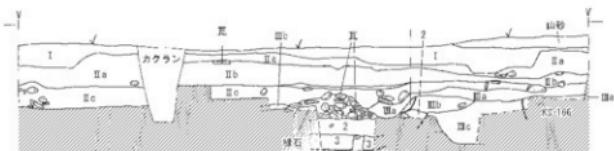


第20図 第15次調査 1区断面図3 (1/50・SL=116m)



北部西壁断面図

北部北壁断面図



第6表 第15次調査基本層注記表



1区全景（北から）



1区全景（西から）



1区北東部遺構検出状況（東から）



1区KS-405・406検出状況（東から）



1区KS-407検出状況（北から）



1区KS-405・406・407断面状況（西から）

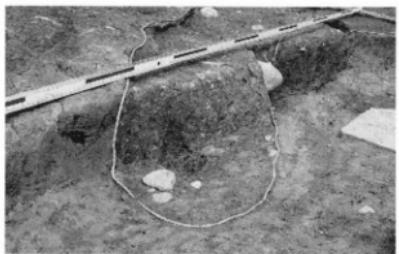


1区KS-403・404・446・447・448断面状況（南から）



1区KS-445・407断面状況（北東から）

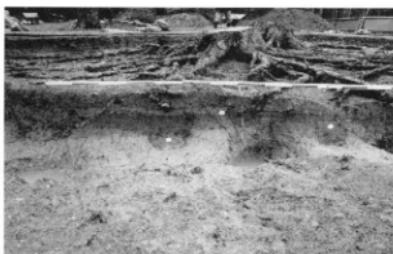
第22図



1区KS-403断面状況（西から）



1区KS-430・403断面状況（北東から）



1区KS-421・422・423断面検出状況（北東から）



1区石敷き、KS-53・84断面状況（南から）



1区KS-53・84断面状況（北から）



1区KS-53・450・410断面状況（西から）



1区KS-133礎石跡断面状況（南東から）



1区KS-426・431断面状況（北西から）

第23図



1区KS-132 磚石跡検出状況（南西から）



1区III-e層直下石敷き遺構断面状況（南西から）



1区KS-425、石敷き検出状況（西から）



1区南部石敷き遺構検出状況（南東から）



1区KS-432、石敷き遺構検出状況（北から）



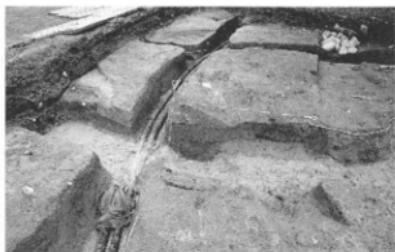
1区III-e層直下、III-2層上面瓦検出状況（南から）



1区北部石敷き直下III-2層瓦出土状況



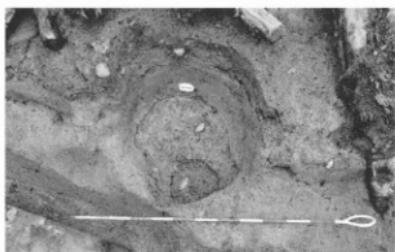
1区KS-400・401検出状況（南西から）



1区KS-402・449・453・417断面検出状況(北西から)



1区KS-408・429検出状況(南から)



1区KS-424検出状況(北東から)



1区KS-411焼土遺構検出状況(南東から)



1区KS-419・454断面検出状況(南東から)



1区KS-433・434断面状況(北から)



2区全景(南から)



2区西壁全景(東から)



2区西壁大広間部分（東から）



2区東壁全景（西から）



2区北部西壁全景（北東から）



2区KS-53・458検出状況（北から）



2区遺構検出状況（北西から）



2区KS-53・442・455断面状況（東から）



2区KS-53雨落ち溝跡、縁石検出状況（南から）



2区KS-166・242礎石跡検出状況（北から）

第26図



2区KS-439・440断面状況（北東から）



2区KS-452・439・440・456検出状況（東から）



2区土器器（No.189）出土状況



2区IIIa層煙管（No.78）出土状況



2区IIc層上面銅釘（No.16）出土状況



1区作業風景（南から）



2区作業風景（南東から）



現地説明会風景（北西から）

## 4. 出土遺物

### (1) 陶磁器他 (第7表)

#### ①磁器、陶器

それぞれ36点、23点出土した。ほとんどが表土、擾乱、近代以降の盛土層からの出土である。いずれも小片で器種、年代等詳細のわかるものは非常に少ない。2区Ⅱ層より出土した大堀相馬窯の灰釉碗(18c後)1点を図示した(第28図1)。

#### ②土師質・瓦質土器

それぞれ114点、3点出土した。土師質土器は、ほとんどが小片である。114点のうち107点が2区から出土しており、これまでの調査と同様、大広間南東角部周辺における分布の集中を確認した。

### (2) 金属製品 (第8表)

金属製品は金銅金具、銅釘、煙管、古鏡、鉄釘、鏡などが出土した。

#### ①金銅金具

鍍金が比較的残る3点を図示した。第28図2は、唯一文様表現の見られるものである。厚さ0.5mmの地金に、蹴形り(先が直線状の鑿を打込み、その楔形の打痕の連続を線状に見せる彫金技法)によって花弁の輪郭と葉脈とみられる線彫りが施されている。花弁の輪郭がより太く、蹴形りの間隔も葉脈部分に比べ密となっており、より滑らかな屈曲線が表現されている。第28図3、4は、いずれも一部に鍍金が残るが文様表現は見られない。ともに釘穴が見られる。

#### ②銅釘

今回の調査では53点出土しており、本丸大広間跡関連調査での全出土点数は881点である。これまでと同様、頭部形状の違いに基づき分類した。I類(角)10点、III類(平丸)14点、IV類(不整形)20点、X類(形状不明)9点である。I類とIII類を3点ずつ図した(第28図8~13)。II類については今回出土していない。全長は、I類が15~20mm、III類が26~30mmに集中する。IV類は比較的ばらつきが大きいが、20mm以下のものが多い。これは、かつて行った分析結果と同じ傾向を示している。詳しくは、16年度に刊行した「仙台城跡5」出土遺物銅釘の項および考察を参照されたい。銅釘の分類基準についても同報告書に準拠している。

#### ③煙管

##### 2区Ⅲa層より1点出土した(第28

図7)。火皿、ラウ、吸口が一体となる延べ煙管である。

#### ④鉄釘

94点出土した。いずれも破損した小片が多く全体の形狀がわかるものは無いが、2点を図示した(第28図5、6)。75点が2区からの出土である。IIc層、IIc層上面からの出土が多く、近代のある段階に廃棄されたものと考えられる。鉄釘がIIIa上面、IIIa層に出土するピークがあるのと対照的である。

第7表 第15次調査出土陶磁器他数量表

区	遺構・層位	金	銀	銅	土師質	瓦質	その他		計
							金	銀	
	表土	2	—	—	—	—	—	—	2
	擾乱	20	9	3	1	—	—	—	33
	I	1	—	1	3	—	—	—	5
	II	4	4	—	—	—	—	—	8
	III	—	—	—	1	—	—	—	1
	IV	—	—	—	1	—	—	—	1
	KS-S3-1	1	1	1	1	1	—	—	4
	擾乱	1	—	1	12	—	—	—	14
	I	2	—	—	—	—	—	—	2
	II	5	4	26	—	—	—	—	37
	IIc	1	20	—	—	—	—	—	21
	IIIa上部	—	—	—	13	—	—	—	13
	IIIa層	1	1	20	—	—	—	—	22
	IIIa上面	—	—	2	—	—	—	—	2
	KS-S5-1(下層)	—	—	—	—	—	—	—	1
	KS-S5-1	—	—	—	—	—	—	—	1
	KS-4f6	—	—	2	—	—	—	—	2
	KS-4d0+1	—	—	1	—	—	—	—	1
	KS-4g2+1	—	—	9	—	—	—	—	9
	計	36	23	14	3	1	186		

第8表 第15次調査出土金属製品数量表

区	遺構・層位	金銀	銅釘				生産	その他	古鏡	鏡	鏡	その他	計
			Ⅰ型	Ⅱ型	Ⅲ型	Ⅳ型							
	表土	—	—	2	—	—	—	—	—	9	—	2	16
	擾乱	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	I	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	II上部	5	2	—	—	—	—	—	—	3	—	—	8
	IIa	2	4	3	1	—	—	—	—	—	—	—	0
	IIIa上部	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	2
	IIIa	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	KS-S3-1	3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4
	KS-4f2	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	3
	KS-2d1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	KS-4d0	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	2
	KS-2	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	4
	I	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	II	—	—	1	—	—	—	2	—	6	1	—	7
	IIc上部	—	—	2	—	—	—	1	—	15	—	1	22
	IIc	1	—	—	1	—	—	1	—	15	—	1	21
	IIIc	—	—	—	—	—	—	—	—	8	—	—	8
	IIIc	1	—	—	4	—	—	—	—	9	—	—	9
	KS-S3-2	—	—	—	2	1	—	—	—	6	—	—	6
	KS-S3-3	—	—	—	—	—	—	—	—	10	—	—	10
	KS-S3-4	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	1	2
	KS-S3-5	—	—	—	—	—	—	—	—	94	1	5	100

### (3) 瓦 (第9表)

瓦は総計1,854点出土し、このうち丸瓦が253点、平瓦が1,515点で併せて全体の95%を占める。また、出土層位別では1、2区ともに搅乱や近代以降の盛土層・遺構から出土したものが圧倒的に多い。

#### ①軒丸瓦

12点出土した。瓦当文様の判別可能なものは9点あり、三巴文6点、珠文三巴文2点、無文1点である。

#### ②軒平瓦

7点出土した。瓦当文様の判別可能なものは6点あり、菊花文1点、桔梗文1点である。他に、主文様は不明であるが唐草がみられるもの3点、同じく飛雲のみられるものが1点である。桔梗文1点を図示した(第28図14)。

#### ③軒棟瓦

2点出土した。瓦当文様の判別可能なものは勾下文1点のみである。

#### ④棟瓦

37点出土した。冠伏間2点、伏間瓦4点、熨斗瓦7点、菊丸2点、輪違い21点、差込み1点である。菊丸1点(第28図15)、輪違い1点(第28図16)を図示した。

#### ⑤飾り瓦

4点出土した。いずれも2区から出土しており、鬼瓦が3点、菊瓦が1点である。

#### ⑥平板

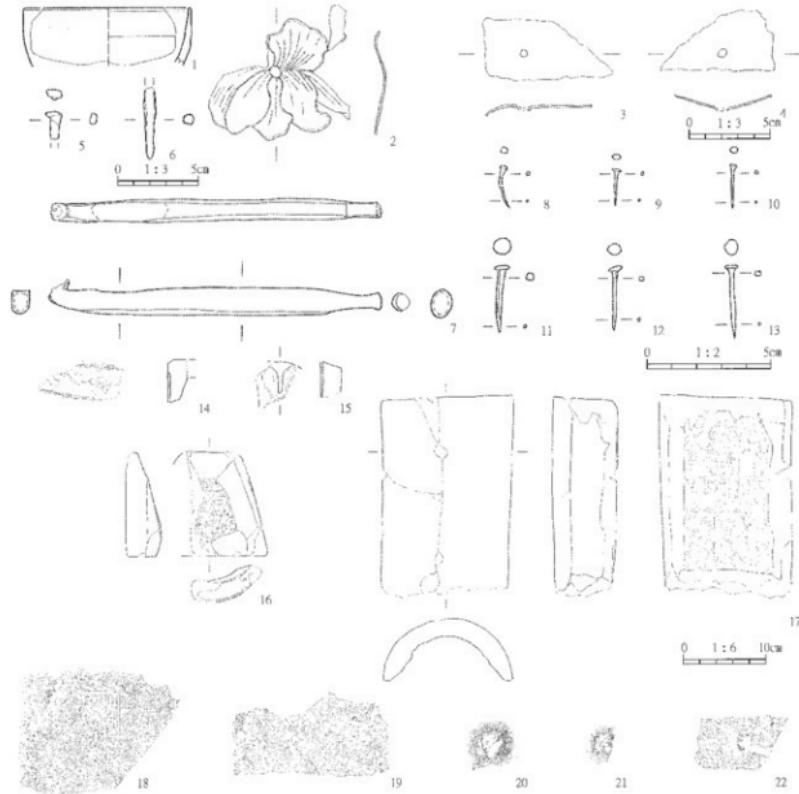
平板(厚)2点、棟付平板4点が出土した。

#### ⑦刻印瓦

刻印のある瓦は14点出土した。すべて平瓦である。うち5点を図示した(第28図18~22)。18はこれまで確認されている明治期の瓦で、「仙台北八番丁渡瀬瓦工場明治世六年」の刻印が見られる。同様の瓦は4点出土している。21は文字が刻印されたものと考えられる。

第9表 第15次調査出土瓦数量表

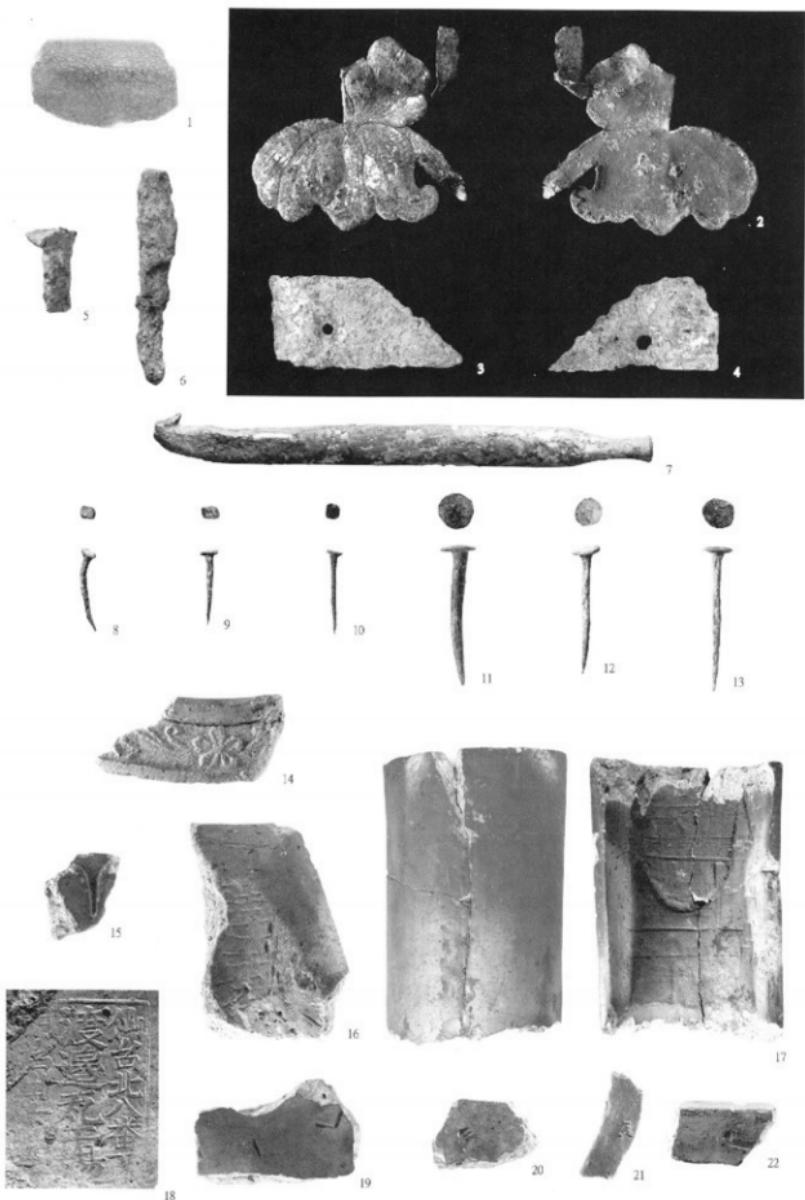
区分	東側	西側	平瓦	軒丸瓦+軒平瓦	軒棟瓦	棟瓦	冠伏間	伏間瓦	熨斗瓦	菊丸	輪違い	差込み	飾り瓦	頭瓦	平板(厚)	棟付平板	不規	計
表様	1		7															9
搅乱	79	340	3														3	40
I	21	26	2	1	1			1			1	1				2	35	
II	13	29									3					1	66	
III	13	30									3						38	
III-1	1	75								1	2							29
III-2		4																
IV-1	1	36																4
IV-2		1																12
KS-22		1																3
KS-33		1																2
KS-12		20																20
KS-28	1	34																34
KS-40	1	12																14
KS-48		2																2
KS-4	14	40			1												3	58
HS-2	150	670	5	2	2			4	4		4	1			3	11	66	
表様	1	1																1
搅乱	14	162	4	3														162
I	2	21		1							1	3					3	3
II	50	415	1				1	1			1					1	2	483
II-上	1	2																2
II-下	19	167									2	3		1				198
III																		1
III-a																		1
III-b	5	34	1					1										42
III-c																		1
III-d																		1
III-e																		1
KS-15		2		1														4
KS-16		5		3														5
KS-18		4																4
SPK-47	105	545	7	5	3	2	3	3	2	2	7	4	3	2		5	990	
計	1,753	1,175	12	7	2	3	7	4	7	2	21	4	1	3	4	10	1,854	



第28図 15次調査出土遺物 (1・5・6・18~22 : S=1/3, 2~4 : S=2/3, 7~13 : S=1/2, 14~17 : S=1/6)

第10表 15次調査出土遺物観察表

番号	種類	実物番号	区	地質・層位	寸法 (mm・g)	名称	件数
1	舟形器	115	2	Ⅱ	口径 90	双輪輪 (輪軸丸)	大楊門馬 16枚
2	金筒形器	246	2	Ⅰ	外径 137.5 高さ 35	高身 4.3	2
3	金筒形器	18	2	Ⅱ	直径 18 高さ 23	高身 2.3	3
4	金筒形器	32	2	KGS-3 壁面下	外径 42.4 高さ 10.0	高身 2.6	4
5	钮釦	77	1	Ⅰ	Φ 17.2	保存率 0.0 計算大きさ 7.7	高身 1.2
6	钮釦	52	1	Ⅰ	Φ 17.3	保存率 0.0 計算大きさ 7.7	高身 1.2
7	钮釦	76	2	Ⅰ	Φ 12.0	Φ 12.0	高身 0.9
8	钮釦	47	1	Ⅰ	Φ 17.0	Φ 17.0	高身 0.8
9	钮釦	17	1	Ⅰ	Φ 17.0	Φ 17.0	高身 0.7
10	钮釦	56	1	Ⅰ	Φ 17.1	Φ 17.1	高身 0.7
11	钮釦	31	1	KGS-5 壁面下	外径 15.5 高さ 7.2	高身 1.3	11
12	钮釦	34	1	Ⅰ	Φ 17.0	Φ 17.0	高身 0.6
13	钮釦	112	1	Ⅰ	Φ 17.0	Φ 17.0	高身 0.7
14	素面瓦当	33	2	KGS-5 壁面下	直径 275	素面瓦当	17
15	素面瓦当	84	1	Ⅲ	直径 291	素面瓦当	15
16	素面瓦当	310	2	Ⅰ	直径 277.5	素面瓦当	16
17	丸	320.34 <sup>a</sup>	1	Ⅰ	直径 290	素面瓦当	17
18	平(縞印)	412	2	縞丸	直径 291	輪形瓦上唇子瓦 (輪形瓦上平)	5
19	平(縞印)	387	2	縞丸	直径 359	縞丸	9
20	平(縞印)	366	2	Ⅱ	直径 347	縞丸	30
21	平(縞印)	434	2	Ⅱ	直径 457	文字瓦	21
22	平(縞印)	307	2	縞丸	直径 350	縞丸	22



第29図 15次調査出土遺物 (1 : S=1/2, 2~13 : S=1/1, 14~16、19~22 : S=1/3, 17 : S=1/6)

## 5.まとめと考察

第15次調査では、以下①～⑩の成果が得られた。

① 大広間落縁の北東角（1区）および南東角（2区）にあたる礎石跡をそれぞれ2基検出した。北東角ではKS-133と東西に延びる搅乱を挟んで南側にKS-426が確認され、ともに搅乱壁面で根固め石が検出された。直接の切り合ひ関係は無いが、以下の点から両者間には時間差があると推測される。まず、KS-133では径5～10cmの根固め石が掘り方の底面近くに集中してみられ、かつ埋土が大広間内部の整地層（Ⅲe層）に類似した褐色粘質土層であることから、藩政期に埋没した可能性が高い点が挙げられる。一方KS-426では、径5～25cmと比較的大型の根固め石がⅢe層上面に一部露出して検出されており、大広間廃絶時まで機能していた可能性が高い。また南東角においては、KS-242がKS-166に直接接続する形で検出され、同様の状況が見られる点も考慮すると、現段階ではKS-133がKS-242に先行するものと推定される。

ただし、今回北東角から南へ、KS-132,425と2基の落縁礎石根固め跡を検出したが、遺構が重複した状況はみられず、上記の推定が大広間の建設等と関連するかは今後の更なる調査が必要である。

② 大広間雨落ち溝跡の北東角および南東角を検出した。縁石はほとんど抜き取られており、玉石を帶状に検出した。特に2区においては、雨落ち溝が先述のKS-242が埋められたⅢb層上面から再度掘り込まれ、改修されていることが明らかとなった。また、雨落ち溝跡南辺では一部縁石が残存した状態で検出されたが、縁石間に充填されていた玉石から約10cm低いレベルで検出されており、現時点では、これら古段階の縁石の上に雨落ち溝の改修に伴い新たな縁石が設置され、それが近代に入り抜き取られたものと解釈している。因みに昨年度調査した雨落ち溝跡北辺でも玉石よりも低いレベルから、古段階の縁石の可能性がある扁平な加工石材を検出している。

③ 1区中央で雨落ち溝跡の掘り方に切られる素掘り溝跡を検出した。これは、埋土や規模からこれまでの調査で雨落ち溝跡西辺および北辺で確認されているKS-84と一連のものと考えられる。

④ 大広間内部の整地層（Ⅲe層）直下から、石敷き遺構を検出した。石敷きは大広間内部から雨落ち溝の外側にも分布しており、断片的ではあるが南北約7m、東西約3mの拡がりが確認された。雨落ち溝跡北東角の北30cmでは、これらの石敷きを伴う礎石（KS-132）を1基検出した。礎石は径35cm程の扁平な安山岩質の石材である。掘り方内に設置後、粘質土（Ⅲ-2層）を貼り、礎石の周縁を一部覆うように玉砂利が敷かれており、昨年度大広間の北側で検出した礎石建物跡と同一時期のものと考えられる。この礎石は、昨年度検出の最も近い礎石から南東約12.5mの位置にあるが、同一建物に属するか否かは今後の課題である。

⑤ 大広間北東周辺において、古い順に南北溝跡2条（KS-407,404）、東西跡（KS-406）、東西方向から南へ折れる暗渠状遺構（KS-405）、東西跡（KS-403）という遺構の変遷が明らかになった。これら区间施設等の変遷が明らかになった事は、大広間と周辺建物または庭園等との位置関係や、御殿配置全体の時間的変遷ひいては本丸御殿における使われ方の変化を考古学的に検討していく上で重要な成果である。

⑥ 中世以前に遡るとみられる遺構を17基検出した。うちKS-410は1区北東部より西へ延びる上幅50～90cm、深さ20～40cmの溝跡を各断面で検出した。検出面はIV層上面である。同一層検出の焼土遺構（KS-411）を切っている。焼土遺構からは年代測定用の炭化物サンプルを3点採取した。また、V層上面から掘り込まれた遺構も10基、断面で確認されており、少なくとも3時期の遺構の変遷が確認された。

⑦ 遺物は、陶器、磁器、上質質上器、金銅金具、銅釘、鉄釘、瓦などが出土したが、特に上質質上器が2区（大広間南東隅周辺）に集中して分布している点が注目される。遺物の廃棄に関わる問題であり、今後その分布については、銅釘など他の遺物と同様に異なる検討が必要である。

⑧ 珪藻分析では、KS-405埋土1層からはほとんど検出されず、堆積速度が速かったか、珪藻が生育できない乾燥した環境であったと推測された。放射性炭素年代測定では、補正<sup>14</sup>C年代値で380±40年BP、440±40年BP、310±40年BPの結果を得た。また、これらの年代値を曆年校正し、概ね15世紀から16世紀に収まる結果が示された。

## V 第16次調査

## 1. 調査目的及び調査経過

第16次調査は、三の丸異門跡の東側周辺を主な対象として、平成18[2006]年9月1日から同年11月30日まで遺構確認のための発掘調査を実施した。最終的な調査面積は472m<sup>2</sup>である。

調査目的は、①長沼の南側に位置し、明治末年に埋没した堀跡（第34図）の位置・規模の確認（1区）、②巽門へ至る登城路南側における、石垣倒溝等の遺構確認（2区）、巽門東脇土塁の構造解明および遺構確認（3区）の3点である。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影、遺物の表面採集等の後、9月4日から安全フェンスを設置し、9月8日から重機による表土の除去作業を開始した。また、重機の入りにくい箇所を中心に、9月12日から人力による表土除去及び潜水面の検出作業を開始した。

堀跡の調査(1区)では、堀の北岸と西岸を確認し、北岸・西岸で上留めのためと考えられる杭列をそれぞれ3列、2列検出した。また、西岸ではやはり上留めのためと考えられる集石を検出した。南岸について確認できなかった。堀の規模は、南北幅が35m以上、深さが現地表面より6m以上となる大規模なものであることが明らかとなった。登城路南側における遺構確認調査(2区)では、幕末～明治期の旧表土を確認したものの、昨年度北側で確認した石組側溝等の遺構は検出されなかった。土壙の調査(3区)では、土壙の積み土を検出し、異なる土を版築状に積んでいることを確



第30図 第16次調査区配置図 (1/800)



第31図 1区調査前現況（南から）



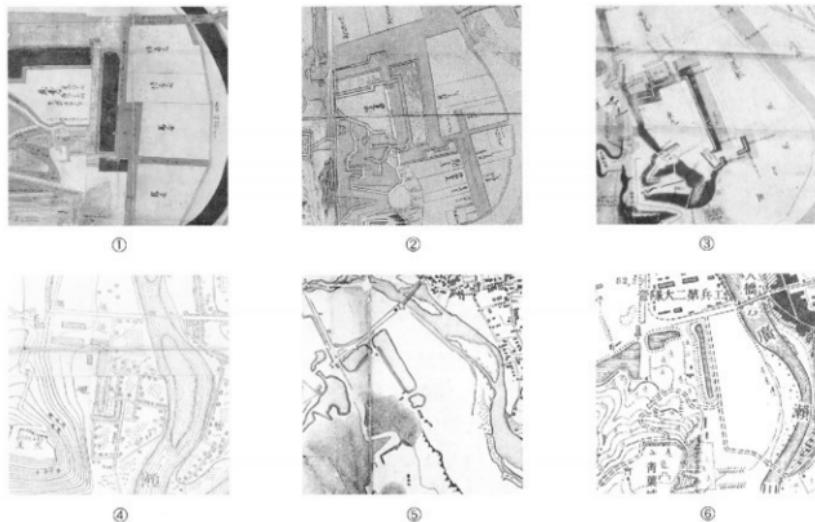
第32図 2区調査前現況（北から）



第33図 3区調査前現況（北から）

認した。また、土壙の頂部から壠跡等に関する遺構は検出されなかった。遺物は、土壙構築後の盛土層とみられるIV層から17世紀後半代を中心とする磁器、陶器、そしてⅢ層から18世紀後半から19世紀前半を中心とする磁器、陶器の他、土師質土器、瓦質土器、土製品、瓦、硯、碁石、簪、釣針、鉄釘など多様な遺物が出土した。

第16次調査は、平成18年3月23日の第12回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了解を得て、第15次調査終了後に実施した。調査の進展に伴い、10月12日、10月18日、10月20日に仙台城跡調査指導委員会、また10月30日に宮城県の現地指導をそれぞれ受けた上で、10月26日に記者発表（7社）、10月28日に現地説明会を実施した（181名参加）、11月10日に再び調査指導委員の現地指導を受け、同日開催した第15回仙台城跡調査指導委員会において調査成果の報告を行い、了承を得た。11月15日には調査区の埋め戻しやフェンス撤去等の作業を終え、調査箇所は現状に復した。平成19年3月23日に第16回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な確認を行った上で、本報告書を刊行するに至った。



第34図 絵図・地図からみた堀の変遷

## 2. 旧地形及び基本層序

現在、仙台市博物館のある三の丸跡は広瀬川右岸に形成された下町段丘面上に位置しており、その東側に残る全長約250mの堀跡（現長沼）との間には、比高約10mの段丘崖が形成されている。昨年度の調査では、長沼方向への岩盤の急激な落ち込みが確認されており、現存の堀跡（長沼）についても、旧河道のような元來の地形を利用したものと推定される。今回I区での調査対象とした埋没堀跡についても同様な旧地形を利用した可能性が高い。以下、各区毎に基本層の概要について述べる。

## (1) 1区

1区の基本層はI～XⅢ層に大別した(第11、12表)。必ずしも全てに直接的な上下関係は無いが、概ね年代の新しい順に記述し、層の特徴、検出遺構との上下関係、特徴的な出土遺物について概要を述べる。

I層は現表土層である。II層は、近代以降に堆積した砂礫層で多量の炭ガラを含んでおり、調査区全域に分布する。西側斜面からの流入土で、亜炭の採掘が行われる戦後の堆積物とみられる。5層に細分した。III層は、ラミナ状の構造をもつ水性堆積層である。上面には草など湿地性の植物遺存体が集積している。III層の堆積により、堀はほぼ完全に埋没したものとみられる。IV層は、自然木や伐採痕のある木を多量に含む黒色の腐食土層である。I区中央を最深部として周囲より流れ込んでおり、明治26年の地図(第31図⑤)で現長沼の南に見られる沼(堀の残存)の底面に堆積したものと考えられる。IV層からは近代に属するレンガや堤防の土管などが出土しており、この頃、周囲で大規模な伐採等が行われたものとみられる。また、下駄、桶等の木製品が出土している。V層は、西部斜面のII層直下にみられる旧表土層である。近現代の磁器が1点出土しており、IV層堆積時の表上であった可能性がある。VI層は、III層に類似したラミナ状の構造をもつ粘質土層で、堀内の水性堆積物である。19世紀後半の漁戸差譲の急須が1点出土している(第63図1)。このVI層直下のIX層は調査区最深部にあたり、近世の堆積層とみられるところから、堀内の堆積物はII層、IV層、VI層と約6mの厚さにわたり、全て近代以降のものである。また、III・VI層は水性堆積層であり、堀は少なくともこの地点においては人為的に埋められたものではなく、明治初年より約70～80年の間に、ほぼ自然に埋没したものと考えられる。

VII層は、近代に調査区北部に構築された暗渠状遺構を直接覆う崩落土である。VIII層は、この暗渠状遺構を構築する際の盛土層で3層に細分した。いずれも北部のみに分布する。IX層は、VII層直下の崩落土層である。上面の一部に植物遺体を含む腐食土層が見られ、一定期間、岸であった可能性が考えられる。IX層から遺物の出土は無い。

X層は、古段階の北岸盛土層(XX層)の平坦部分にのる旧表土層(細砂層)で、藩政期から近代暗渠状遺構が構築(VII層)されるまでの路面であったと考えられる。現地表面とのレベル差は1.1mで、調査区最深部とのレベル差は5.25mである。

XI層は、新段階の北岸盛土(XV層)直上にみられる砂礫を含む水性堆積層である。XV層上面に構築された杭列3(しがらみ状遺構)を直接覆っている。遺物は、19世紀代の瀬戸内美濃の碗が1点出土している。

XII層、XIII層は、西部のV層直下にみられる西側斜面からの崩落土である。それぞれ3層、9層に細分した。X层は砂層と粘質シルト層が交互に堆積しており、一定期間、連続的に小規模な崩落が起きたものと推測される。

XIV層は、堀跡西岸の新段階の盛土層である。直上にはIV層、XIII層が堆積する。杭列4構築後の盛土とみられ

第11表 第16次調査1区 基本層の概要

層名	上層の組成	下層
I	現表土層	現表土層
II	崩落土、盛土	西側斜面を含む崩落土層(物波)：II層直下の近代以降の低土層、5層に細分
III	水性堆積層	古代の堀内へ向かう傾斜層：上面にあなたの断面進行体を有する
IV	人為堆積層	古代の堀内堆積層：自然木、伐採木を多量に含む盛土層
V	旧表土層	西側斜面を含む旧表土層：IV層に接する
VI	水性堆積層	古代の堀内へ向かう傾斜層
VII	崩落土	古代の堀内へ向かう傾斜層
VIII	近代盛土層	古代の堀内へ向かう盛土層：II層直下にII層に接する3層に細分
IX	崩落土層	堆積層直下の古表土層：北河西岸のみ確認
X	旧表土層	堆積層：IX層直下の古表土層
XI	水性堆積層	北河盛土(第：XV層)：以上の水性堆積層、杭列3を覆う層
XII	崩落土層	西側斜面を含む崩落土層：I層に接する
XIII	崩落土層	西側斜面を含む崩落土層：II層に接する
XIV	盛土層	西側斜面を含む崩落土層：II層に接する
XV	崩落土層	西側斜面を含む崩落土層：II層に接する
XVI	旧表土層	西側斜面を含む崩落土層
XVII	水性堆積層	古表土と土骨を複数の水性堆積層：2層に細分
XVIII	水性堆積層	古表土と土骨を複数の水性堆積層：2層に細分
XIX	盛土層	古表土(第：XV層)：II層に接する
XX	盛土層	古表土(第：XV層)：II層に接する
XXI	盛土層	古表土(第：XV層)：II層に接する

る。上面は、杭列4の東側で一部平坦（東西幅約1m）となった後、堰底に向かって傾斜している。その上面には径5～15cmの円礫の集中がみられ、また層の落ち際から斜面に沿って杭列5が検出された。

XV層は、新段階の北岸盛土層である。杭列2を完全に覆い、上面に杭列3が構築される。4層に細分した。遺物は、16世紀末から17世紀初めの志野の鉢（？）が出土しており（第66図78）、堆積年代の上限を示している。

XVI層は、古段階の北岸盛土層（XX層）の斜面に堆積した崩落上で杭列1を覆っている。粘質土と細砂が一部ラミナ状に堆積しており、杭列1が露出していた段階の崩落土とみられる。4層に細分した。遺物の出土は無い。

XVII層は、古段階の西岸盛土層（XXI層）上面の集石を覆う旧表土層である。本層は、階段状（4段）に検出された集石の最上段にのみ分布する。XVIII層は、集石の2段目落ち際から4段目までを覆う水性の腐植土層である。2層に細分した。遺物は、XVIII層から丸瓦、平瓦等の小片が6点出土している。

XIX層は、調査区最下層で確認した粗砂層で、レベルは24.65mである。現地表面とのレベル差は最大6.35m、X層（古段階北岸盛土上面の旧表土）とのレベル差は5.25mである。遺物は、常滑の中里陶器1点、17世紀代の美濃の香か1点、17世紀中頃の唐津の鉢1点の他、三巴文の軒丸瓦1点が出土している（第53図30、31、32、第50図85）。今回の調査では確実な堆積は確認できなかったが、本層が粒度の粗い砂層であることから、比較的底に近い藩政期の堆積物であるとみられる。

XX層は、古段階の北岸盛土層である。砂質シルト、粘質シルトより成る。6層に細分した。版築状の堆積構造がみられる。杭列1はこの段階に伴うものとみられる。

XXI層は、古段階の西岸盛土層である。粘質シルト、シルト質粘土より成る。8層に細分した。版築状の堆積構造がみられる。上面は、4つの傾斜面と3つの小段から成り、各面に円礫の集石がみられた。

## （2）2区

2区の基本層は、5層に大別される。I層は現表土層である。II層は近代以降の盛土層で3層に細分した。IIc層上面で、1区からも検出された暗渠状遺構が検出された。III層は黒褐色の腐植土層で旧表土層とみられ、上面は北側へやや傾斜している。遺物は19世紀後半の漁具のほかの白磁角皿1点（第51図3）の他、18～19世紀前半の肥前の染付碗等が出土している。幕末頃から近代暗渠状遺構構築までの旧表土であったとみられる。IV層は、III層直下にみられる砂質シルト層で2層に細分した。崩落土層とみられるが、詳細は不明である。V層は径5～40cmの円礫から成る礫層である。北壁寄りで、東西1.7m、南北1mの範囲で検出した。礫層中には木端石や瓦片が含まれており、暗渠等の人為的なものである可能性も考えられる。なお、今回の調査でIV層とV層の前後関係について、確証を得ることはできなかった。

## （3）3区

3区の基木層は、6層に大別される。I層は表土層である。3層に細分した。Ic層は融解した多量のガラス片等を含んでおり、昭和20年空襲時の表土とみられる。II層は近代以降の盛土層で6層に細分した。IIc～eの3層は南側の土塁部のみにみられる。上星北側のIII層直上にのるIIb層からは、レンガや腐植の著しい多量の不明鉄製品が出土している。III層は黒褐色の砂質シルト層で、層厚は30～50cmである。18世紀後半から19世紀前半を主体とする陶磁器の他、瓦、管（かんざし）、釣針、硯、碁石、水晶など多様な遺物が出土している。なお、III層最下部の厚さ3～5cmのところからは遺物の出土がほとんど見られなかった。明確に分層は出来なかったが遺物が廃棄されるまでの表土であった可能性がある。IV層は、III層直下の盛土層で褐色土と暗褐色土の互層である。4層に細分した。層厚は20～40cmである。遺物は17世紀代の陶磁器の他、寛永通宝（古寛永）が出土している。なお、IVa層の分布範囲が部分的であるため、一部III層と接するIVb層上面からは18世紀前半の磁器皿（第52図26）が出土している。V層は黒褐色の砂質シルト層で、層厚は約30cmである。上面が硬化している。遺物は出土していない。VI層は土塁積み土で、調査区の最下層である。4層に細分した。土塁全体としては特徴の異なる土層を交互に積んでいる。

### 3. 検出遺構

#### (1) 1区

##### 【概要】

1区では堀跡の北岸と西岸を検出し、規模は、南北幅35m以上、深さは現地表面より6.35m以上である。また、北岸盛土層（XX層）直上で、藩政期～近代の旧表土層（X層）が確認されており、この面から最深部までの深さは5.25mである。堀内堆積物の大部分（少なくとも4m）は、近代以降の自然堆積層であり、少なくとも調査地点では、堀は自然に埋没したものとみられる。今回の調査区では、最下層の粗砂層（IX層）のみが藩政期の堀内堆積物である。なお今回、確実な堀底については未確認であるが、このIX層は、粒度の粗い砂層であることから、比較的の底面に近い堆積物であると推測される。また、堀の水位について、北岸、西岸それぞれの盛土直上にのる水性堆積層のレベルをみると、北岸のXI層は28.520mで、新段階の北岸盛土形成後、杭列3機能時の水位を示す可能性がある。また、西岸のXV層は28.480mで、新段階の盛土（XIV層）が堆積するまでの水位を示す可能性がある。

北岸では、一部版築状の特徴をもつ盛土（古段階：XX層）によって岸が形成されていることを確認した。層厚は1.8m以上である。また、その後南側への盛土（新段階：XV層）によって、新段階の北岸を形成している。これらの変遷の中で、3つの杭列が北から南へ段階的に構築されている。

西岸でも北岸と同様、一部版築状の特徴をもつ盛土（古段階：XXI層）を確認した。藩政期の絵図では、この箇所は土堤となっており、その斜面が同時に堀の西岸となっていたと考えられる。また、この盛土に東西方向の断ち割りを行ったところ、層の堆積がほぼ水平であることが確認された。盛土以前の原地形は不明であるが、ほぼ水平に土を積み、西岸（上岸）の壁面を形成したものと考えられる。その上面は階段状となり、各段には円礫による集石が確認された。西岸でもその後、新たに盛土（新段階：XIV層）され、それと前後して杭列4、5が構築されている。以下、各検出遺構について個別に記述する。

##### 【北岸検出遺構】

・杭列1 北岸（古段階）の落ち際ラインから南へ約10cmで、径約11cmの杭を東西に2本検出した。杭列の傾きはE-14°-Nである。いずれも北岸（古段階）の崩落土であるXVI層に覆われていたが、杭の上部は腐植が著しく加工痕跡等は確認できなかった。東西2本の杭の間隔は4.2mであるが、中間の杭についてはコンクリート杭があるため確認できなかった。杭の設置面は不明であるが、その位置関係から古段階の北岸に伴う可能性が高い。

・杭列2 杭列1の南約3mで検出された。縦杭と横杭が組んだ状態で検出され、上述のコンクリート杭を挟んで東西で確認された。杭列の傾きはE-7°-Nである。まず東側では、上端を水平に切られた径12cmのたて杭が1本と、その上端から約60cm下で直交する径11cmの横杭1本を検出した。両者を固定した痕跡は特に確認されなかった。また、縦杭に見られる枝の切り残しが下向きであることから、現場で打たれたものではなく、盛土する前に設置されたものと考えられる。西側では、約20cmの間隔で直立する径10～12cmの縦杭2本とそれらに直交する径7～10cmの横杭2本を検出した。縦杭の上端は2本とも水平に切られた状態であった。上下2段の横杭には、幅1～2cmの竹材を少なくとも5本巻きつけ固定した痕跡が確認された。また、縦杭には、枝の切り残しが下向きに見られることから、東側と同様盛土する前に設置されたものと考えられる。さらに杭の北側では、XVd層上面で南北方向に延びる径2cm程の竹を1本検出した。竹は約2.2mの長さで検出されたが、北端は腐食しており、杭列1の西杭から南へ約45cmの箇所で止まった状態であった。南端は、2段の横杭を留めた竹材に繋がるものとみられる。これらは新段階の北岸盛土に伴うものと考えられる。

・杭列3 大部分が調査区の東側に貼り付いた状態で検出された南北方向の杭列である。平面的には、南北に約4.2m延び、南側でわずかに西へ湾曲した状態で確認された。打込み面はXV層上面である。杭の周囲には打込みによる層の落ち込みが確認された。杭は径4～10cmで12本検出された。さらに杭列上部の幅20～35cm、長さ185cmの範囲には、幅2～3cmの竹材が少なくとも十数本、杭に編み込まれており、竹材の間隙には砂礫の堆積が見られた。

杭列3の年代について、上限については不明であるが、直接覆っているXⅠ層より19世紀代の磁器が出上していることから、この頃までは機能していたものと推定される。

#### 【西岸検出遺構】

・集石遺構 集石は、階段状に盛土されたXⅠ層の上面で、一部見られない箇所もあるが、最大で東西7.5m、南北3.2mの範囲から検出された。円礫の大きさは、径10~20cmのものが主体を占める。西岸（土堤）の壁面は4つの傾斜面と3つの小段より構成される。傾斜面は、西側より1段目、2段目、3段目、4段目とする。まず各面の傾斜度をみると、1・2段目が $29^{\circ}$ 、 $32^{\circ}$ 、3・4段目が $7^{\circ}$ 、 $10^{\circ}$ で、上下各2段の間には傾斜度に明確な違いがみられる。小段の高さは、下から20cm、20cm、30cmである。集石直上の水性堆積層であるXⅦ層は、2段目と3段目の間の小段部分より堆積しており、これは丁度、西岸壁面の傾斜変換点にあたる。なお、調査期間中、1段目の中腹より常に一定量の湧水がみられ、特に集石の見られない部分では壁面の崩落が確認された。

・杭列4 西岸壁面の傾斜変換点より東へ約3.5mの箇所で検出された、南北方向の杭列である。杭列の傾きはN- $22^{\circ}$ -Wである。また、XIV層（新段階西岸盛土）上面から10~30cm上部が露出するものの、杭の周囲で打込み等による層の落ち込み等は確認されなかった。XIV層の盛土以前に構築された可能性も考えられる。杭列は、径10~18cmの縱杭を6本検出した。4本に上部の先端部が見られ、明瞭な加工痕が見られないことから、これらは腐植によるものと判断した。ただし南から4本目の杭のみ、上端部を水平に切られた状態であった。なお、杭列1、2で見られた枝の切り残しは見られなかった。また、杭列東側の平坦面とその落ち際では、東西1.2m、南北4mの範囲に径5~10cmの円礫を主体とする集石が確認された。盛土との関係については、古段階と新段階の両者に伴う可能性が考えられる。

・杭列5 杭列4の東約20~120cmで検出された南北方向の杭列である。杭列の傾きはN- $35^{\circ}$ -Wである。設置面はXIV層上面である。杭列は、杭列4の東側にみられた平坦面の落ち際に上端部を揺え、傾斜面に沿った状態で検出された。杭は径10~15cmで、少なくとも4本は上端部が水平に切られた状態で計8本確認された。盛土との関係については、新段階に伴うものとみられる。

#### (2) 2区

2区は、昨年度登城路北側で確認された石組側溝と対になる遺構の検出を目的として設定されたが、今回の調査では確認されなかった。遺構としては、IIc層上面で検出された近代以降の暗渠状遺構が、地表面下約1mで検出されたに過ぎない。また、19世紀代の単表土層（III層）が地表面下約1.2mで確認された。さらにⅢ層直下からは、調査区北壁寄りで、東西1.7m、南北1mの範囲から径5~10cmの円礫が密集した状態で検出された。部分的な検出であり、性格が不明であるため、今回は基木層V層（礫層）として扱った。上面のレベルが昨年度の第4、6トレンチで検出した礫層（下町段丘基底礫層に比定）に近いことから、段丘礫層である可能性も考えられる。ただし、V層中には木端石や瓦片が含まれており、暗渠等の人の為的な遺構である可能性も否定できない。

#### (3) 3区

土塁頂部では、跡跡等の遺構確認を目的としたが、特に柱穴等の遺構は確認されなかった。土塁内側の平坦部では、地表面下80cmで18世紀後半から19世紀前半を主体とする遺物包含層（Ⅲ層）と、また、その直下より17世紀後半を主体とする遺物包含層（IV層）を検出した。さらに、IV層直下のV層（無遺物層）を挟み地表面下1.7mで土塁積み土を検出した。土塁は平面的には、3区南東部付近で東西方向より南北方向に向きを変える。3区東壁では、南北方向の土塁壁面が検出され、昨年度と同様、版築状の積み土を確認した。土塁壁面の傾斜度は約 $48^{\circ}$ であるが、西側へ延びるに従いほぼ平坦となり、先述のV層直下に連続する。



北部杭列2検出状況 (南から)



北部杭列1・2検出状況 (南西から)



北部杭列1・2・3検出状況 (北から)



1区全景 (南西から)



北部杭列3検出状況 (西から)



北壁断面合成写真 (1/100)

Y=2,470

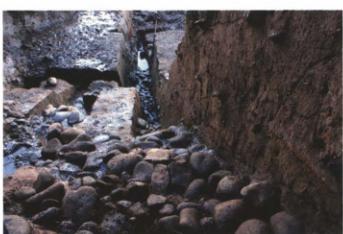
X=194,020



北部杭列3拡大 (南西から)



西部集石検出状況 (東から)



西部集石検出状況 (西から)



西部集石断ち割り断面 (北東から)



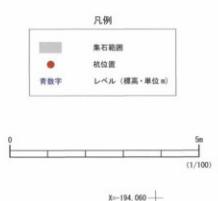
西部集石・杭列4・5検出状況 (北東から)



西部杭列検出状況 平面合成写真 (1/100)



北・東壁断面状況 (南西から)



第35回 第16次調査1区 全体遺構平面図 (1/100)

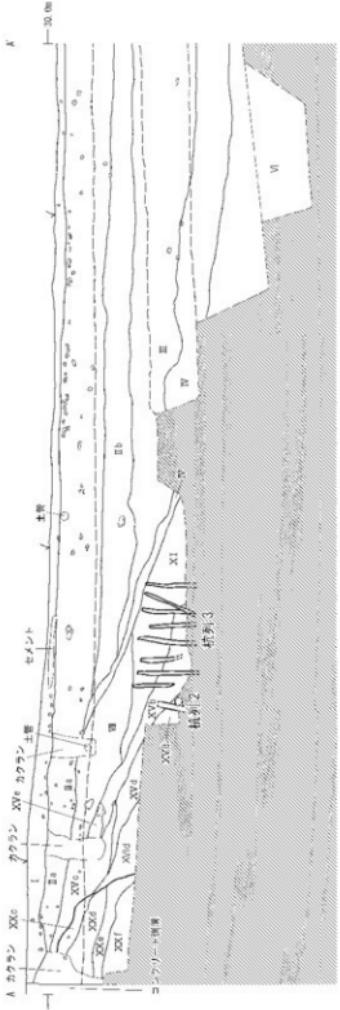
Y=2,450

X=194,020

4



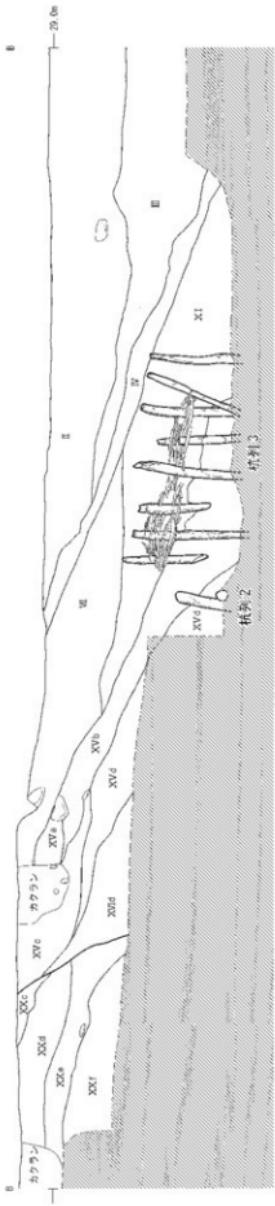
東壁断面合成写真 (1/100)



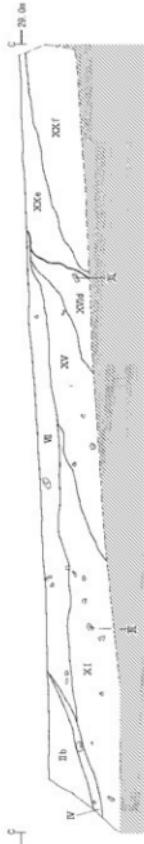
東壁斷面圖 a



東壁断面図 b



北部西側溝西壁斷面圖



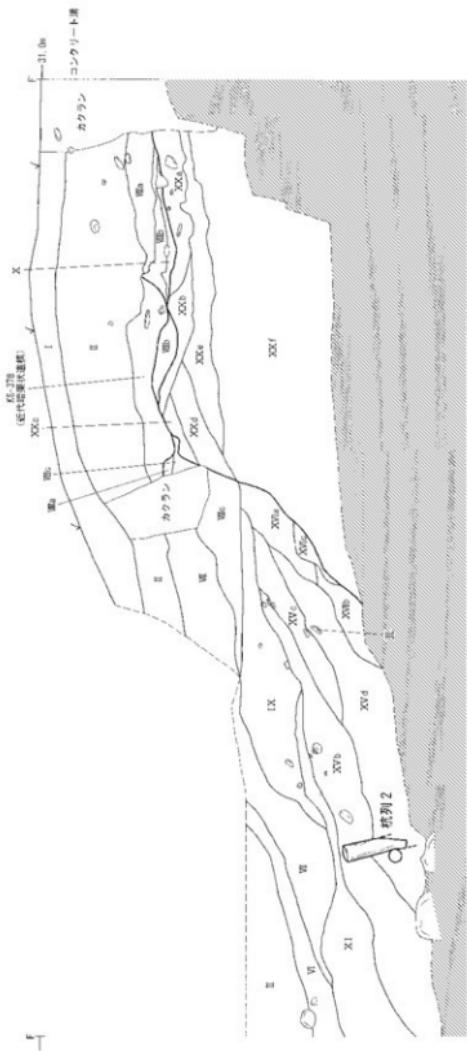
北部東側溝西壁断面図



北西部電信圖



北部西側溝西壁断面図



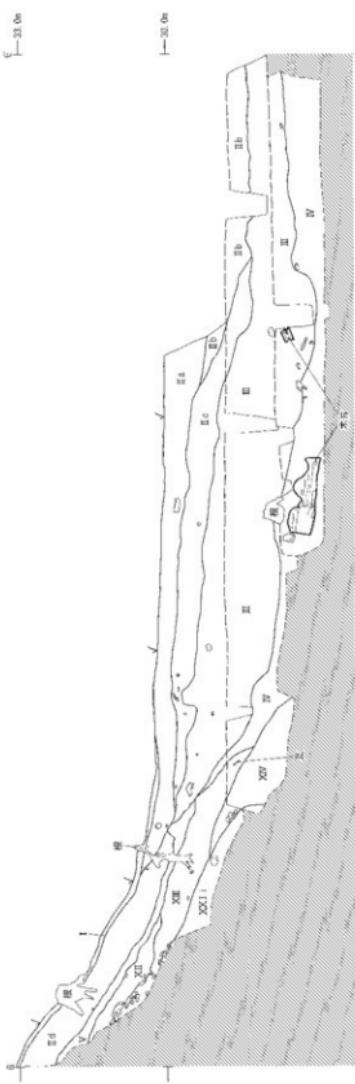
第38回 第16次調査 1区断面図3 (1/50)

— 33.0m

第39圖 第16次調查 1区断面図 4 (1/100)

— 0m

北壁断面図



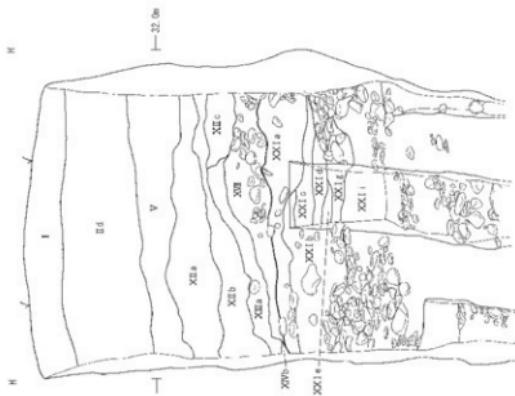
第40图 第16次調查 1区断面図 5 (1:50)

0 20

西側溝壁断面図



西壁断面図



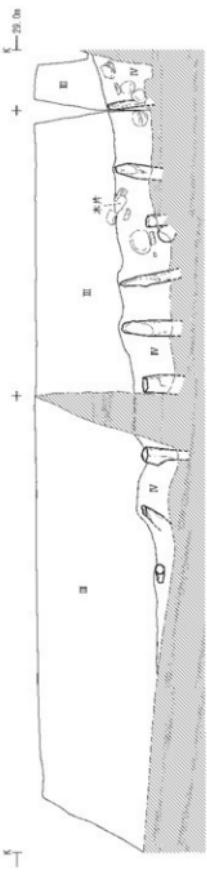
N

— 22 m

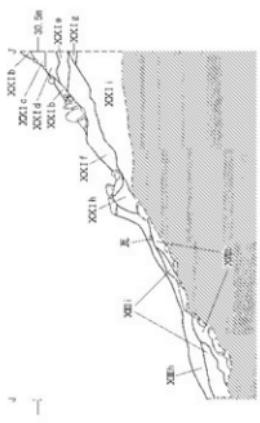
10

第41図 第16次調査 1区断面図 6 (1:50)

西部坑4検出断面図



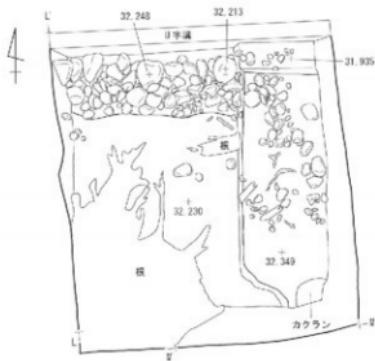
西部坑4検出断面図



第12表 第16次調査1区土層注記表

Y=2,455  
X=194,020 +

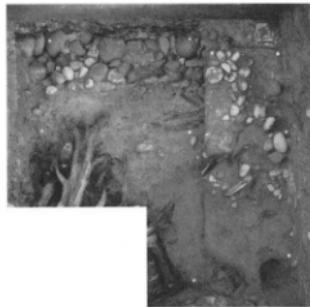
Y=2,455  
+



X=194,024 +

+

平面図



平面合成写真



西壁断面図

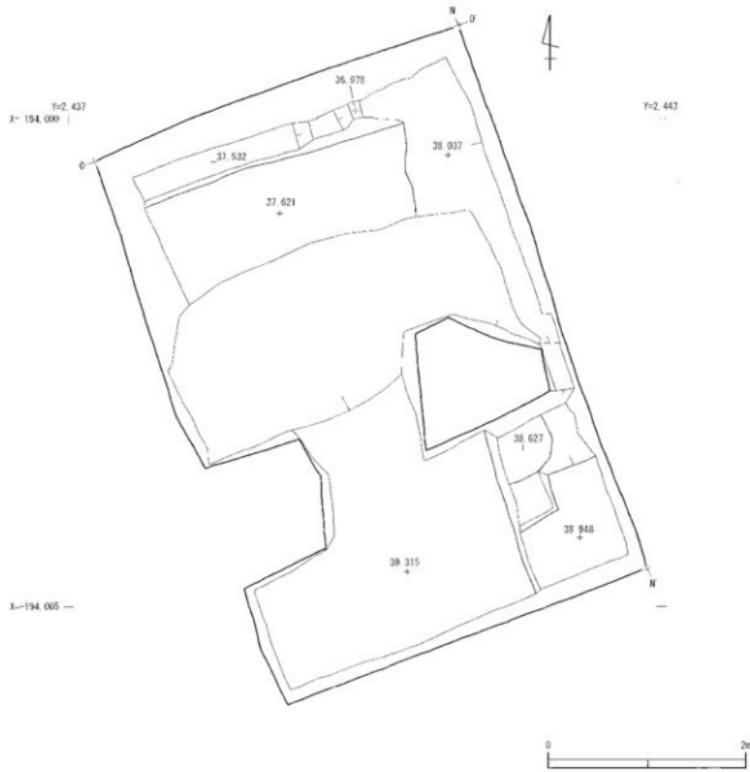


南壁断面図

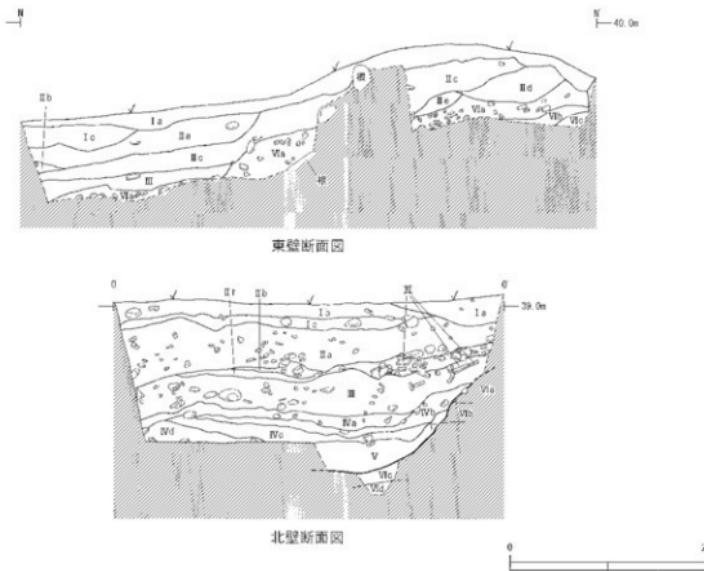
第42図 第16次調査 2区平・断面図 (1/50)

第13表 第16次調査 2区土層注記表

道耕番号	場所	土色		土質		特徴	備考
		土色No	土色	目	粒度		
I	10YR3/2	深褐色	砂質シルト	有	粗		
IIa	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	有	細	0.3~10mmの粗粒岩粒を多量含む。白鐵、炭化ガラスやや多く含む	
IIb	10YR4/5	にじいろ褐色	砂質シルト	有	中	1.1~5cmの粗粒岩ブロックを多量含む。白鐵を少量含む	
IIc	10YR5/2	灰褐色	砂質シルト	有	中	1.1~5cmの粗粒岩粒をやや多く含む。鉄分を含む。上面に弱風状送積	
III	10YR3/1	深褐色	砂質シルト	有	粗	固表面	
IVa	10YR4/2	灰褐色	砂質シルト	有	中		
IVb	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	無	中	結晶十か	
V	-	-	下石層	-	-	鉄錆、瓦片、木炭石を含む	



第43図 第16次調査 3区平面図



第44図 第16次調査 3区断面図 (1/50)

第14表 第16次調査 3区土層注記表

測定部号	層位	I	II	III	IV	V	備 考	
							性状	成まり
I a	107R27	灰褐色	砂質シルト	薄	無	無	泥炭土層	
I b	107R27	褐褐色	砂質シルト	薄	無	無	0.1~3cmの凝灰岩塊をやや多く含む 現代の礫土層	
I c	107R27	黒褐色	砂質シルト	無	無	無	0.1~3cmの凝灰岩塊を少多含む 無駆したガラス片を多量含む 飯田20年以降の沿岸砂	
II a	107R27	暗褐色	砂質シルト	薄	無	無	0.1~10cmの凝灰岩塊を多量含む	
II b	107R27	暗褐色	砂質シルト	中	無	無	シング、西向き斜面を多量含む	
II c	107R27	暗褐色	砂質シルト	薄	無	無	0.1~10cmの凝灰岩塊を少量含む	
II d	107R27	暗褐色	砂質シルト	薄	無	無	カクラン、板状結晶	
II e	107R27	暗褐色	砂質シルト	無	無	無	カクラン、板状結晶	
III f	107R27	褐色	シート雲母	無	中	無		
III g	107R27	紫褐色	砂質シルト	有	中	無	0.5~2cmの凝灰岩塊をやや多く含む 斜面植物付生層	
IV a	107R27	褐色	赤褐色シルト	有	無	無	0.5~5cmの凝灰岩塊をやや多く含む 表面植物付生層	
IV b	107R27	暗褐色	砂質シルト	無	中	無	表面植物付生層	
IV c	107R27	褐色	赤褐色シルト	有	無	無	表面植物付生層	
IV d	107R27	暗褐色	砂質シルト	無	中	無	表面植物付生層	
V	107R27	褐色	砂質シルト	有	無	無	0.2~4cmの凝灰岩塊を少量含む 一部土面が碳化	
Via	2.5YR2	暗褐色	砂質シルト	有	中	無	0.5~20cmの凝灰岩、その他円錐形多角柱 多量純ミナ	
Vib	2.5YR2	暗褐色	砂質シルト	有	無	無	10.135g/100g凝灰岩塊シルトを含む3~5cmのブロックに多量含む 上層純ミナ	
Vic	107R27	灰褐色	粘質シルト	有	無	無	多量粘土	
Vid	107R27	灰褐色	粘質シルト	有	無	無	0.7340g/100g粘質シルトを含む3~5cmのブロックにやや多く含む 上層純ミナ	



1区全景（南から）



1区全景（北東から）



1区北部東側側溝西壁断面（南東から）



1区北部東側側溝断面、杭列1検出状況（南西から）



1区北部西側側溝杭列1・2検出状況（北から）



1区北部西側側溝杭列2を留める竹の検出状況（北西から）



1区北部西側側溝杭列2検出状況（南から）



1区北部西側側溝横机を留める竹検出状況（南東から）



1区北部東側側溝杭列2検出状況（北東から）



1区北部東側側溝杭列2杭上端の切断面（西から）



1区北部東側側溝杭列2検出状況（北西から）



1区北部東側側溝杭列3アップ（南西から）



1区西部全景（東から）



1区西部集石検出状況（北東から）



1区西部土壌積み土東西断ち割り断面（北から）



1区西部杭列4・5、集石検出状況（北東から）



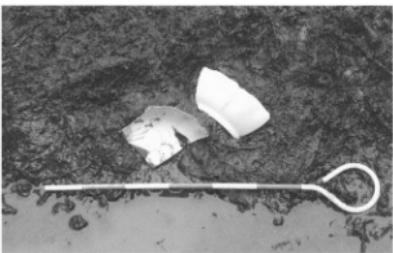
1区西部杭列4・5検出状況（南東から）



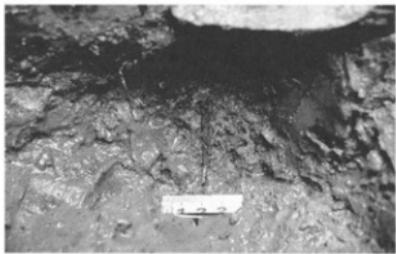
1区西部杭列4・5検出状況アップ（東から）



1区南部深堀断面状況（南から）



1区北部IV層磁器深皿（No.252）出土状況



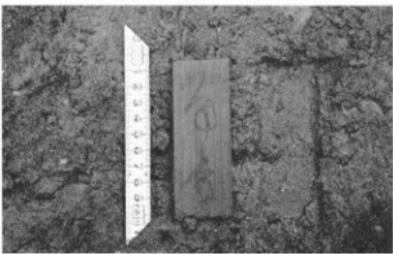
1区北部西側側溝杭列2直下鉄釘（No.71）出土状況



1区北部XII層漆器（No.66）出土状況



1区北部西側西側側溝VI層下駁（No.864）出土状況



1区北部西側側溝IV層木簡（No.69）出土状況



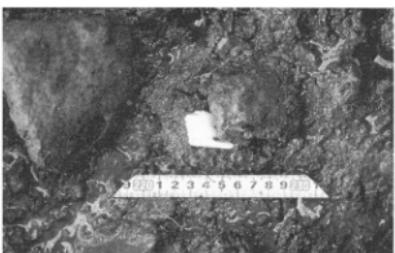
2区全景、土壌、石組側溝（南東から）



2区全景（東から）



2区壁層（V層）検出状況（北から）



2区IV層磁器角皿（No.57）出土状況



3区全景（北西から）



3区東壁断面（西から）



3区東壁上蓋積み土検出状況（西から）



3区北壁断面（南西から）



3区土壌積み土検出状況（南西から）



3区III層上面遺物出土状況



3区III層遺物出土状況（南東から）



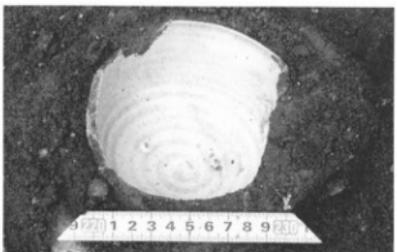
3区III層上面染付鉢（No.2）出土状況



3区III層染付瓶（No.12）出土状況



3区III層染付深皿（No.14）出土状況



3区III層陶器碗（No.101）出土状況



3区III層陶器瓶掛（No.18）出土状況



3区Ⅲ層上面焰烙（No.5）出土状況



3区Ⅲ層土製品（猫No.48）出土状況



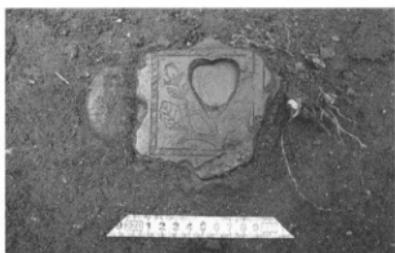
3区Ⅲ層軒平瓦（No.109）出土状況



3区Ⅲ層釣針（No.50）出土状況



3区Ⅲ層甕（No.44）他出土状況



3区Ⅲ層特殊瓦（No.54）出土状況



1区作業風景（南東から）



現地説明会風景（南西から）

#### 4. 出土遺物

各遺物の出土点数については、区・遺構・層位別の数量表（第15～19表）を作成し、報告書掲載遺物については観察表（第20～27表）を付した。なお、陶磁器の点数は、接合・分類作業を行い同一個体と判断されるものを1点とし、それ以外は全て破片数として算出した。一括性の高い3区・IV層出土の近世陶磁器については5. 考察で詳述するため、ここでは概要を述べるに留める。

##### (1) 磁器（第15表、第51、52図）

近世磁器は191点出土した。1区では、比較的上層からの出土が多い。近現代の陶磁器はVI層より上層で出土している。また、攪乱から古染付の変形皿が1点出土している（第51図2）。2区では、旧表土層（Ⅲ層）から19世紀後半の白磁角皿（第51図3）が出土しており、層の年代を知る上で重要な資料である。3区では、Ⅲ層、IV層から層位的に近世磁器が出土した。それぞれ18世紀後半～19世紀前半、17世紀を主体とする一括資料である。产地は肥前が圧倒的に多く瀬戸美濃、中国（？）が僅かにみられる。器種は、Ⅲ層では碗が48%で最も多く、他に皿、鉢、段重、瓶、香炉、水滴などがみられる。IV層では、出土点数が10点と少ないものの皿が半数を占め、瓶、鉢がこれに続く。

##### (2) 陶器（第15表、第53、54図）

近世陶器は242点した。1区では、藩政期の堀底堆積物であるXIX層から出土した常滑の中世陶器、17世紀中頃の唐津の鉢、17世紀の美濃の香炉が注目される（第53図30～32）。3区では磁器と同様に一括資料がⅢ・IV層から層位的に出土した。产地は、Ⅲ層では大堀相馬が全体の71%を占め、他に小野相馬、肥前（吉津含む）、京・信楽系、瀬戸美濃、岸系、堤などがみられる。器種は、碗が47%で最も多く、他に皿、鉢、瓶類、土瓶・急須、仏飯器、香炉、水滴がみられる。IV層では、点数は少ないが肥前、丹波、岸系などの資料がみられる。器種は、碗、擂鉢、香炉がみられる。

##### (3) 土師質土器（第15表、第55図）

土師質土器は82点出土した。3区Ⅲ層から64点とまとまった出土がみられる。皿が多い。ほとんどが法量復元のできない小片であるため、口径等に関して全体的な傾向を知ることは困難である。口径の計測または復元できた皿は、3区Ⅲ層出土の4点のみである（第55図70～73）。径の小さい順に50mm、66mm、80mm、132mmであり、一定のまとまりはみられない。より小さい3点には口縁部内外に炭化物、油煙の付着が見られ、灯明皿と考えられる。また、第55図75は擂鉢のミニチュア土器で、内面には筋目がみられる。なお、この資料は胎土がやや白味がかったり、皿が赤褐色であるとの特徴を異にする。

第15表 第16次調査出土陶磁器他数量表

区	遺構・層位	組群	角皿	蓋・深鉢	土瓶質土器	瓦質土器	土気器	レンガ	その他	計
1	表土	3	2	23	17	—	—	—	1	72
	浅草	3	2	36	—	3	—	—	—	32
	Ⅰ層	4	1	2	3	3	—	—	—	12
	Ⅱ・Ⅲ層	3	—	20	—	—	—	—	—	23
	Ⅳ層	9	9	72	6	8	—	—	—	104
	Ⅴ層	7	2	3	2	—	—	—	—	5
	Ⅵ層	2	4	5	—	—	—	1	—	13
	VII層	—	—	1	—	—	—	—	—	1
	VIII層	—	2	1	—	—	—	—	—	4
	XI層	1	—	3	—	—	—	—	—	4
	ⅩⅡ層	—	—	1	—	—	—	—	—	1
	ⅩⅢ・ⅩⅣ層	—	—	1	—	—	—	—	—	2
	ⅩⅤ層	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2	表土	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	Ⅰ層	—	—	—	1	3	—	—	—	4
	Ⅱ層	—	2	1	3	—	—	—	—	10
	Ⅲ層	—	—	2	—	—	—	—	—	2
	Ⅳ層	—	1	—	—	—	—	—	—	2
	Ⅴ層	—	2	—	—	—	—	—	—	2
	表土	1	—	2	—	—	—	—	—	3
	Ⅰ層	11	10	10	2	3	—	—	—	36
	Ⅱ層	3	—	—	1	1	—	—	—	2
	Ⅲ層	123	192	—	64	34	11	—	1	415
	Ⅳ・Ⅴ層	3	1	—	—	—	—	—	—	4
	Ⅵ・Ⅶ層	2	1	—	—	—	—	—	—	4
	Ⅷ・Ⅸ層	2	—	—	—	—	—	—	—	0
	計	193	245	176	82	52	11	—	2	760

#### (4) 瓦質土器（第15表、第55図）

瓦質土器は52点出土した。全体に破片資料が多い。1区では、ほとんどが近代以降の層から出土している。3区Ⅲ層からは14点と比較的まとまった出土がみられ、4点を示した（第55図76～79）。76は鉢の底部であるが、全体に被熱しており著しい焼けハジケがみられる。78は壺等の落とし蓋と考えられる。77、79は器種不明であるが、77については底が無く窓がつくことから、瓦灯等の可能性が考えられる。

#### (5) 土製品（第15表、第55図）

11点あり、全て3区Ⅲ層からの出土である。破片資料が多く、種類のわかる4点を示した（第55図80～84）。80は猫でほぼ完形である。81は猿の頭部で内部に孔がみられる。頭部の可動するタイプと考えられる。82は完形で、笠とみられる。83、84は犬で中空の左右合掌作りである。内面には指圧痕が見られる。

#### (6) 瓦（第16表、第56、57図）

瓦は総計2,919点出土し、このうち丸瓦が576点、平瓦が2,120点で併せて全体の92%を占める。区毎の出土傾向をみると、1区ではXV層（新段階北岸盛土）など近世期の層からもまとまった出土はあるが、多くは近代以降の層から出土している。2区でも近代以降の層から多く出土しているが、19世紀代の旧表土と考えられるⅢ層からも82点と比較的多くの瓦が出正在している。3区では、1、2区と異なり近世の遺物包含層であるⅢ層からの出土が最も多い。3区全体の約半数がⅢ層からの出土である。ほとんどが破片資料であるが、丸瓦、平瓦を中心に軒丸瓦、軒平瓦、伏間瓦、熨斗瓦、輪違い、平板瓦など多様な瓦が出正在している。また、IV層からも丸・平瓦を中心にまとまった瓦の出土がみられた。なお、文中（ ）内の数字は図示した遺物の番号である。

①軒丸瓦 42点出土した。瓦当文様の判別可能なものは25点である。文様構成は、1区が九曜文3点、三巴文6点、珠文三巴文2点である。特に最下層のIX層から出土した三巴文（85）は、17世紀代の陶器と共に伴っている。2区からの出土は無い。3区は九曜文9点、珠文三巴文4点である。それぞれ4点、2点がⅢ層からの出土である。九曜文1点を示した（91）。IV層から文様のわかる資料は出土していない。

②軒平瓦 23点出土した。瓦当文様の判別可能なものは5点である。文様構成は、1区が花菱文1点（96）、2区が梅文1点である（99）。3区は桔梗文1点（97）、花菱文（四弁花）1点（98）、当持筈文1点（101）である。全てⅢ層からの出土で、他に主文様は不明であるが、隅切の軒平瓦が1点出土している（95）。また、IV層から瓦當面に刻印（六つ星）のある資料が出土している（100）。同種の刻印は三の丸跡より出土した遺物に認められる。

③軒棟瓦 5点出土し、いずれも瓦当文様の判別可能な資料である。文様構成は、1区が勾玉文1点（94）、三巴文1点である。2区は勾玉文1点である（93）。3区は、三巴文2点である（92）。

④棟瓦 主に棟に使用される瓦を棟瓦と総称する。32点出土した。内訳は、1区が伏間瓦6点、熨斗瓦3点、輪違い3点、面戸瓦6点（103）である。多くが近代以降の層から出土している。2区は面戸瓦1点である。3区は、伏間瓦3点（105、106）、熨斗瓦2点（111）、輪違い5点（102）、面戸瓦3点（104）である。

⑤飾り瓦 詳細不明の2点を含む5点が出土した。内訳は、1区が鬼瓦1点、鰐瓦1点（108）である。2区は菊瓦1点である。3区からは詳細不明の資料2点である。

⑥駒瓦 12点出土した。1区4点、2区3点、3区5点である。

⑦壠瓦 44点出土した。これは、平板、棟付平板、駒付平板、T字瓦の総数である。1区では平板6点（115）、棟付平板1点、駒付平板2点が出土した。2区では平板2点が出土した。3区では平板16点（113、116）、棟付平板16点（112、114）、T字瓦1点（107）が出土した。

⑧その他 この他、種別不明の瓦が23点出土した。内1区出土の1点を示した（109）。

第16表 第16次調査出土瓦数量表

区	地名・層位	瓦	平	瓦九	斜平	斜核	核	瓦底面	瓦面	瓦底	瓦面	幅延	面延	通り	網	半板(門)	水切	横付半板	網付半板	T半	不規	計
	表層	27	82	1	1		1							2		2	1	2	2	2	2	127
	複数	6	56	1	1	2	13		2												83	
	I	5	35	1	2		7														42	
	I・II	2	28	1																	30	
	II	31	66	4	2		3	1	3		2	1	1			1	1	2	2	2	239	
	II・III	1	20					1													20	
	III	37	58	2				2						1							35	
	IV(表)	1	2																	2	20	
	IV	29	166	3	1		2							3	1	3					3	
	V		1																		308	
	VI	1	1																		2	
	VI	1	1																		2	
	X	63	70																		83	
	XI	6	4																		17	
	XII	5	2																		20	
	XIII	8	5																		90	
	XIV	1																			1	
	XV	/	23	2																	23	
	XV	7	35	1																	41	
	XVb	15	88																		107	
	XVc	3	9																		5	
	XVI		1																		1	
	XVII		1																		1	
	XVIII		2																		2	
	表層	15	1																		16	
	複数	3																			3	
	I	8	26		1																30	
	II	24	99		1																130	
	III	16	66																		85	
	IV(表)	1	5																		6	
	IV	1	24	2																	27	
	V	14	22																		47	
	表層	9	14	2										1							28	
	複数	0	2	1																	30	
	I	9	37																		49	
	II	66	266	5	1	6		1	2		2	2	6	5	7					4	396	
	II	27	35	1			1							1	1						57	
	III	376	42	10	7	1	6	2	1	3	2	2	3	1	2	7	1	7	1	500		
	IVa	2	8																		3	
	IVb	6	8	2																	8	
	IVc	12	26		1																30	
	V		2																		2	
	E	526	2120	42	25	2	36	3	5	1	5	8	10	5	12	15	10	17	2	1	269	

(7) 金属製品(第17表、第58、59図)

26点出土した。内96%の235点が3区からの出土である。残りは1区からの出土で、2区からの出土は無い。I区では、1点を除き全て近代以降の層から出土している。III層より出土した鎌鉄(第58図121)は、杭列2西側の横杭直下から出土した。上半部が欠損しており、頭部形状は不明である。また、表面に赤錆とは異なる赤色顔料の付着が見られる。

3区では、III層直上のII層最下部から97点の鉄製品が出土した以外は、全てがIII・IV層からの出土である。鉄製品については、腐植が著しく種別不明であるが、レンガと共にすることから近代以降の遺物と考えられる。

第17表 第16次調査出土金属製品数量表

区	地名・層位	基盤	丸皿	釘針	唐鑓	古鉄	鋼鐵	その他 金物類	灯明器	鉢	瓶	鍍鉄	その他 鉄製品	計
	I													1
	II													5
	III													2
	III・IV													1
	III													4
	IIIc													1
	III下部													97
	III上部													1
	III	5	2	2	1	14	3	2	1	56			46	130
	IVa	6	8	2			1							1
	IVb	6	8	2										8
	IVc	12	26		1									30
	#	2	2	2	1	17	3	3	1	59			1	351
														246

Ⅲ層出土の金属製品は全130点で、内訳は煙管5点、簪2点、釣針2点、刀剣の縁1点、古銭15点、銅線3点、鉄製灯明皿1点、鉄釘54点、その他銅・鉄製品48点である。煙管はいずれも吸口のみである。2点図示した。第59図129にはラウの残存がみられた。簪は2点とも図示した。第59図127は端部に耳かきが付くタイプで、文様表現もみられる。釣針も2点とも図示した。第58図123は、全長6cm近い比較的大形のものである。第58図122は刀剣の縁である。その大きさから、刀剣は比較的小型のものと思われる。古銭は3点出土の17点全てを掲載した(第59図130~146)。Ⅲ層からは古寛永3点、新寛永(文錢)2点、新寛永9点、不明1点が出土した。鉄製の皿は灯明皿と考えられる(第58図118)。口径は110cmで口縁部には長さ2cm程の突起が付く。

IV層出土の金属製品は古銭2点のみで、古寛永と永楽通宝がみられる。特に古寛永の存在は、その初鋳が寛永13(1636)年であることから、IV層の堆積年代がこれを遡らざることを示している。

#### (8) ガラス・石製品(第18表、第60図)

14点出土した。2点を除き全て3区からの出土である。Ⅲ層からまとまった出土があり、ガラス玉1点、硯3点、碁石1点、火打石1点、水晶1点、不明石製品1点である。ガラス玉(第60図147)は径14.4mmで中心に孔が見られる。表面は白色であるが一部剥落し、内部から淡青色のガラスが確認される。硯は2点図示した(第60図151、152)。151は赤褐色の粘板岩製で、長さ89mm、幅35.7mmのやや小型の硯である。表面裏面が硯として利用されたものと考えられる。ただし裏面(図右側)については、加工痕とみられる幅1~2mmの線刻が縦横に残っており、加工途中で破損した可能性も考えられる。152は黒色の粘板岩製で、上部1/3で折れている。長さ145.2mm、幅58.9mmである。裏面に深さ3~4mmの肉抜きがみられる。150は碁石である。長径18mm、短径16.3mmで乳白色の白石である。149は水晶で全長32.8mmである。148は土鼈製の火打石である。正面と両側面が面的に加工されており、面の境界部分には著しい潰れが観察される。153は泥岩質の石材を加工した不明石製品である。周囲が破損しており、全体の形状は不明である。厚さは18mmで、残存最大長は110.2mmである。図の上部と左下に7mm程の段差がみられる。また、左側には幅7mm以上、深さ8mm、断面U字形の溝が彫られている。表面には、やや上部に深さ約7mmのハート形の溝がみられ、その左下には植物文様が線刻されている。その周囲は方形の二重線で区画され、二重線の間には約5mm間隔で短い斜線が見られる。さらに斜線の間には、1つ置きに、それと直交する方向で、幅0.5mm以下の線刻がなされている。硯等の可能性もあるが用途は不明である。

#### (9) 木製品(第19表、第61、62図)

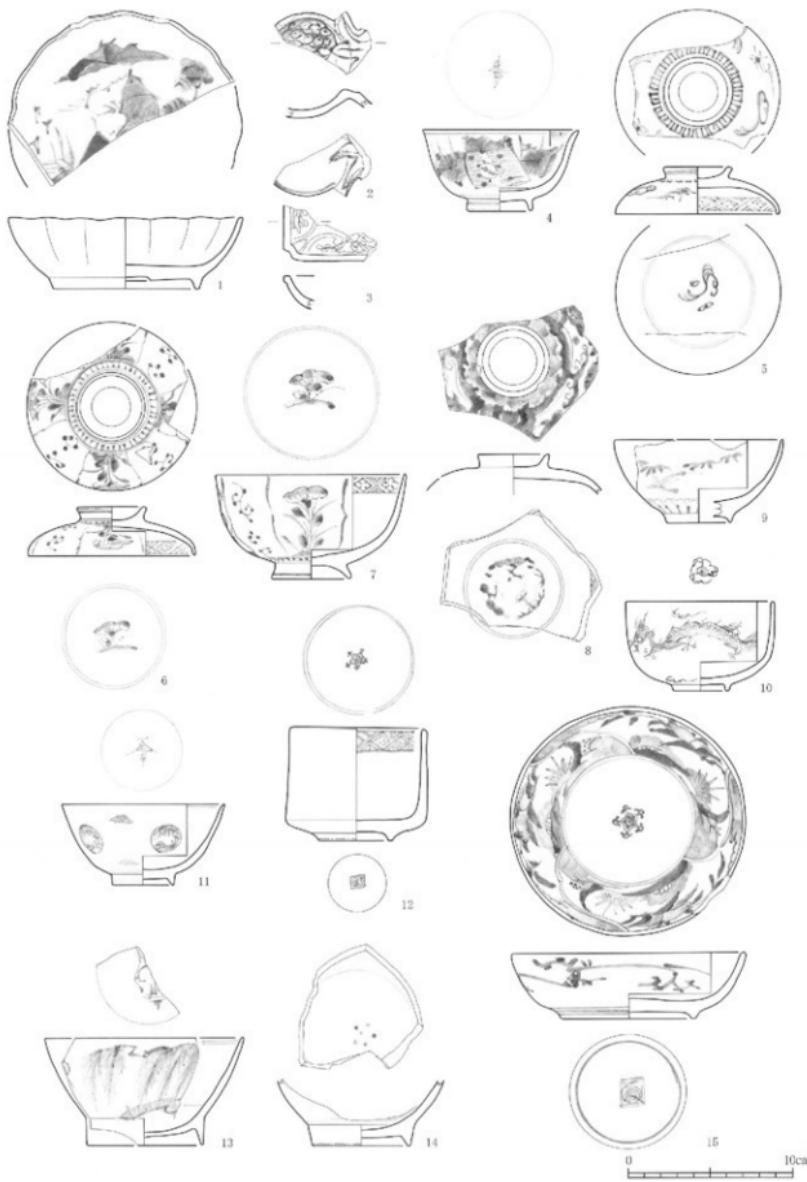
50点全て1区からの出土である。木筒、漆器柄、下駄、桶等がみられる。第61図154は木筒である。下半部が欠損している。「御用之口(錐力)」の墨書きがみられる。155は漆器の柄である。内面朱漆、外側黒漆で文様等は見られない。156は用途不明の箱型木製品である。底面に少なくとも4つの孔が見られる。157は黒漆の上に朱漆で文様(?)を表現したものである。158、159は下駄である。160~162は桶・樽の一部である。162はいわゆる提桶である。

第18表 第16次調査出土木製品数量表

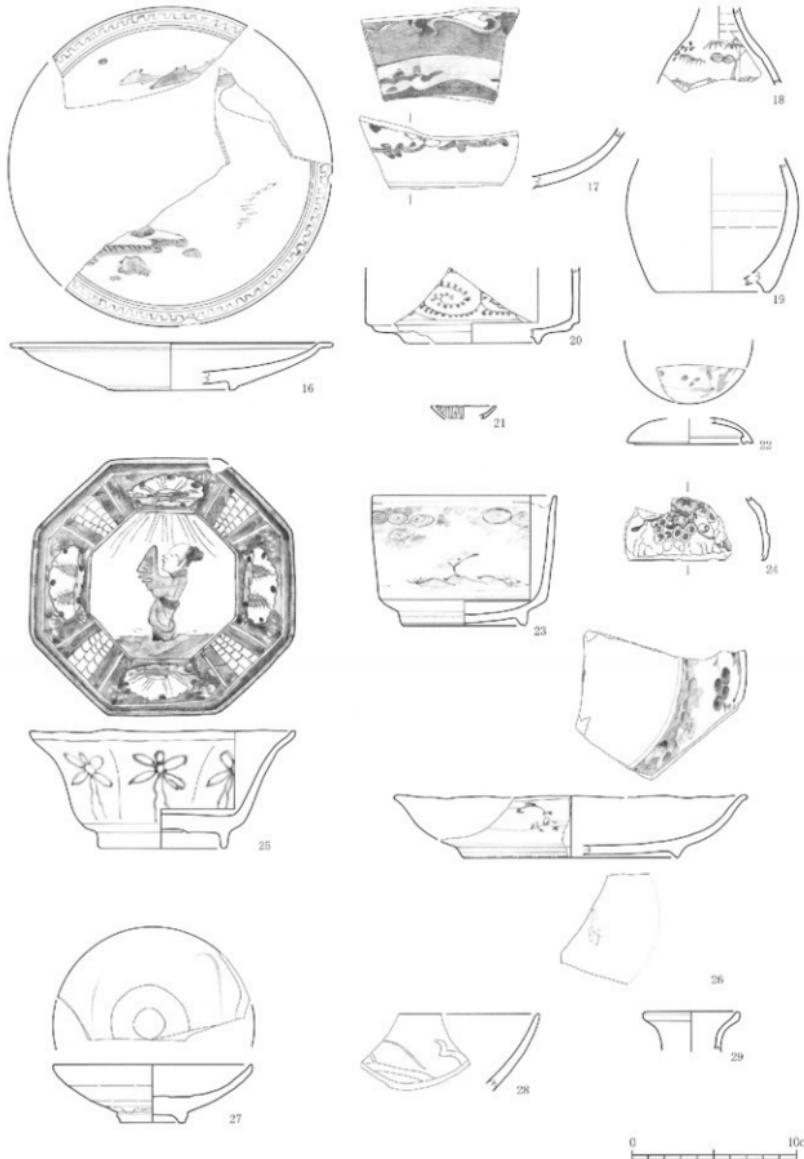
区	遺構・個体	漆器	木筒	下駄	桶	箱	木製品	その他の	計
I	漆器			3					3
	C			2					2
	D			1				5	6
	IV				5	1	11	17	
	IV'下駄			1	1			9	11
	V						3	3	
	X	1	1	1					3
	II	1					4	4	5
計		2	1	8	6	1	32	50	

第19表 第16次出土ガラス・石製品数量表

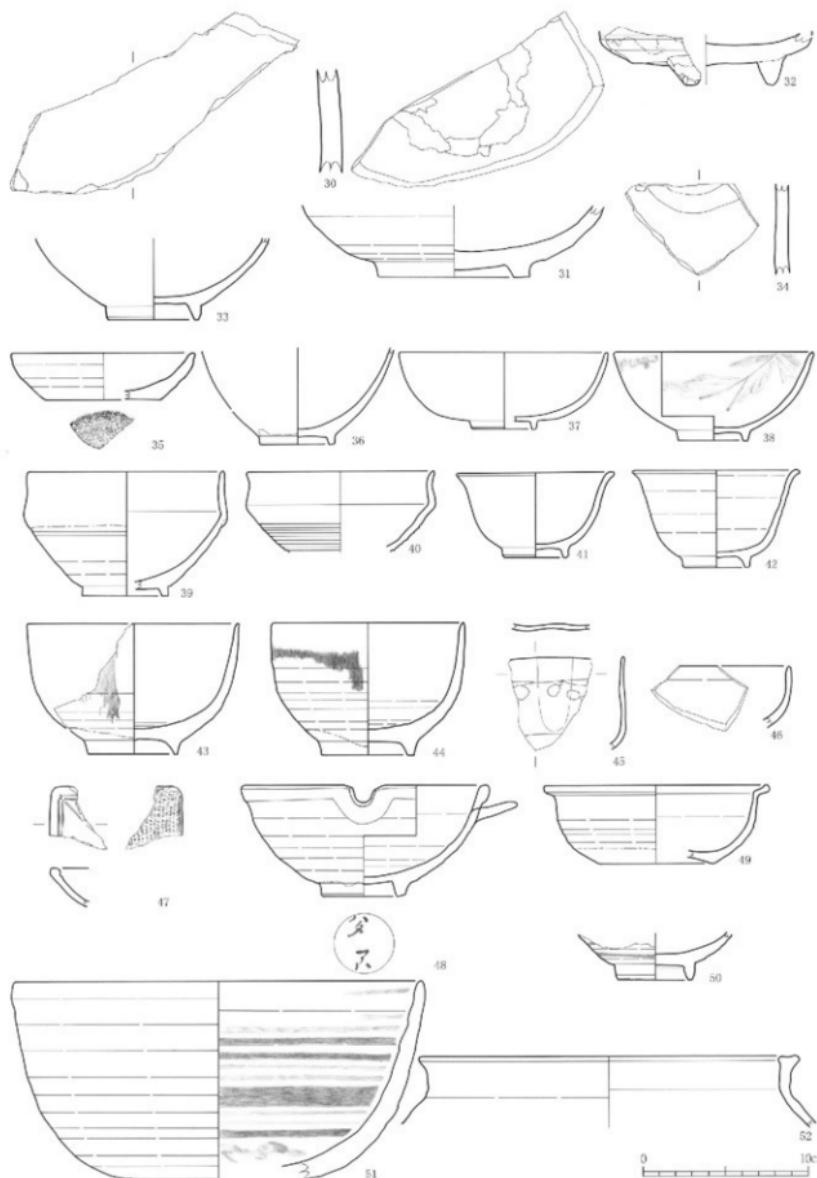
区	遺構・部位	ガラス (点)	硯	碁石	火打 石	水晶	その他の	計
I	漆器	1						1
IV							1	1
II d		1						1
III	1		3	1	4	1	1	11
計		1	3	1	4	1	2	19



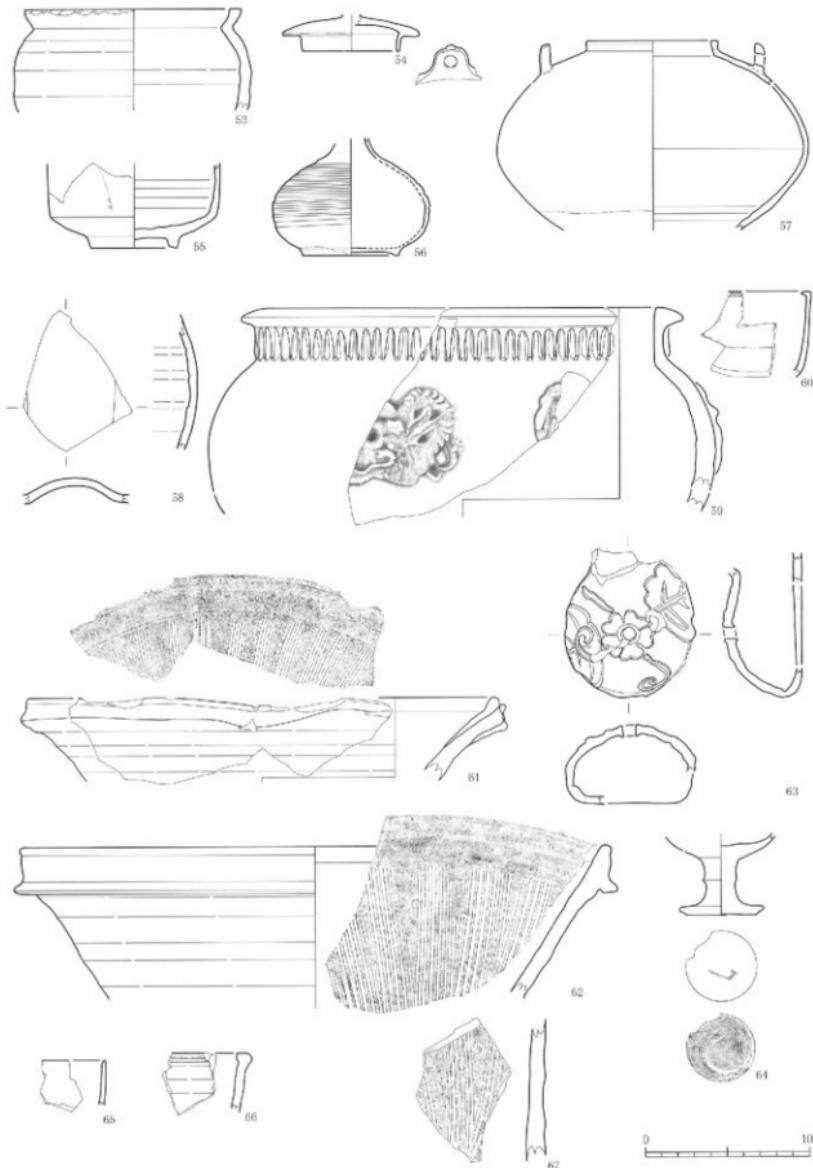
第51図 第16次調査出土磁器 1 (S=1/3)



第52図 第16次調査出土磁器2 (S=1/3, 21のみ1/2)



第53図 第16次調査出土陶器 1 (S=1/3)



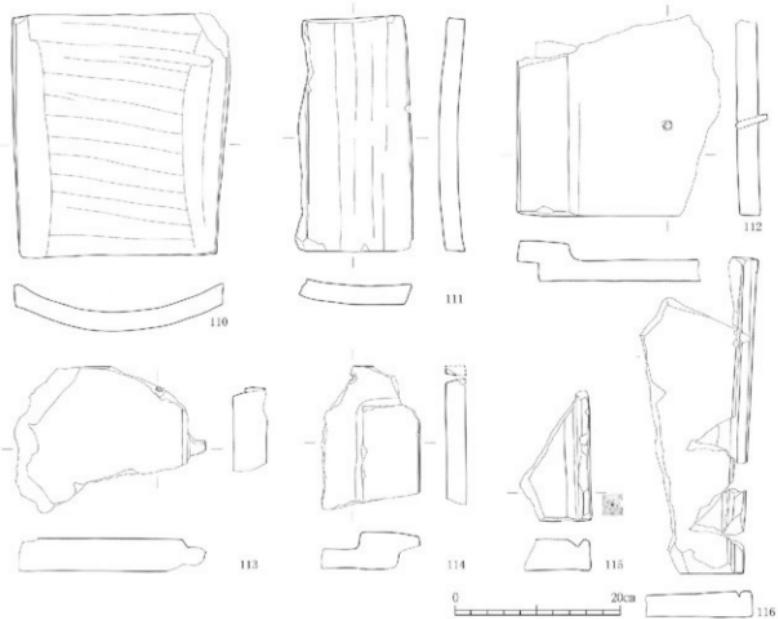
第54図 第16次調査出土陶器 2 (S=1/3)



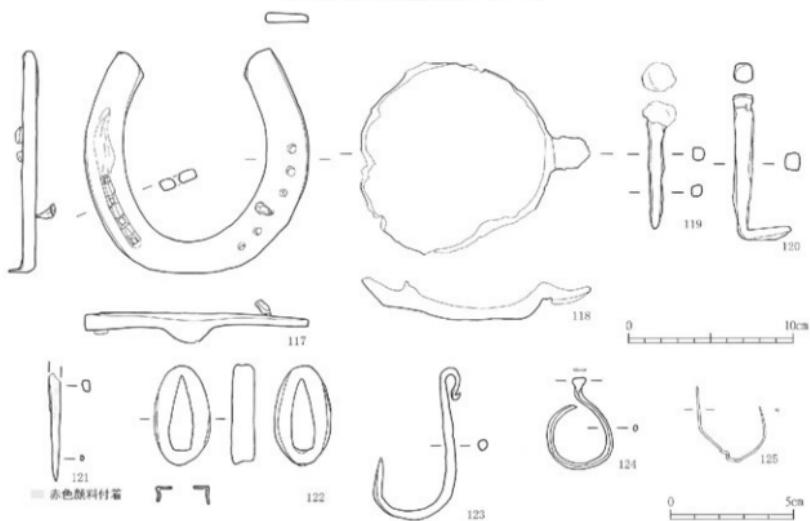
第56回 第16次調査出土培塿、土師質・瓦質土器、土製品 (68~79 : S=1/3, 80~84 : S=1/2)



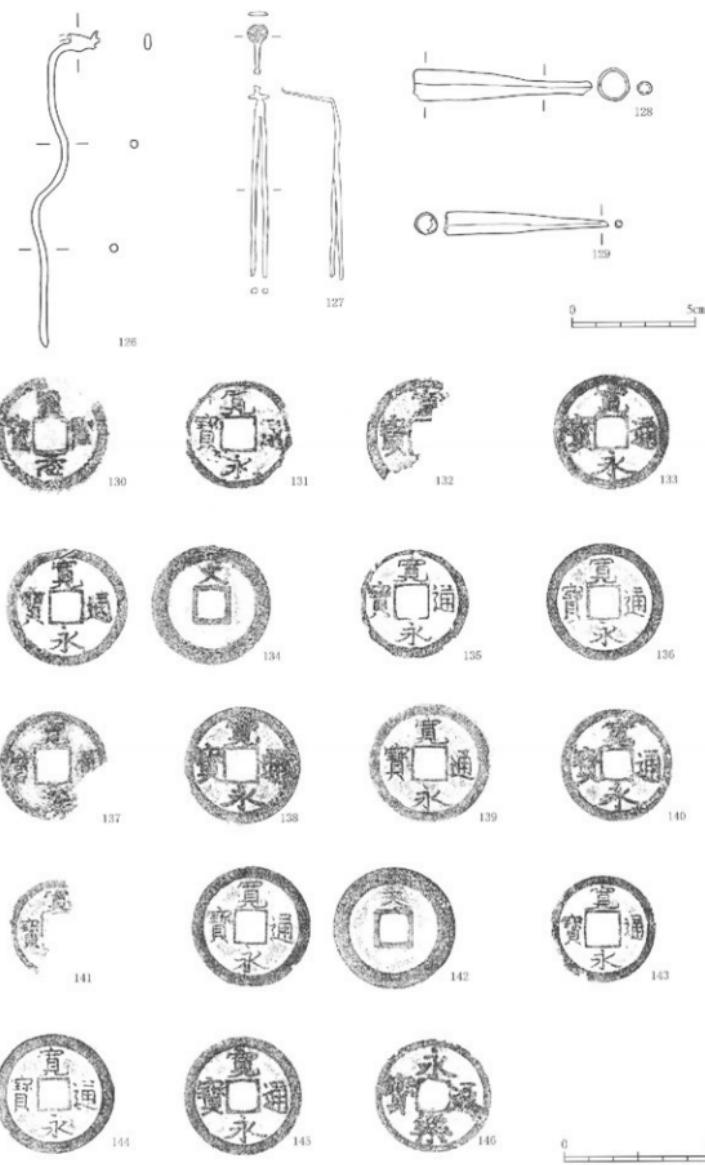
第56図 第16次調査出土瓦 1 (S=1/6)



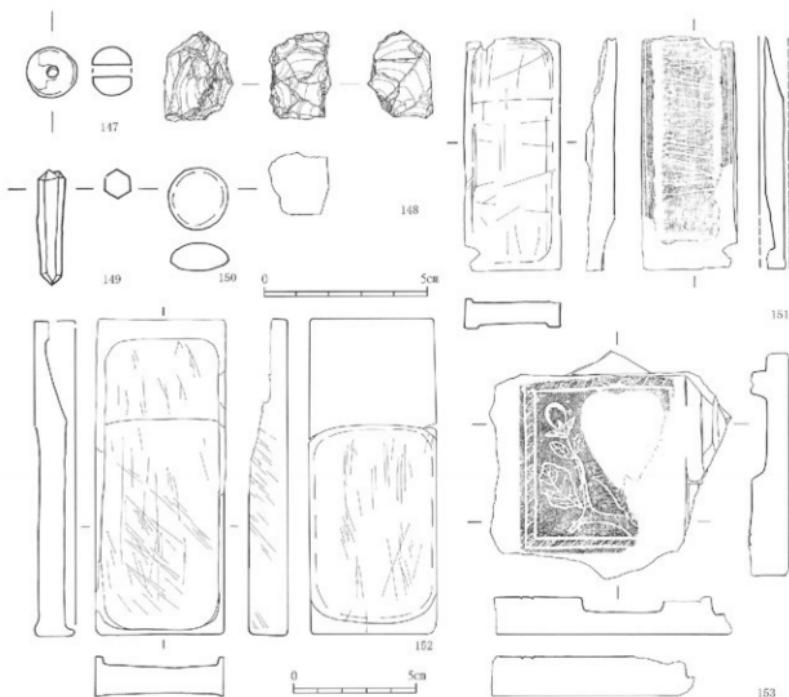
第57図 第16次調査出土瓦2 (S=1/6)



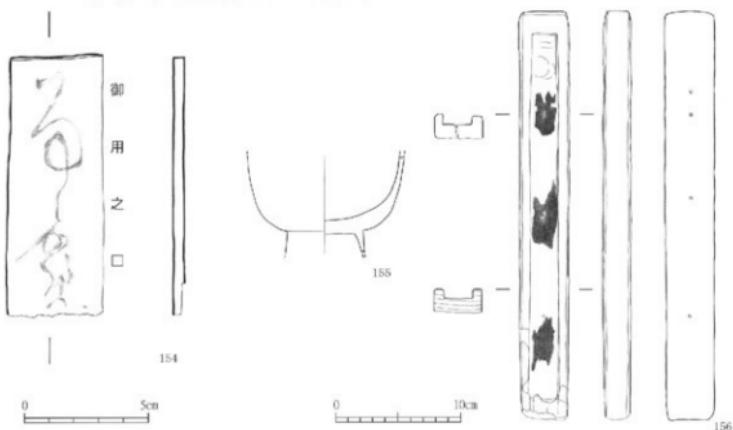
第58図 第16次調査出土金属製品1 (117~120S=1/3、121~125 : S=1/2)



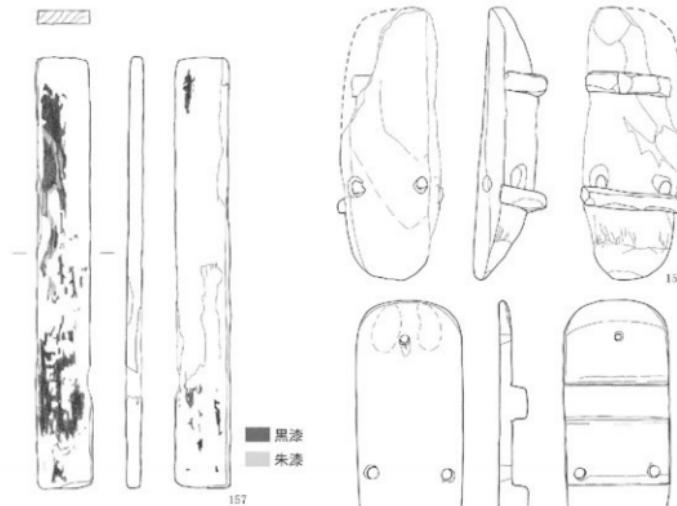
第59図 第16次調査出土金属製品2 (126~129 : S=1/2、130~146 : S=1/1)



第60図 第16次調査出土ガラス・石製品 (147~150 : S=2/3, 151~153 : S=1/2)

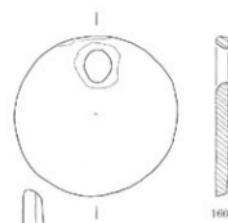


第61図 第16次調査出土木製品 1 (154 : S=1/2, 155, 156 : S=1/4)

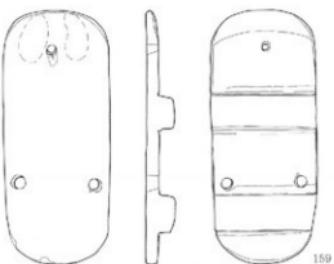


157

158



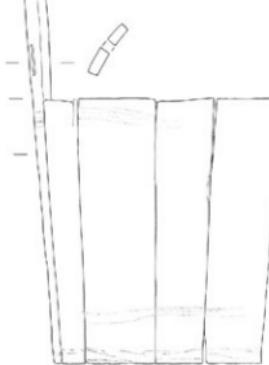
160



159



161



162



第62図 第16次調査出土木製品 2 (S=1/4)

第20表 第16次調査出土磁器観察表

物 品 番 号	区 域	地 域	種 類	生 産 地	基 準	製 作 年 代	白 径 (mm)	高 度 (mm)	文 様 等	備 考	回 数	
252	1	IV	器物	肥前	肥前	16世紀～17世 (140)	112	39	山水文 舟内鉢口付		1 6	
253	1	V	器物	肥前	肥前	16世紀	-	-	美濃文	鉢形軽耳	2 2	
254	1	肥前	食花	山口	肥前	16世紀～17世 (140)	-	-	植物文(竹櫻)・共食い	古墳村	2 2	
51	2	肥前	白瓶	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文(竹櫻)・共食い	古墳村	3 3	
17	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文(竹櫻)・共食い	古墳村	4 7	
20	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文(竹櫻)・共食い	古墳村	8	
22	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文(竹櫻)・共食い	古墳村	5	
75	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文(竹櫻)・共食い	古墳村	6	
15	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文(竹櫻)・共食い	古墳村	5 6	
60	2	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	101	40	30 草花文 美濃文	見送植物文	1 6	
50-1	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	115	47	64 英字文 草花文	見送植物文	7 4	
37	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	44	-	英字文 草花文	見送植物文	8 7	
73	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	92	26	21 英字文 草花文	見送植物文	9 14	
29	1	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	92	26	21 英字文 草花文	見送植物文	10 20	
74	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	200	36	49 人文 文化文	見送植物文	11 36	
6	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	80	45	70 人文 文化文	見送植物文	12 31	
72	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	110	74	76 人文 文化文	見送植物文	13 35	
70	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	文様有り 不明	見送外文	14 37	
76	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	文様有り 不明	見送外文	15 38	
14	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀～17世 (140)	141	83	36 百花文	見送文 花文 手描・コンニャク印判札	14と連携	15 38
32	5	山	白付	肥前	肥前	16世紀	(100)	89	73 山水文	百花文	16と連携	59
7	3	上山	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	初期伊万里	47
564	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	中～大通	45
98	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	8 56	
562	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	中通以上	65
563	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	(40)	-	花葉文	見送手描	21 99	
366	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	(60)	-	草花文	見送手描	22 58	
61	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	110	74	76 草木文 実文	見送手描	23 64	
27	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	草花文	見送手描	24 62	
33	2	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	170	77	67 美濃文 菊文 文	見送文 菊文人形	25 55	
227	3	IVb	白付	肥前	肥前	16世紀	-	(140)	34 花文	小物文 垂草文 菊文五重塔 白山山陰人形成化年型	26 73	
171	3	IVb上山	白付	肥前	肥前	16世紀～17世 (120)	41	39	草文	見送文 菊文人形成化年型	27 30	
123	2	IVb上山	白付	肥前	肥前	16世紀	(60)	-	草文	見送文 菊文人形成化年型	29 7	
174	3	IVb	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	30 89	
609	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	9	
607	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	10	
592	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	11	
609	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	12	
388	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	13	
287	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	14	
390	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	15	
567	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	16	
573	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	17	
586	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	18	
567	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	19	
573	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	20	
586	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	21	
601	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	22	
550	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	23	
593	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	24	
579	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	25	
576	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	26	
593	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	27	
588	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	28	
577	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	29	
594	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	30	
588	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	31	
577	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	32	
598	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	花葉文	見送手描	33	
75	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀～17世 (120)	214	-	二重花文	見送手描	34	
23	2	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀～17世 (120)	590	60	60 花葉文	見送文 菊文有り不明	37 2 同一文様	22
660	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	水波文	見送手描	38 30	
571	2	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	水波文	見送手描	39 40	
648	1	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文	見送文	41	
575	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文	見送文	42	
570	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文	見送文	43	
569	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀～17世 (120)	-	-	植物文	見送文	44	
631	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀～17世 (120)	-	-	植物文	見送文	45	
616	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文	見送文	46	
590	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文	見送文	47	
572	1	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文	見送文	48	
589	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	植物文	見送文	49	
612	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀	-	(57)	植物文	見送文	50	
574	3	肥前	白付	肥前	肥前	16世紀～17世 (120)	-	-	四方文	見送文	51	
67	3	II	青磁	肥前	青磁	16世紀～17世 (120)	-	-	青磁青花	日昌若山に贈 打附	52	
228	3	IVc	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	青磁文	見送文	53	
662	1	IVc	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	青磁文	見送文	54	
545	3	IVb	青磁	肥前	肥前	16世紀	-	-	青磁文	見送文	55	
274	3	IVc	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	青磁文	見送文	56	
663	3	IVc	白付	肥前	肥前	16世紀	-	-	青磁文	見送文	57	

第21表 第16次調査出土陶器觀察表

遺物番号	種類・形態	生産地	基盤	製作年代	口径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	鉢足・文様等	備考	測定	写真		
255	1 X区 楕円	素滑	丸	中世	—	—	—	テグ	—	30	24		
257	1 X区	漆付	丸	平安~	—	—	360	—	透明釉	豆状器	31	15	
255	1 X区	素面	丸	平安	—	—	—	模印	透明釉	豆状器	32	23	
280	1 II 大腹折唇	透け目付	丸	—	—	—	520	—	灰陶	透け目付脚	33	25	
128	1 XVb	古野	透け	平安~平安後	—	—	—	鉢足	透け目付脚	豆状器	34	18	
74	1 VI 漆	漆	打痕	平安	(300)	(66)	28	鉢足	透け目付脚	豆状器	35	79	
88	1 III 大腹折唇	丸脚	丸	—	—	45	—	灰陶	黄人面	36	30		
130	3 III 大腹折唇	丸	丸	平安~	—	47	40	灰陶	黄人面	37	81		
90	3 III 大腹折唇	丸脚	丸	平安	116	40	49	白陶 香炉洗し 裁紋	—	38	82		
119	3 III 大腹折唇	脚付	丸	平安	108	48	67	白陶 香炉洗し 裁紋	透け目付脚 黄人面	39	83		
1114	3 III 大腹折唇	脚付	丸	平安	—	—	—	白陶 鉢	透け目付脚	豆状器	40	84	
99	3 III 大腹折唇	脚付	丸	平安	90	35	43	白陶	透け目付脚	豆状器	41	85	
211	3 III 大腹折唇	脚付	丸	平安	98	38	50	白陶	透け目付脚	豆状器	42	86	
117	3 III 小折唇	丸脚	丸	平安	(110)	59	69	透青釉	脚輪洗し	透け目付脚	43	87	
103	3 III 小折唇	丸脚	丸	平安	(120)	52	73	透青釉	脚輪洗し	透け目付脚	44	88	
105	3 IV 瓢	縁付	平	—	—	—	—	灰陶	透け目付脚	豆状器	45	89	
692	3 IV 大腹折唇	丸	丸	—	—	—	—	灰陶	透け目付脚	豆状器	46	90	
149	3 IV 大腹折唇	丸脚	丸	—	—	—	—	灰陶	透け目付脚	豆状器	47	91	
38	3 V 大腹折唇	片口	浅腹~深腹	—	40	48	60	白陶	透け目付脚	豆状器	48	92	
37	3 V 大腹折唇	片口	丸	平安	(330)	—	45	灰陶	透青釉	豆状器	49	94	
82	3 VI 細腰	丸	丸	—	—	40	—	灰毛口	—	豆状器	50	95	
41	3 VI 肥前	丸	丸	平安	232	—	—	灰陶	肥前	豆状器	51	97	
T163	3 VII 大腹折唇	丸	丸	平安	(210)	—	—	灰陶	肥前	豆状器	52	98	
40	3 VIII 壺	丸	丸	平安	(122)	—	—	灰陶	口内側に暗色斑点、内面全体に朱分付着、内部内面赤	豆状器	53	98	
87	3 IX 大腹折唇	筒(上部)	丸脚	平安	76	—	—	白陶	筒(上部)	豆状器	54	105	
267	3 IX 大腹折唇	丸脚	丸	—	—	48	—	白陶	透け目付脚	豆状器	55	101	
77	3 IX 大腹折唇	丸	丸	平安	187	—	55	—	白陶	透け目付脚	豆状器	56	102
4	3 IX 大腹折唇	丸脚	丸	平安	77	—	—	青釉	—	豆状器	57	107	
116	3 IX 大腹折唇	丸	丸	平安	—	—	—	青釉	能方窯に匹敵する、東京の陶	豆状器	58	105	
28	3 IX 大腹折唇	丸脚	丸	平安	(230)	—	—	青釉	口内側に摩滅	豆状器	59	108	
102	3 IX 大腹折唇	香炉	丸	平安	(222)	—	—	灰陶	口内側底部下部絞	豆状器	60	104	
902	3 IX 不明	透透明	丸	平安	(32)	—	—	灰陶	—	豆状器	61	112	
223	3 IX 不明	透透明	丸	平安	(36)	—	—	灰陶	内面や口底裏に赤地?	豆状器	62	111	
1112	3 IX 水壺	水壺	丸	平安	—	—	—	灰陶	外形や上部丸み	豆状器	63	109	
754	3 IX 大腹折唇	弘法	丸	平安	40	—	—	灰陶	底面に荷物跡	豆状器	64	110	
25	3 IX 肥前	丸脚	丸	平安	—	—	—	青釉	—	豆状器	65	116	
27	3 IX 肥前	丸脚	丸	平安	—	—	—	青釉	—	豆状器	66	113	
22	3 IX 大腹折唇	丹波	丸	平安	—	—	—	青釉	—	豆状器	67	114	
1092	3 IX 不明	片口?	丸	平安	(134)	—	—	口内側に削除洗し	口内側削除	豆状器	68	99	
26	3 IX 不明	片口?	丸	平安	(19)	—	—	灰陶	口内側削除	豆状器	69	100	
1106	3 IX 大腹折唇	丸	丸	平安	—	—	40	白陶	—	豆状器	70	106	
232	3 IX 大腹折唇	上腹	丸	平安	(66)	—	—	白陶	口内側水洗	豆状器	71	101	
932	3 IX 丹波	丸脚	丸	—	—	—	—	青釉	—	豆状器	72	101	

第22表 第16次調査出土熔岩、土質質・瓦質土器觀察表

遺物番号	種類	地質	次	堆積・層位	口径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	備考	測定	写真
80	1 胸器	粘土	3	Ⅱ	—	—	—	舟形 粘土底のみ	68	17
81	1 胸器	粘土	3	Ⅲ	(126)	(104)	36	舟形 粘土底部に孔有り	69	118
85	1 土質質上器	打痕陶	3	Ⅲ	96	80	18	舟形 打痕質化物付舟形底部に斜面切妻面	70	120
219	1 土質質上器	打痕陶	3	Ⅲ	(50)	32	36	舟形底部に打痕付舟形底部に斜面切妻面	71	119
86	1 土質質上器	丸	3	Ⅲ	(132)	(90)	34	舟形底部に打痕付舟形底部に斜面切妻面	72	121
114	1 土質質上器	打痕陶	3	Ⅲ	50	46	21	舟形底部に打痕付舟形底部に斜面切妻面	73	122
829	1 土質質上器	打痕陶	3	Ⅲ	(64)	36	27	舟形底部に打痕付舟形底部に斜面切妻面	74	124
84	1 土質質上器	ミニチュア	2	Ⅲ	—	—	—	舟形底部に打痕付舟形底部に斜面切妻面	75	123
4	1 土質質上器	鉢	3	Ⅲ上表面	—	—	(140)	舟形底部に打痕付舟形底部に斜面切妻面	76	125
933	1 土質質上器	不透明	2	Ⅲ	—	—	—	舟形底部に打痕付舟形底部に斜面切妻面	77	127
299	1 土質質上器	不透明	2	Ⅲ	(77)	(54)	40	舟形底部に打痕付舟形底部に斜面切妻面	78	128
912	1 土質質上器	不透明	3	Ⅲ	—	—	—	舟形底部に打痕付舟形底部に斜面切妻面	79	126

第23表 第16次調査出土土製品觀察表

遺物番号	種類	区	造形・層位	法量(mm)	備考	測定	写真
46	1 瓶	1	金無田 萩山2	瓶身	ごく一堵無	90	129
220	1 瓶	2	金無田 萩山2	瓶身	模様付瓶身	91	132
104	1 瓶	2	金無田 萩山2	瓶身	模様付瓶身	92	131
105	1 瓶	2	金無田 萩山2	瓶身	模様付瓶身	93	130
49	1 瓶	3	金無田	全高 (45) 高さ (41)	模様付瓶身	94	133

第24表 第16次調査出土土器観察表

番号	種類	式	車輪・轂	文様	寸法(㎜)	直角(℃)	備考	回	年月
476	舟丸	I	XIV	一円	直角往(168) 文様区切124 水封端口	905		95	34
480	舟丸	I	I	三巴	直角往(168) 文様区切124 水封端口	902		95	35
513	舟丸	I	XIV	弦文X型	兩輪切104	254		97	36
477	直筒形	I	V	唯文X型	兩輪切104	303		98	37
516	舟丸	3	III	弦文X型	兩輪切104	192		95	38
479	舟丸	I	V	九種	兩輪切104 文様区切124 同軸切2	210		90	39
108	舟丸	3	III	九種	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	615		91	40
52	舟丸	3	III	直	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	118.7		92	41
311	前斜	I	III	勾玉	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	577.9		93	42
328	舟丸	I	III	勾玉?	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	536.9		94	43
332	縹耳	I	III	兔足	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	2.29	縹耳	95	44
494	舟平	I	III	兔足	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	74.6		96	45
83	舟丸	3	III	卦形	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	92		97	46
109	舟丸	3	III	虎足	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	1361.5	脚伴花	98	47
117	舟丸	2	III	輪	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	358		99	48
326	縹耳	I	IVc	不規	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	140.0	直垂系脚印	100	49
156	舟平	3	III	鈎形	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	98.8		101	50
505	直筒	3	III	直	全長11.0 直径2.0	272.5		102	51
446	直筒	I	IV	直	全長 0.65 幅直1.7	164.6		103	52
330	直筒	3	III	直	全長10.0 幅直1.9	135.6		104	53
334	直筒	3	III	直	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	339.2		105	54
329	直筒	3	III	直	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	194.2		106	55
407	丁字	3	III	直	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	799.4		107	56
479	縹	I	V	直	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	684.2		108	57
503	不明	I	III	直	直角往(168) 文様区切124 同軸切2	191.3	手切	109	58
21	單	3	III	直	全長12.9 幅直2.8	220.0		110	59
520	賦斗	3	III	直	全長20.0 幅直1.9 厚さ2.0	120.0	透底後口分削	111	60
584	楕円平盤	3	III	直	全長21.0 幅直2.4 厚さ2.4 下底22.1 刻六邊2	1660.0	刻存	112	61
442	平板	3	III	直上圓	厚さ2.7 刻六邊2	1380	刻無存	113	62
56	楕円平盤	3	III	直	厚さ2.3 椭円21.0 厚さ2.0	673.4		114	63
435	平板	3	III	直	厚さ3.6	897.1	手切	115	64
440	平板	3	III	直	全長16.4 幅直3.6	1202.0	手切	116	65

第25表 第16次調査出土金属製品観察表

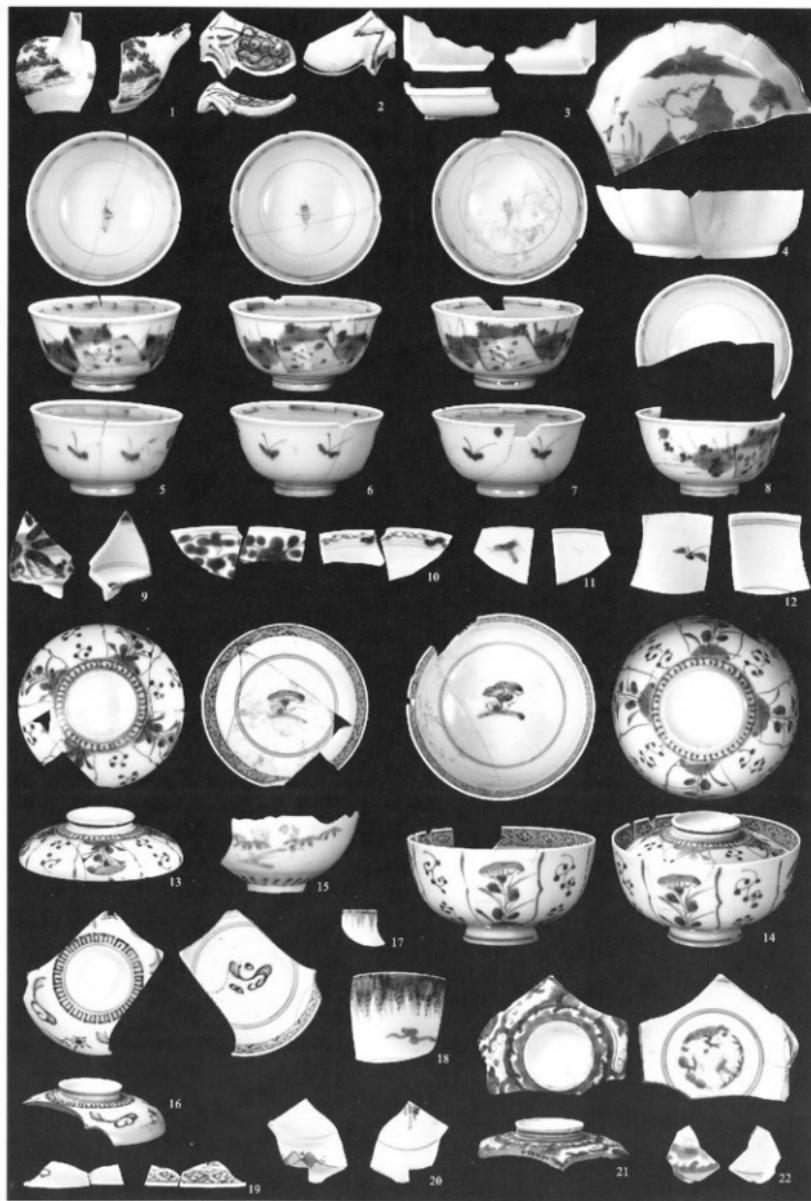
番号	種類	式	透鳴・刻存	寸法(㎜)	重量(g)	備考	回	年月
802	泡形	3	直	全長129.5 全幅17.5 厚さ2.0	286.6	鉄製 青銅製	117	166
107	灯明皿	3	III	口径11.4 直径13.3 高さ18.8	26.4	鉄製	118	167
215	鉢形	3	III	全長7.1 口径4.8 高さ2.9	14.8		119	168
221	鉢形	3	III	全長11.1 直径10.5	25.7		120	169
71	鉢形	I	XIV	全長30.9 幅直6.7	0.5	赤銅製青銅製	121	170
93	鍵(刀鍔)	3	直	全長19.1 幅直2.9 厚さ2.7	5.6	家紋	122	171
50	釦頭	3	直	全長4.95 幅直3.0 厚さ3.8	6.1	鈎頭	123	172
91	釦頭	3	直	全長3.5 幅直4.3 厚さ2.6	2.8	鈎頭	124	173
107	釦頭	3	直	全長6.5 幅2.2	0.3	鈎頭	125	174
51	簪	3	III	全長14.3 全幅3.2 高さ2.9	7.0	刻頭 刻頭	126	175
92	墜	3	直	全長8.0 幅直3.5 厚さ2.7	3.5	鉄製	127	176
116	鉢形(鉢底)	3	直	全長6.7 幅直2.9 高さ1.6	3.4	鉄製鉢底	128	177
111	煙管(煙袋)	3	直	全長6.0 ハーフドリップ 烟袋口直3.4	3.0	内側にツバ穴	129	178
247	古鏡	3	直	外径2.7 宽径2.2	2.3	丸内浅凹 一部欠損	130	179
58	古鏡	3	直	外径2.25 宽径2.0	2.3	丸内浅凹(透底水) ごく一部欠損	131	180
29	古鏡	3	直	外径2.2 宽径2.0	2.3	丸内浅凹(透底水) ごく一部欠損	132	181
64	古鏡	3	直	外径2.2 宽径2.0	2.5	丸内浅凹(透底水) 完形	133	182
65	古鏡	3	直	外径2.3 宽径2.0	3.4	丸内浅凹(透底水) 完形	134	183
96	古鏡	3	直	外径2.6 宽径2.0	3.5	丸内浅凹(透底水) ごく一部欠損	135	184
207	古鏡	3	直	外径2.2 宽径2.0	2.5	丸内浅凹(透底水) 完形	136	185
246	古鏡	3	直	外径2.2 宽径2.0	3.0	丸内浅凹(透底水) 刻形	137	186
1	古鏡	3	直	外径2.2 宽径2.0	4.2	丸内浅凹(透底水) ごく一部欠損	138	187
248	古鏡	3	直	外径2.3 宽径2.0	3.5	丸内浅凹(透底水) ごく一部欠損	139	188
255	古鏡	3	直	外径2.4 宽径2.0	3.4	丸内浅凹(透底水) 完形	140	189
763	古鏡	3	直	外径2.5 宽径2.0	3.6	丸内浅凹(透底水) 344匁欠	141	190
264	古鏡	3	直	外径2.5 宽径2.0	3.6	丸内浅凹(透底水) 完形	142	191
265	古鏡	3	直	外径2.2 宽径2.0	3.6	丸内浅凹(透底水) 完形	143	192
266	古鏡	3	直	外径2.0 宽径2.0	3.2	丸内浅凹(透底水) 完形	144	193
223	古鏡	3	IV	外径26.5 宽径6.5	3.1	丸内浅凹(透底水) 完形	145	194
250	古鏡	3	IV	外径22.4 宽径6.5	3.1	丸内浅凹(透底水) 完形	146	195

第26表 第16次調査出土ガラス・石質品観察表

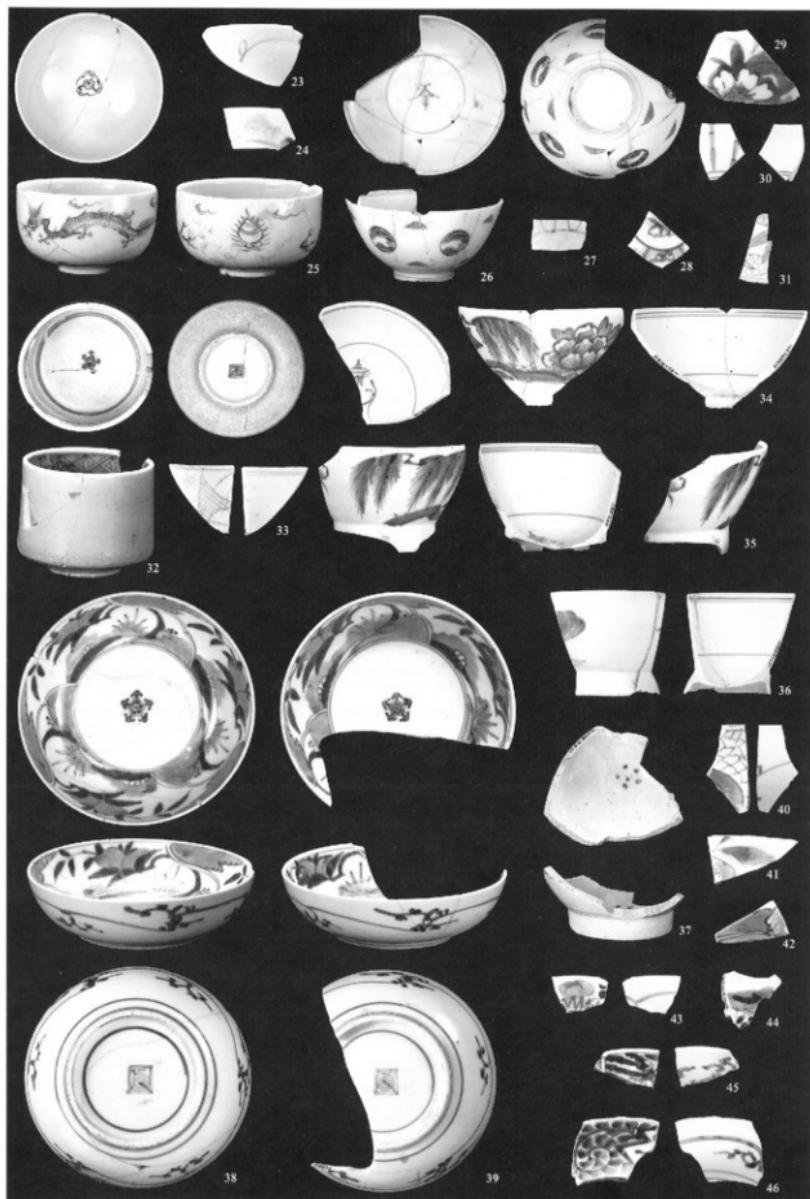
番号	種類	式	病・疵・感	寸法(㎜)	重総(g)	備考	回	年月
279	ガラス玉	3	直	直径10.4 厚さ1.7 孔径3.7	4.3	透明色 白色	147	196
241	火薬瓶	3	直	直角往(168) 直径17.4 厚さ16.5	4.1	乳頭	148	197
1-3	水晶	3	直	直角往(168) 直径16.2 厚さ15.5	2.3		149	198
47	蜜ろう	3	直	直角往(168) 直径16.2 厚さ17.8	3.5	下部破損	150	199
44	蜜ろう	3	直	直角往(168) 直径15.7 厚さ17.1	57.9	粘液痕	151	200
45	蜜ろう	3	直	直角往(168) 直径16.9 厚さ18.8	255.3	粘液痕 内側に汚い跡	152	201
54	八角形銀盤	3	直	直角往(168) 直径17.0 厚さ1.6	23.7	丸形孔 8個 文様を刻む 痕	153	202

第27表 第16次調査出土木製品観察表

番号	種類	式	病・疵	寸法(㎜)	重総(g)	備考	回	年月
69	木盤	I	IV	縫合19.5 Q26.5 厚さ4.3	6.6	「錦地之二(錦)方」下部破損	154	203
55	漆器(瓶)	3	XI	丸形口付18.5 漆舟底9.0 破損20.7	162.5	漆舟底	155	204
856	漆器(瓶)	I	IV	5.6x3.6x3.5 豊巣2.1	149.5	漆舟底 附文	156	205
857	漆器(瓶)	I	IV	全高37.0 梱10.2 豊巣2.1	148.3	漆舟底 朱漆舟底	157	206
864	下駄箱	I	VI	全高20.9 梱5.5 豊巣2.2	514.9	丸形孔漆舟底	158	207
860	下駄箱	I	VI	全高31.1 梱19.5 豊巣2.2	208.2	丸形孔漆舟底 豊巣に押捺跡あり	159	208
862	底駄箱	I	IV	19.12 頭1.6 梱5.0x2.4	100.0	表に焼け	160	209
961	箱(鉢形)	I	IV	底19.32 頭1.6 厚さ1.6	156.7	表に焼け	161	210
					346.0	側面外側にタガ痕	162	211



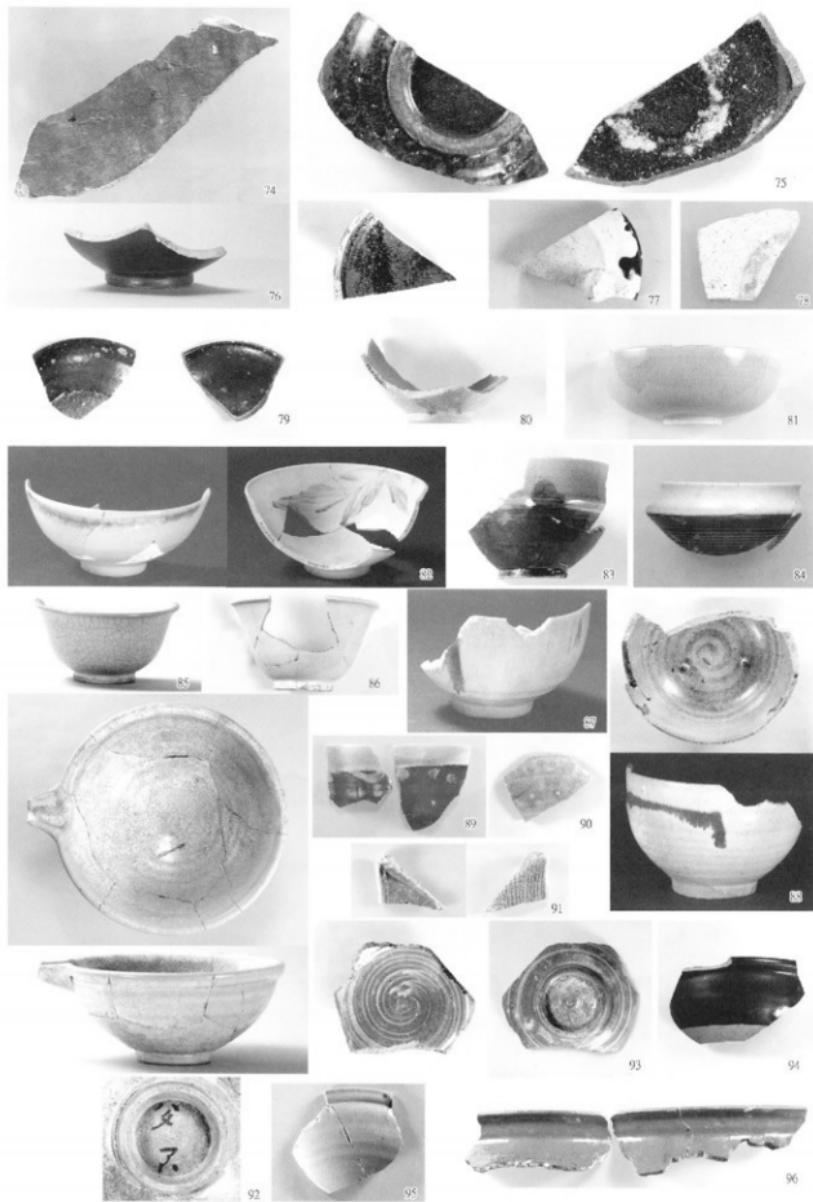
第63図 第16次調査出土器（1）（S=1/3）



第64図 第16次調査出土磁器（2）(S=1/3)



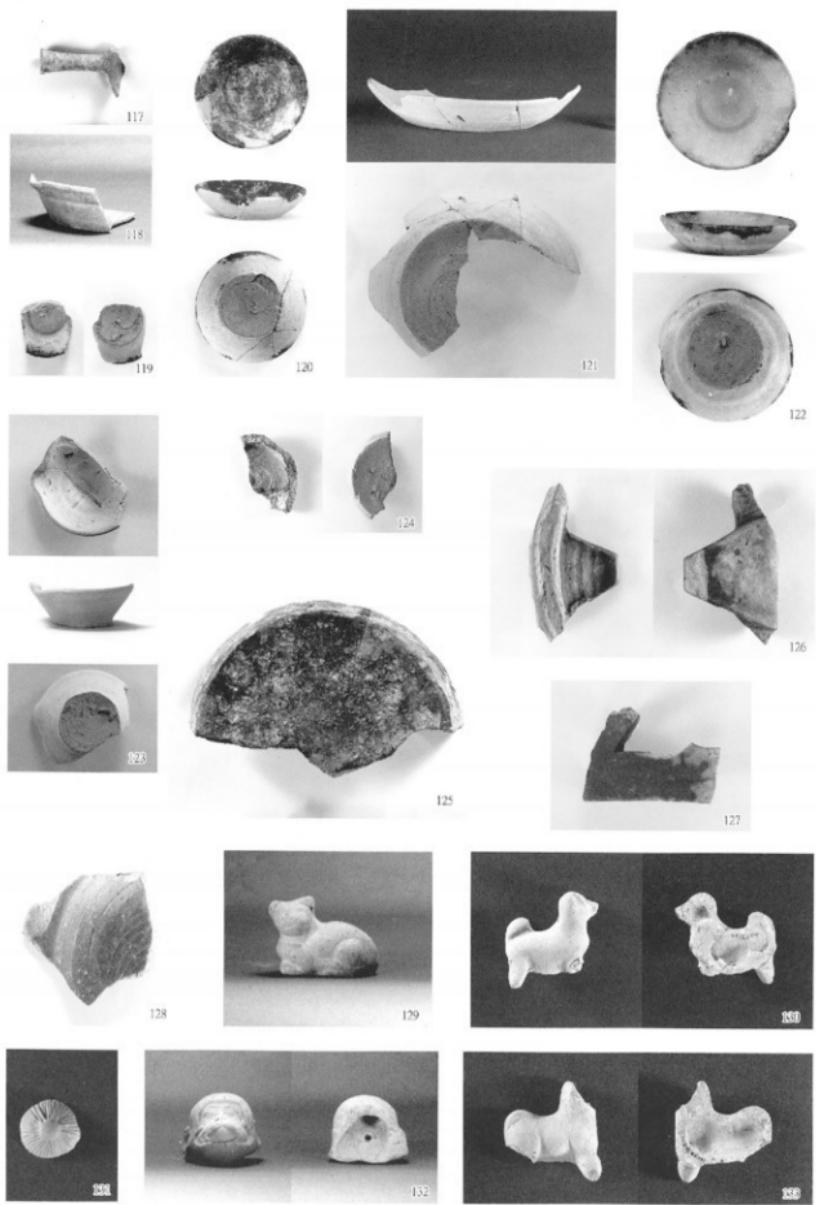
第65図 第16次調査出土磁器（3）(S=1/3、59のみ1/2)



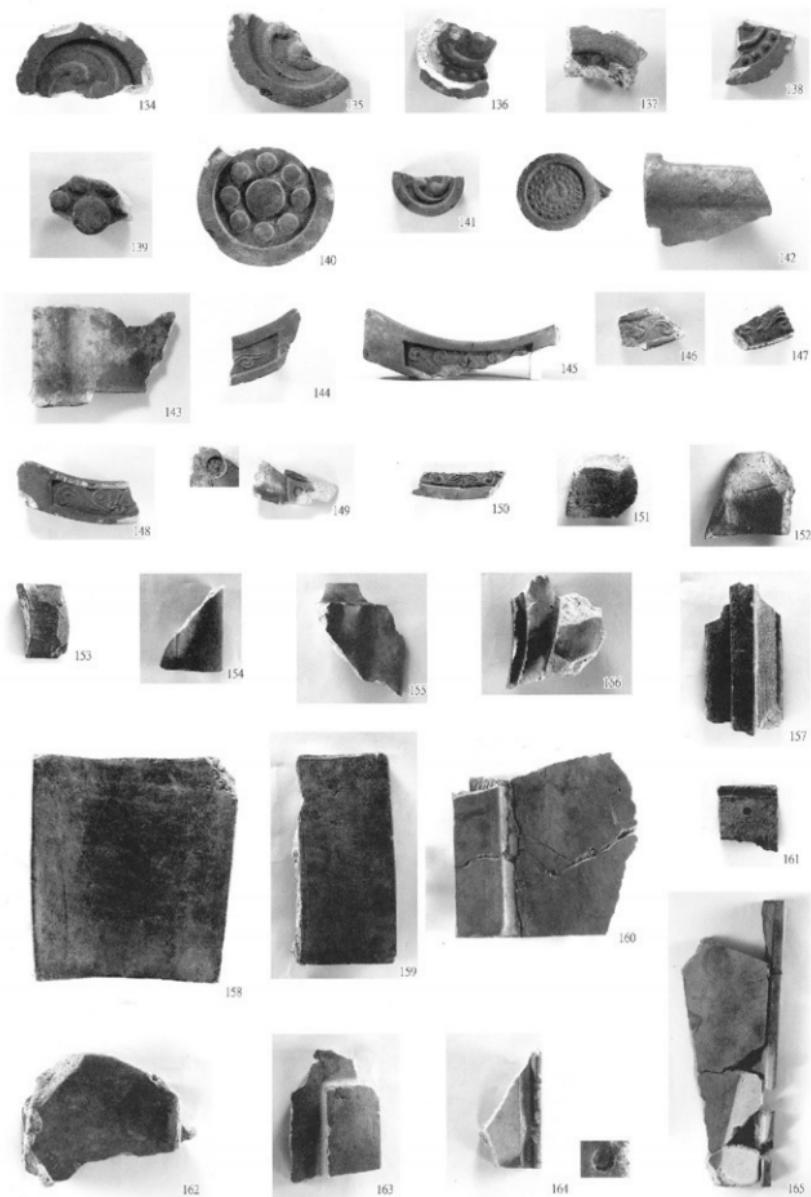
第66図 第16次調査出土陶器（1）(S=1/3)



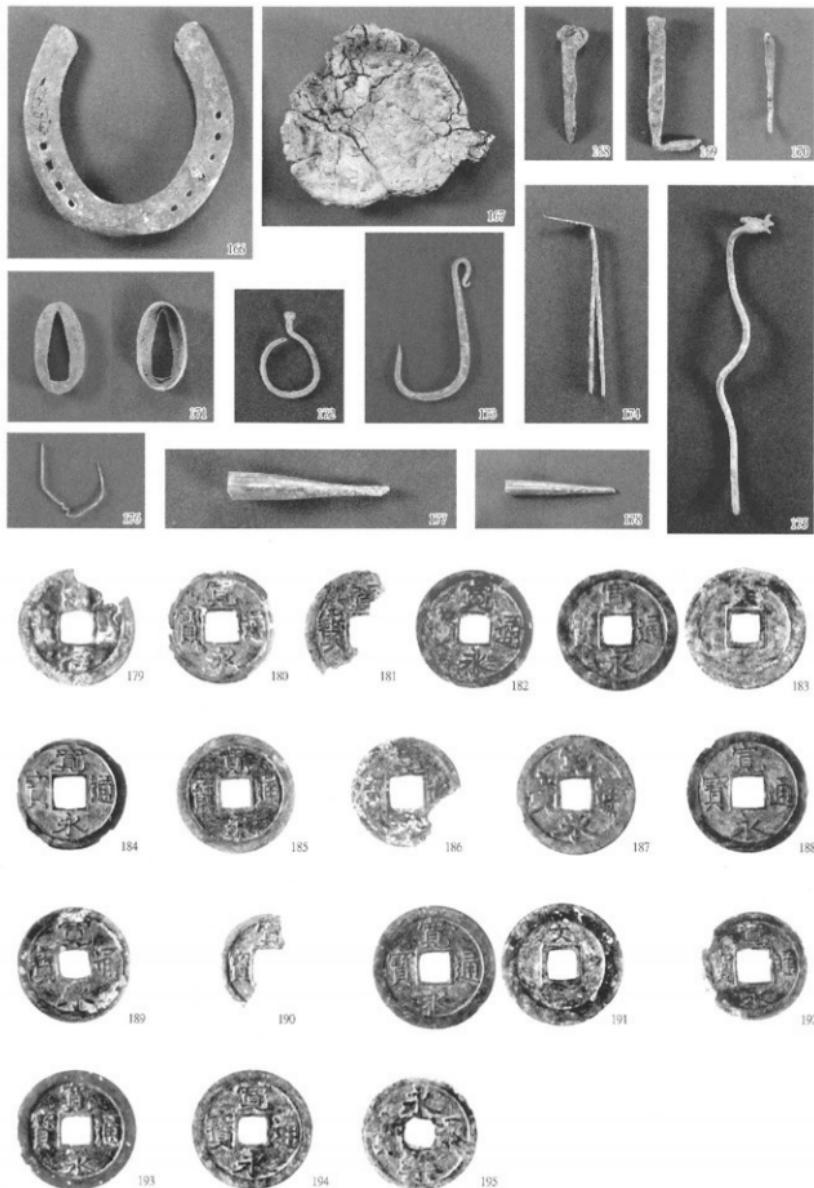
第67図 第16次調査出土陶器（2）(S=1/3)



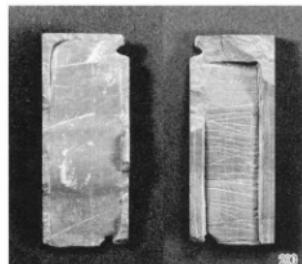
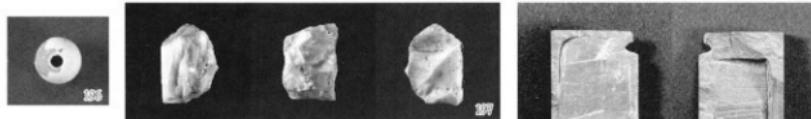
第68図 第16次調査出土



第69図 第16次調査出土



第70図 第16次調査出土



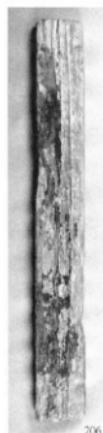
201



204



205



206

第71図 第16次調査出土



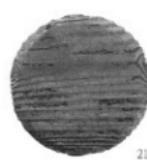
207



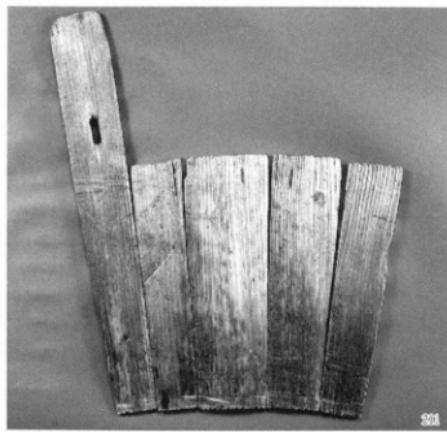
208



209



210



211

第72図 第16次調査出土

## 5. 考察

### 第16次調査3区Ⅲ・IV層出土陶磁器について

第16次調査3区Ⅲ・IV層出土陶磁器について考察を行う。考察では、器種組成等、遺物自体の分析を行う前に、まず、それらが出土した包含層の形成過程について検討する。そのため、まず各層出土陶磁器の年代構成について検討し、Ⅲ・IV層の年代を推定する。推定は、最も新しい遺物の年代と出土数のピークがみられる年代に基づき行う。ここで推定された年代は、包含層の堆積年代若しくは遺物の廃棄年代である。次にⅢ層内、上下間での接合関係を示し資料の一括性について検討する。この分析は、Ⅲ層内でレベル差をもって出土した遺物が、短期間の一括廃棄に由来するものか、または、ある程度長期にわたる小規模廃棄の集積に由来するものかを検証する事が目的である。これらの分析を踏まえ、最後に器種組成、产地別組成について検討する。

#### (1) Ⅲ・IV層の年代について

Ⅲ・IV層の年代を明らかにするため、製作年代の明らかな陶磁器を用いて、各層における製作年代別の出土点数を示す(第28表)。IV層からは、全体数は13点と少ないものの、17世紀中頃から18世紀前半までの遺物が出土している。出土数のピークは17世紀そして17世紀後半にみられる。また、IV層上面からは18世紀前半の

遺物が出土している。以上からIV層の堆積年代は、18世紀前半以前、概ね17世紀後半と推定される。さらに先述通り、IV層からは古窓水(窓永13<1636>年が初鋤)が出土していることから、IV層の上部は17世紀中葉と推定される。

Ⅲ層からは、17世紀前半から19世紀前半までの遺物が出土している。出土数のピークは18世紀後半から19世紀前半にみられる。最も新しい遺物の年代は19世紀前半で、輸入コバルト等を用いた磁器等の出土が全く見られないことから、Ⅲ層の年代は19世紀前半と推定され、幕末までは下らないものと考えられる。

これによりIV層上面は概ね18世紀前半からⅢ層が堆積する19世紀前半までの地表面であったと考えられる。また、Ⅲ層上面はⅡ層直下でレンガ等の出土があり、明治期までの地表面であったと考えられる。

#### (2) Ⅲ層出土陶磁器の一括性について

野外調査では、Ⅲ層を掘り下げる際、4段階に分け出土遺物の取上げを行つた。①Ⅲ層上面、②Ⅲ層掘り下げ1回目、③同2回目、④同3回目の4段階である。①～④は第29表の接合関係に対応する。出土した全破片についてこれを記録

し、個体別分類作業、接合作業を実施した。①～④の間で接合関係のあった資料を、接合率別に集計したものが第27表である。接合率10/10が完形品で、「~10/10」のカテゴリーは半分以上が接合しているものである。④の中でのみ接合しているものが63点中33点と最も多く60%を占める。しかし、特に磁器では①と④で接合関係がある資料の3点全てが高い接合率を示していることから、Ⅲ層出土遺物は高い一括性をもち、比較的短期間の内に廃棄された

第28表 第16次調査3区Ⅲ・IV層出土陶磁器製作年代別出土数

製作年代	Ⅲ層			IV層上面			Ⅲ層			Ⅳ層上面			累計
	鉢器	碗器	小計	鉢器	碗器	小計	鉢器	碗器	小計	鉢器	碗器	小計	
17世紀下													3
17世紀前	1	1	2										1
17世紀中	1	2	3				5	4	9	2	1	3	1
17世紀後	3	1	4							2			6
18世紀中(初期)	1	1	2							1			12
17世紀後	1	1	2				3	4	7	1		1	8
18世紀中(中期)				1	1	2				2			3
18世紀後							15	3	18				6
18世紀後							22	55	77				77
18世紀後-19世紀前半							10	38	48				48
18世紀後							18	48	66				66
18世紀後							17	32	44				44
近世	3	1	4				40	1	41	2	1	40	41
計	1	9	4	1	3	1	133	191	324	3	3	341	

第29表 第16次調査3区Ⅲ層出土陶磁器接合関係表

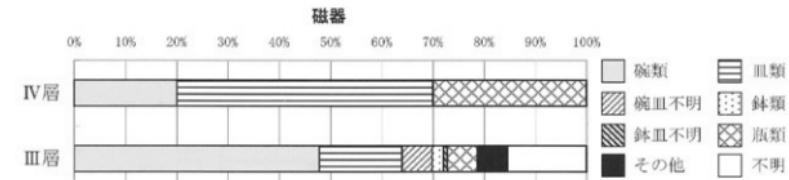
接合関係	初期(後合率)			中期(後合率)			後			年代		
	-1/10	-4/10	-10/10	~1/10	~4/10	~10/10	計	1/10後	4/10後	10/10後	後	後合率
①							2	1		3		
②								1		1	○	
③								1		1	○	
④								1	2	○	○	
⑤								3	○		○	
⑥								2	1	2	○	
⑦								4	1	5	○	
⑧								1	1	1	○	
⑨								1	1	2	○	
⑩								5	1	5	○	
⑪								1	1	1	○	
⑫								16	10	15	5	53
計	5	1	1	4	7	11	5	23	○	1	1	○

資料であると考えられる。また、廃棄された段階に関し、接合関係が見られなかった1破片のみの資料の出土傾向をみると、磁器で112点中105点(94%)、陶器で145点中143点(99%)が④から出土している。これは接合資料と同様の傾向であり、Ⅲ層一括遺物の廃棄は④の段階で行われた可能性が高い。3区基本層序の項でも述べた通り、Ⅲ層④の遺物を取り上げた後は遺物の出土がほとんど無く、Ⅲ層最下部厚さ3~5cmの部分は遺物廃棄時点での表上であった可能性がある。ただし現場では違いが認められず、明確にこれを分層することは出来なかつた。この面の認定については今後の課題とした。

### (3) Ⅲ・Ⅳ層出土陶磁器の器種組成、産地別組成について

器種組成については第73、74図、陶器の産地別組成については第75図に示した。磁器の器種組成についてみると、Ⅳ層は出土点数が10点と少なく量比について議論できる状況はないが、皿類が半数を占め瓶類、碗類がこれに続く。Ⅲ層は、碗類が48%で最も多く、次いで皿類が16%、瓶類が5.9%である。この他、点数は少ないが蓋物、猪口、段重、香炉、紅皿、水滴などが出土している。製作年代別にみると、皿類が17世紀中頃から18世紀前半の間に収まるのに対し、碗類が18世紀後半から19世紀前半を主体としており顕著な違いが見られる。Ⅲ層出土陶磁器では、製作年代が異なり、かつ比較的高い接合率を示す資料が共存している(第29表)。少なくとも接合率の高い資料については混入などではなく19世紀前半に廃棄されるまで伝世し、同時期に使用されていたものと考えられる。陶器は、Ⅳ層では4点と少なく碗、擂鉢、香炉がみられる。Ⅲ層では、碗類が48%で半数を占め、袋物、鉢類、皿類がこれに続く。他には仏壇器や香炉、水滴などが出土している。

産地別組成については、磁器は136点中132点(97%)が肥前で次いで瀬戸美濃(瀬戸美濃? 5点を含む)が13点(10%)である。陶器は、Ⅳ層で肥前、丹波、岸がみられる。Ⅲ層では、大堀相馬が135点と全体の71%を占める。他は全て10点以下で、小野相馬、肥前、瀬戸美濃、堤がみられる。他には、僅かであるが京・信楽、丹波、岸がみられる。今回詳細な比較は出来なかつたが、概ね同時期の二の丸と同様の傾向を示すものと思われる。



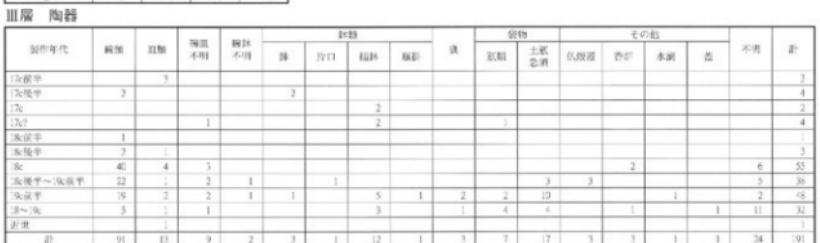
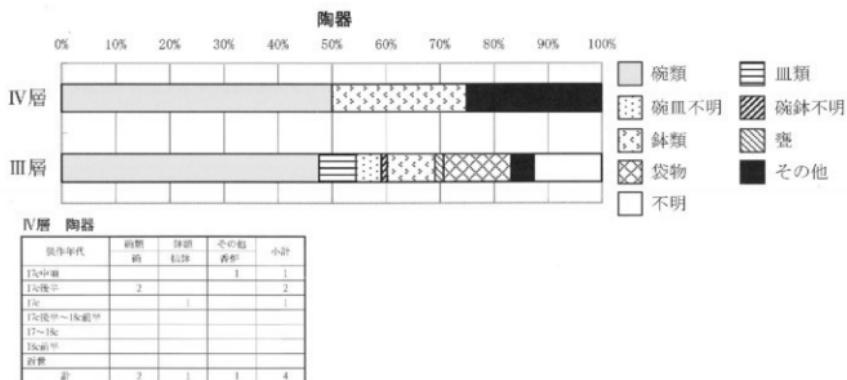
#### IV層 磁器

製作年代	瓶類	皿類	鉢類	小計
17世紀半	1			1
18世	2	1		3
19世紀半～19世紀半	1			1
17～18世	1			1
18世紀半	1			1
近世	1			1
計	2	5	2	19

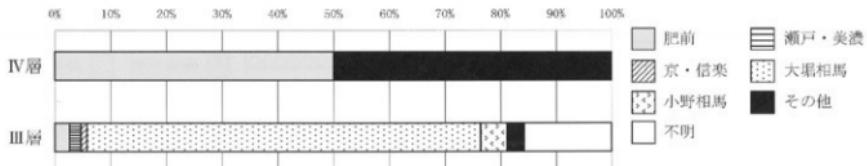
#### III層 磁器

製作年代	瓶類	皿類	罐類 不明	鉢類	擂鉢	糊類 不明	瓶類	蓋物	袋車	猪口	香炉	紅皿	本函	不明	計
17世紀半		1												1	1
18世紀半	1	2												2	3
17世紀半～18世紀半	1	9												1	11
18世紀半	1													1	1
18世紀半	11							1						1	13
18世	19	3	1			1	2	1	1	1				2	22
17～18世				1		1								1	3
16世紀半～17世紀半	7									1				1	8
15世紀半	15		1	2										2	18
14世紀半	8		1				1							2	12
近世	11	7	5				4							15	42
計	65	22	8	3		1	8	2	1	2	1	1	1	21	136

第73図 第16次調査3区Ⅲ・Ⅳ層出土陶磁器製作年代別器種組成



第74図 第16次調査3区Ⅲ・Ⅳ層出土陶器製作年代別器種組成



第75図 第16次調査3区Ⅲ・Ⅳ層出土陶器製作年代別產地別器種組成

## 6.まとめ

第16次調査では、以下①～⑦の成果が得られた。

- ①区堀跡の調査では、堀の北岸および西岸を検出した。南岸は検出するに至らなかった。堀の底面については未確認であるが、17世紀代の遺物を含む粗砂層が確認された。これにより堀の規模は、南北幅が35m以上、深さが現地表面より6.35m以上、また北岸盛土上面の旧地表（X層）面より5.25m以上となることが明らかとなった。
- ②堀跡北岸では、新・古2段階の盛土により形成されたことが確認された。特に古段階の盛土では版築状の特徴がみられた。また、これら盛土に伴って3列の杭列を検出した。杭列1, 2は北岸の検出ラインにほぼ平行し、それぞれ古段階北岸盛土（X層）、新段階北岸盛土（XV層）に伴うものとみられる。機能的には土留めの杭と考えられる。杭列3は新段階北岸盛土（XV層）の上面から打たれた、南北方向に延びるしがらみ状の遺構である。南側でわずかに西へ湾曲する。杭には竹材が編みこまれている。杭列3を直接覆う水性堆積層（XI層）からは幕末から明治期の磁器が1点出土している。
- ③堀跡西岸でも新・古2段階の盛土を確認した。絵図等によれば西岸は上堀となっており、北岸と同様に版築状の特徴がみられた古段階の盛土（XXI層）については、上堀の積み土である可能性が高い。古段階では、盛土の上面は階段状となっており、各段には径10～20cmの円礫を貼り付けた集石が検出された。杭列4はこの段階に伴うものと推定される。杭列5は、新段階盛土（XIV層）に伴うものとみられる。2列とも南北方向に延びるが、杭列5については他と異なり、盛土の落ち際で斜めに打たれた状態で検出された。
- ④堀の水位に関して、北・西岸盛土の直上にのる水性堆積層（北岸：XI層、西岸：XVII層）のトップレベルをみると、XI層は28.52m、XVII層は28.48mで非常に近似する。幕末から明治期の磁器が出土したXI層とXVII層が同時期の堆積物とした場合、西岸のXVII層は、集石点上の堆積層で新段階西岸盛土（XIV層）の直下にあたるため、西岸の新段階盛土（XIV層）とそれに伴う杭列5が明治期の遺構となる可能性も考えられる。しかし、この堀については、今回の調査および地図の検討から、明治期に入り40年程ではほぼ自然埋没したものと考えられるため、明治期に西岸への新たな盛土や杭列の設置等、堀のメンテナンスを行ったとは考えにくい。よって、現段階では西岸の新段階盛土と杭列5についても近世期に属する可能性が高いと推定される。また、北岸と西岸では必ずしも盛土や杭列の設置、堀の泥さらい等が並行して実施されてはいない可能性も指摘できる。
- ⑤2区では、現地表面下約1mで幕末～明治期の旧表土と考えられる黒色土層とそれに覆われる疊層を検出した。疊層には瓦等の遺物が含まれており、人為的なものである可能性がある。昨年度、登城路の北側で検出した右組側溝については検出されなかった。石組側溝については、2区より南側では堀に向かう傾斜地となるため、存在したとすればより北側にあったものと考えられる。
- ⑥3区では、版築状の七型積み土を確認した。また、土壘の構築後に堆積した遺物包含層を2枚確認した。近代盛土であるII層直下のIII層からは18世紀後半から19世紀前半の陶磁器を主体とする遺物が出土した。層内での接合関係から、比較的短期間に一括して廃棄された可能性が高いと考えられる。また、III層直下のIV層からは17世紀後半を主体とする陶磁器が僅かながら出土した。土壘の構築年代については、積み土がIV層直下の無為物層（V層）を抜み、その下で確認されたことから、現段階では17世紀前半である可能性が高いと考えられる。
- ⑦遺物としては、3区の出土量が多く、陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、土製品、瓦、鉄製品、銅製品、石製品、ガラスなどが出土した。

## VI 理化学分析

### 1. 放射線炭素年代測定

KS-411 (IV層上部焼土遺構) 墓土中より採取した炭化物試料3点についてAMSによる放射性炭素年代測定を行った。試料と方法を第30表に、測定結果を第31表に示す。

測定の結果<sup>14</sup>C年代値で410±40年BP・440±40年BP・330±40年BP、補正<sup>14</sup>C年代値で380±40年BP・440±40年BP・340±40年BPの結果を得た。また、これらの年代値を曆年代較正曲線により曆年較正し、それぞれ95%確率 ( $2\sigma$ ) でcalAD1440～1640, calAD1420～1490, calAD1450～1650との測定結果を得た。

第30表 放射性炭素年代測定 試料と方法

試料番号	部位	種類	前処理・測定	測定法
C-1	KS-411層±1	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄	AMS
C-2	KS-411層±1	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄	AMS
C-3	KS-411層±1	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄	AMS

※ AMS は加速器質量分析法 : Accelerator Mass Spectrometry

第31表 放射性炭素年代測定 測定結果

試料番号	測定 No.	<sup>14</sup> C年代 <sup>a</sup>		補正 <sup>14</sup> C年代 <sup>b</sup>	曆年代 <sup>c</sup>
		(ya)	(年 BP)		
C-1	227320	410 ± 40	-27.1	380 ± 40	文政 : cal AD 1470 1 $\sigma$ : cal AD 150 ~ 1520 cal AD 150 ~ 1600 2 $\sigma$ : cal AD 1440 ~ 1640
C-2	227321	440 ± 40	-25.0	440 ± 40	文政 : cal AD 1440 1 $\sigma$ : cal AD 1430 ~ 1460 2 $\sigma$ : cal AD 1420 ~ 1490
C-3	227322	330 ± 40	-26.3	340 ± 40	文政 : cal AD 1530, AD 1590, AD 1650 1 $\sigma$ : cal AD 1470 ~ 1640 2 $\sigma$ : cal AD 1450 ~ 1650

#### 1 14C年代測定値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの55,568年を用いた。

#### 2 $\delta$ (デルタ) <sup>13</sup>C測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差(%)で表す。

#### 3 補正<sup>14</sup>C年代値

$\delta$ <sup>13</sup>C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

#### 4 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。CalはCalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

曆年代の交点とは、補正<sup>14</sup>C年代値と曆年代較正曲線との交点の曆年代値を意味する。 $1\sigma$  (シグマ) (68%確率) と $2\sigma$  (95%確率) は、補正<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma$ ・ $2\sigma$ 値が表記される場合もある。

## 2. 珪藻分析

珪藻は、珪酸質の被殻を有する單細胞植物であり、海水域や淡水域など水域をはじめ、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

分析試料は、第15次調査KS-405（暗渠状遺構）埋土1層から採取された1点と第16次調査1区（堀跡）から採取された17点の計18点である。

分析の結果、KS-405埋土1層では珪藻密度が極めて低く、珪藻が生育しにくい乾燥した環境であったか、堀土の堆積時間が早く珪藻が集積しなかった事などが推定される。

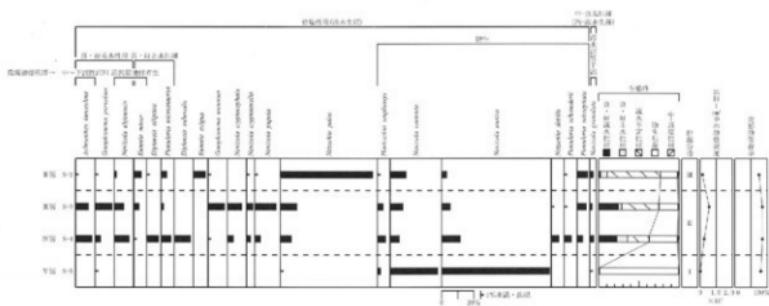
第16次調査1区の17点は、採取された箇所毎に、I区堆積層、I区北岸堆積層、I区西岸堆積層と大別し、それぞれに分析結果を示す。I区堆積層のV層は、IV層堆積時のI区西部における旧表土層とみられるが、陸生珪藻がほとんどを占め、湿った土壤の隣の環境が示唆される。III・IV層は概ね同様の傾向がみられ、V層に比べ陸生珪藻の占める割合が低くなり、真・好流水性種、流水不定性種の占める割合が高くなる。II層は、流水不定性種の占める割合が高く不安定な水域の環境が推定される。

I区北岸堆積層のXX層は真・好流水性種と流水不定性種の占める割合が高く、水草の生育するやや不安定な流水域の環境が示唆される。また、そのような環境で形成された堆積物が盛土として用いられたものと推定される。XVII層は陸生珪藻の占める割合が高く、流水不定性種と中-真塩性種（汽-海水生種）で海水泥炭干潟環境指標種群が比較的多いことから、湿った陸の環境から不安定な水域および干涸の環境が推定される。崩落土であることから、海成層を含めて用いられた堆積物が崩落したものと考えられる。XI-XVb層は、陸生珪藻、流水不定性種で占められ、真・好流水性種、真・好止水性種を伴い、真流水性種がXII層では増加することから、XVb層では湿った環境から水の流れ込む池沼の環境が示唆され、XII層では流水が著しくなる。VII層は、陸生珪藻と中-下流性河川環境指標種群の真流水性種が多くなることから、湿った岸の環境で引水等により流れのある水域に接する環境が推定される。

I区西岸堆積層のXXI層は、流水不定性種と沼澤湿地付着生環境指標種群を含む真・好流水性種がほとんどを占め、流れをもつ水域が推定される。またその環境で形成された堆積物が盛土として用いられたものと推定される。XVIIa層、XVIIb層は、陸生珪藻の占める割合が高く、真・好止水性種を主に伴う。池沼の岸の湿った汀の状況であったと推定される。XIII層は、真・好止水性種の占める割合が高く、池沼が示唆される。XIIIc・XIIIh層は、陸生珪藻が優占し、中-下流性河川環境指標種群を含む真・好流水性種が比較的多い。こうしたことから、河川から引水された流水域に接する湿った環境が推定される。XIIa層は、陸生珪藻の占める割合が高く、湿った環境が示唆される。

第32表 18年度 仙台城跡発掘調査分析業務委託試料一覧

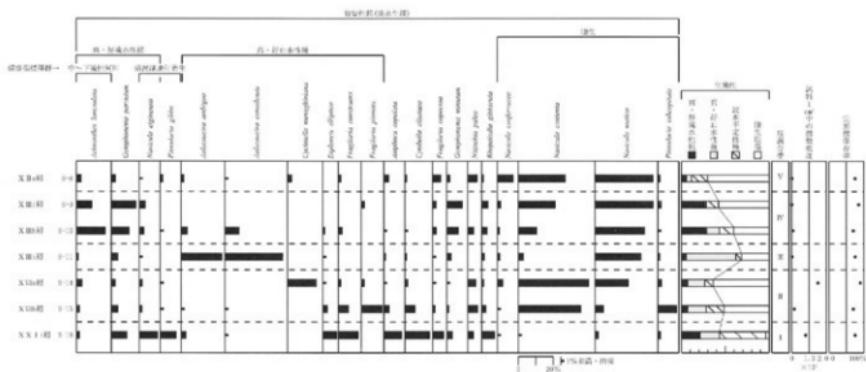
試料名	調査次数	地 点	遺構・層位	上 質
S-1	15次	1区	KS-405 埋土1層	シルト質砂
S-2	16次	I区堆積層	Ⅲ層（汽代海水の礁土層、～泥水供給層）	シルト質粘土、礁の互層
S-3			Ⅳ層（河口水供給層、近代）	シルト質粘土
S-4			Ⅴ層（植物堆積を大きく含む人為堆積層、近代）	シルトシルト
S-5			Ⅵ層（泥炭土層、近代）	シルトシルト
S-6		I区北岸堆積層	Ⅶ層（堆積凹部の砂質堆積層）	シルトシルト
S-7			X I層（X V層上の砂質堆積層）	シルトシルト
S-12			X V层（堆積凹部を形成する礁土層<苔類層>）	シルトシルト
S-13			X VI層（堆積北岸を形成する砂土層<苔類層>）	シルト質砂
S-16			X V层（堆積北岸を形成する砂土層<苔類層>）	シルトシルト
S-7			X X層（堆積北岸を形成する砂土層<苔類層>）	シルトシルト
S-8		I区西岸堆積層	X II層（堆積凸部の上層無堆積層）	シルトシルト
S-9			X III層（堆積凸部の上層無堆積層）	細砂
S-10			X IV層（堆積凸部の上層無堆積層）	粗砂
S-11			X V層（堆積凸部の上層無堆積層）	中質シルト
S-14			X VI層（堆積凸部の水路に堆積した地色粘土質土層）	シルト質粘土
S-15			X VII層（堆積凸部の水路に堆積した地色粘土質土層）	シルト質粘土
S-15			XX. 層（堆積凹部を形成する礁土層：板岩化）	シルト質粘土



## 仙台城跡発掘調査16次調査1区堆積層における主要珪藻ダイアグラム



## 仙台城跡発掘調査16次調査 1区北岸堆積層における主要珪藻ダイアグラム



仙台城跡発掘調査16次調査1区西岸堆積層における主要珪藻ダイアグラム

第76図 第16次調査1区堆積層における主要珪藻ダイアグラム

## VII 絵図・文献資料の調査

### 絵図調査報告

仙台城跡を描いた「肯山公造削城郭木写之略図」を実際に観察した。

#### 1 調査概要

日時：平成18年9月28日（木） 場所：宮城県図書館

調査指導：仙台城跡調査指導委員会 西 和夫 委員

調査者：文化財課 渡部紀 鈴木隆 鹿野仁子 仙台市博物館 斎藤潤 神奈川大学大学院 大川井寛子

#### 2 「肯山公造削城郭木写之略図」について

「肯山公造削城郭木写之略図」（以下、「木写之略図」という）は、本丸と二の丸の建物跡を内部の部屋割りまで描いた絵図である。しかし、存在しなかった天守などが描かれており、計画図的性格が考えられている。本図については佐藤巧氏により詳細な検討が行われており、「天和以前、即ち延宝年代頃における城郭改造整備計画図の如きものでないかとみられる。」（佐藤:1986）とされている。また、阿部和彦氏は「仙台城の建築」（阿部:2001）において、当初は延宝年間末から天和初年に作製された模型の下図であり、のちに大部分の居館部を書き加え元禄年間の中期ころに現状のような形式になったと考えられる、としている。



第77図 「肯山公造削城郭木写之略図」の方眼範囲（斜線部）と方眼方向

### 3 觀察結果

大きさ 縦188cm 横183cm 平成17年度に修復を行っている

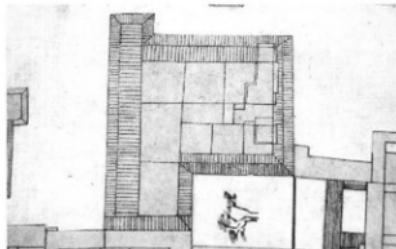
料紙に石垣、土塁、堀などが着色され、それ以外の部分のうち、第76図に斜線で示した範囲に約3mm単位の方眼の圧痕が施されている（1間を1分）。方眼の方向は一方向で、二の丸跡東側の区画方向に一致する。方眼は大手の大身屋敷にはみられないが、大鍋対岸の道や、千賀沢北側の道に施されている。

建物跡は、黄色の紙に間仕切りを描いて貼り付けているが、ゆがみが生じている箇所も見られる。紙の色と間仕切りの描き方は本丸と二の丸で異なる。本丸大広間の間仕切りが平行でなく、二の丸の描き方のほうが丁寧である。

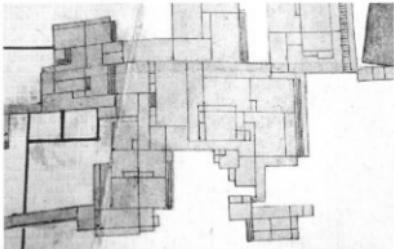
描き方の順序は、石垣、堀などの着色のあと、空白部に方眼を施し、紙を貼り付けている。樹木は方眼の後に描かれたようで、方眼に沿って絵具がにじんだ痕が見られる。

#### 参考文献

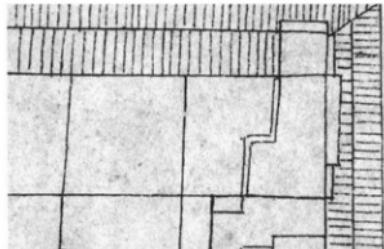
- ・佐藤巧「仙台城館および周辺建築復元考」『仙台市博物館調査研究報告 第6号』仙台市博物館 昭和61年（1986）
- ・阿部和彦「仙台城の建築」『仙台市史 通史編3 近世1』仙台市 平成13年（2001）



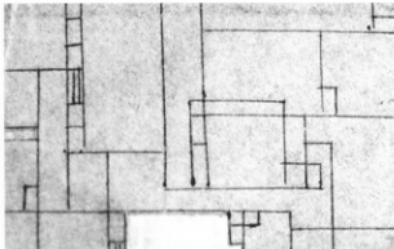
第78図 本丸大広間部分



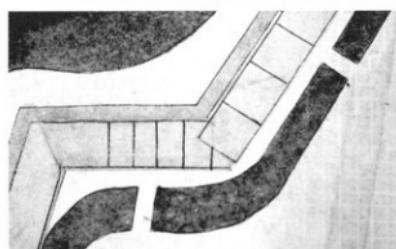
第79図 二の丸建物部分



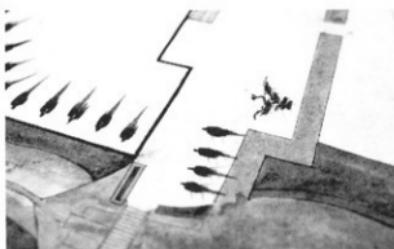
第80図 本丸大広間間仕切りの描写



第81図 二の丸建物間仕切りの描写



第82図 本丸北西部



第83図 樹木部分の絵具のにじみ

# 仙台城跡関連絵図調査 その1

## はじめに

仙台城下絵図についての研究は、阿刀田令造氏による「仙台城下絵図の研究」(1936・御茶屋報恩会)を嚆矢とし、宮城県図書館収蔵資料については「絵図・地図解説目録」(1993)で詳細な解説が行われている。図書館や郷土資料所蔵機関等の目録を確認すると、仙台城に関する絵図についてはかなりの数の存在が認められる。今回は、これまでの先行研究および「仙台市史城館編」編さんの過程での調査成果を参考に、主たる絵図について集成した。

集成表は、県、市文化財指定されたもの、阿刀田令造氏他の研究成果で公刊されているもの、市史編さん過程での調査成果などを中心に作成した。資料番号は仮であり、今後変更される可能性があることから、各所蔵機関の登録番号および出版物に記された番号などをあわせて記した。

資料の実物を調査し評価していくべきであり、今後も継続的に調査を行う予定である。

## 絵図の分類

今回の報告では、絵図を以下のとおり分類した。

### A 城下絵図

城下全体を描いたもので、a 幕府提出用と、b 藩政用に細分した。藩政用には、原図と見られる精緻なものと、その写しとみられるものの2種があるため、先行研究の成果にもとづき集成表にその旨を記した。

### B 城絵図

仙台城を描いたもので、a 幕府提出用、b 藩政用絵図、c その他、に細分した。a 幕府提出用は、石垣、土壘等の修復の際に幕府へ提出した修復窓絵図である。b 藩政用では、城全体を描いたもの、本丸を描いたもの、二の丸を描いたものにさらに細分した。c その他としたものは、儀式などの際の人員配置を描いた絵図などをとりあげた。

### C その他

A、B 以外のもので、a 御修復帳（藩の施設の個別修復記録）、b 姿絵図、c 絵画資料（城下を鳥瞰的に描いた屏風など）をとりあげた。

## 今後の予定

今回は、県内所蔵物件を主として収集したが、今後は他地方の機関所蔵資料についても情報収集を進めていく予定である。たとえば、内閣文庫、尊經閣文庫、池田家文庫などにも仙台城絵図が保管されているため、調査の上で集成していく予定である。

第33表 仙台城跡調査結果彙成表 (1) (平成19年3月段階)

大分類	小分類	地名	面積	性質	備考	位置	
1.下付地	施設埋立地	東外堀北側斜面	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	260×315 350×320	(徒) 防衛施設 河川護岸施設	水底「西側防波堤」北側敷地 長さ約160m幅315m高さ約320m 施設未入射(年3月調査時)保全心配なし 内側に通路有り	北側入り口直角 4万坪 木造(1914) 岩山1号へ接続P3 岩山1号
	2.施設埋立地	東外堀北側斜面下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	80×120	・荒れ地と思われる ・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り
	3.施設埋立地	東外堀北側斜面	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	70×2,082 166.6×96.558	・堅い地盤の所 ・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り
2.施設埋立地	新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	100×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	3.施設埋立地	新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り
	4.施設埋立地	新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り
	5.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	6.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	7.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	8.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	9.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	10.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	11.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	12.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	13.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	14.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	15.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	16.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	17.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	18.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	19.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	20.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	21.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	22.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	23.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	24.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	25.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	26.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	27.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	28.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	29.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	30.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	31.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	32.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	33.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	34.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	35.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	36.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	
	37.新外堀下部	正方形 (1955) 年 水底 (160) 年	17×54	・堅い地盤の所	見	内側に通路有り 内側に通路有り	

第34表 仙台城跡周辺図集成表(2)(平成19年3月段階)



## VIII 総括

本年度は仙台城跡遺構確認調査の第2期5カ年計画の1年目であり、本丸大広間北東周辺の遺構確認調査（第15次）、三の丸翼門跡周辺の遺構確認調査（第16次）を行った。

これまで大広間跡の調査では、その位置や規模、柱間（6尺5寸基準）等を確認している。昨年度の第10次調査では、通路の可能性がある、大広間車寄付近から御成門付近へ延びる石敷き溝状遺構を検出した。また、御成門跡の現存する礎石が門の北東角にあたる事をほぼ確定した。昨年度の第12次調査では、大広間雨落ち溝跡北辺の北約3mで石敷きを伴う礎石建物跡を1棟検出した。礎石は4石がJ字形に並び、東西の軸線は大広間跡東西軸線より北へ20°振れる。礎石の柱間は約1.5mである。大広間跡北側周辺は能舞台の推定地であったが、この建物跡の全体形状、規模が不明である点やその建物が大広間に先行する事実から、能舞台との関連性を指摘するには至らなかつた。この建物跡の評価は、今後大広間跡に先行する遺構の拡がりを明らかにし、周辺遺構全体の位置関係の中でしていく必要がある。また、雨落ち溝が改修を受け、それに伴い新たに暗渠状遺構が取り付くなど遺構の変遷が明らかになった。同年実施した第13次調査では、堀跡の規模、位置の解明には至らず今年度第16次調査への課題となつた。土堀櫓部の調査では、翼門跡から長沼へと続く右組側溝を良好な状態で検出した。土星については、厚さ約3.5mの版築状の積み土を確認した。

今年度の第15次調査は、大広間北東周辺（1区）および同南東周辺（2区）における遺構確認を目的として実施した。大広間雨落ち溝跡および礎石跡の北東角、南東角を確認した。両角の礎石跡については、隣接してそれぞれ2基検出され、南東角においては直接の切り合い関係が認められた。北東角についても時間差のある可能性が高いことから、建替の有無等について今後更なる検討が必要である。また、大広間の北東周辺では古い順から、南北溝跡（KS-407,401）、禁地屨（III-1層）、東西辦跡（KS-106）、暗渠状遺構（KS-105）、東西辦跡（KS-403）の変遷が明らかとなった。大広間とその東側に展開する建物、庭園との位置関係や本丸御殿全体の配置、それらの時間的変遷を検討してゆく上で重要な成果である。今後、大広間の北側（第12次調査）や西側（第5・7・10次調査）における遺構の変遷と総合し、本丸北側における御殿構成の時間的变化を検討してゆく必要がある。昨年度に続き大広間に先行する石敷き遺構を検出した。大広間の内外に拡がることから、改めて大広間とプランの異なる遺構の存在が確認された。これらは共伴する瓦片などから近世期の遺構と考えられる。大広間成立以前の、築城期における遺構の規模やプランの検討は、今後も重要な課題の一つである。これらの成果を総合し、仙台城の築城から施廃まで、本丸の果たした役割が時間的にどのような変遷を辿ったのか、この問題に考古学的な検討を加えていくことが、今後の本丸跡における調査の基本的な課題である。

第16次調査は、堀跡（1区）、石組側溝（2区）、土壘（3区）に関連する遺構の確認を目的として実施した。1区では、それぞれ3列、2列の杭列を伴う堀跡の北岸、西岸を確認した。また西岸では斜面に貼り付いた階段状の集石を検出した。堀の規模は、南岸が未確認であるため南北幅35m以上、深さが現地表面より6.35m以上となる。北・西岸共に盛土により形成されており、版築状の堆積構造が認められた。北岸の盛土は、この堀北側の登城路が土橋である可能性を示す。北・西岸の盛土には2時期の変遷が認められるが、松図等で確認される堀の形態上の変化と、どのように対応するかは今後の検討課題である。2区では現地表面下約1mで幕末～明治期の旧表土と直下の礫層を検出した。礫層には遺物が含まれ、人為的なものである可能性がある。石組側溝は検出されず、登城路の幅を確認するには至らなかつた。3区では版築状の土堀積み土を確認した。また、土堀構築後に堆積したIV層からは17世紀後半、IV層直上のIII層からは18世紀後半から19世紀前半を主体とする陶磁器他の遺物が一括で出土した。特にIV層の年代は、三の丸の土壘構築が17世紀前半に行われた可能性を示している。これについては、近年巽門から清水門へ抜けるルートを大手とする說に関連して、堀の形状・規模と共に今後の更なる検討が必要である。

## 参考文献

- 小倉強 「松島瑞巌寺と仙台城大広間」『仙台郷土研究』第2卷第12号 昭和7年(1932)
- 小林清治編 『仙台城と仙台領の城・要害』(日本城郭史研究叢書2) 昭和57年(1982)
- 小林清治 『伊達政宗』昭和34年(1959)
- 佐藤巧 「仙台城居館の変遷とその構成・機能」『近世武士住宅』昭和54年(1979)
- 西和夫 『建築技術史の謎を解く(続・工匠たちの知恵と工夫)』昭和61年(1986)
- 西和夫 『図解古建築入門』 平成3年(1991)
- 仙台市教育委員会 『仙台城』 昭和42年(1967)
- 仙台市教育委員会 『仙台城三ノ丸跡』 昭和60年(1985)
- 仙台市教育委員会 『仙台城址の自然』 平成2年(1990)
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター「年報1~18」 昭和60~平成17年(1985~2005)
- 『仙台城跡石垣修復等調査指導委員会 第1~9回資料』 平成9~12年(1997~2000)
- 仙台市建設局 『仙台城石垣修復工事専門委員会 第1~15回資料』 平成13~16年(2001~2004)
- 仙台市教育委員会 『仙台城跡調査指導委員会 第1~15回資料』 平成13~18年(2001~2007)
- 仙台市教育委員会 『仙台城跡1~6』 平成13年~17年(2001~2006)
- 京都国立博物館 『金色のかざりー金属工芸にみる日本美ー』 平成15年(2003)
- 渡部薰 『仙台城本丸大広間の復原的研究』 平成15年度神奈川大学建築学科西研究室卒業研究・修士論  
『奥州仙台城絵図』 正保2・3年(1645・1646)(斎藤報恩会蔵)
- 『仙台城下絵図』 宽文4年(1664)(宮城県図書館蔵)
- 『仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図』(仙台市博物館蔵・千田家資料)
- 『御本丸大広間地絵図』(齊藤報恩会蔵)
- 『青葉城御本丸之図』(仙台市博物館蔵)
- 『御本丸御家作御絵図』 明治元年(1868)(宮城県図書館蔵)
- 『仙台城旧御本丸御屋形図』 明治26年(1893) 遠藤允信追記(仙台市博物館蔵)
- 『伊達治家記録』(貞山公治家記録)
- 『仙台古文記』 慶長7年(1602) (伊達家御給主 高梨家文書 平成5年(1993) 所収)
- 『御本丸拝見覚書』 安永4年(1775) 安倍彦右衛門記(仙台市史 昭和4年(1929) 所収)
- 『能楽全書 第四巻 能の演出』東京創元社 昭和54年(1979)
- 西秋良宏編 『東京大学コレクション1 加賀殿再紹』 東京大学出版会 平成12年(2000)
- 追川吉生『江戸のミクロコスモス 加賀藩江戸屋敷』新泉社 平成16年(2004)
- 甲崎光彦『武家屋敷一尾張藩上屋敷』季刊考古学53 平成7年(1995)
- 成瀬光司『東大構内の遺跡から』季刊考古学53 平成7年(1995)
- 『特別史跡彦根城跡御殿発掘調査報告書』彦根城博物館 昭和63年(1988)
- 矢野節蔵『仙台藩祖尊上事蹟』明治32年(1899)
- 伊達邦宗『伊達家史叢談 卷之五』大正10年(1921) 復刻版『伊達家史叢談』今野印刷 平成13年(2001)
- 第二師団司令部『仙台城沿革』第二師団司令部 大正15年(1926)
- 小倉強『仙台城の建築』仙台工業高等学校 昭和5年(1930)
- 阿刀田礼造『仙台城下絵図の研究』(斎藤報恩会 譲り) 昭和11年(1936)
- 小倉強『仙台城大広間絵図に就て』『仙台郷土研究 第十二卷第十一号』仙台郷土研究会 昭和17年(1942)
- 仙台市文化財保護委員会『仙台城』仙台市教育委員会 昭和42年(1967)

- 佐藤巧『近世武士住宅』叢文社 昭和54年（1979）
- 渡辺信夫編『日本城下町絵図集・東北編』輪昭和社文社 昭和55年（1980）
- 佐藤巧「仙台城の建築と姿絵図」『東北大学建築学報 第21号』東北大学建築学科 昭和56年（1981）
- 師齋藤報恩会郷土資料図書分類目録 其一（東北地方関係古文書目録）其二（常盤文庫）昭和62年（1987）
- 宮城県図書館『宮城県図書館所蔵絵図・地図解説目録』宮城県図書館 平成5年（1993）
- 高倉淳ほか5名『絵図・地図で見る仙台 第一輯』今野印刷 平成6年（1994）
- 東北歴史資料館『東北歴史資料館 資料集37 宮城の古絵図』東北歴史資料館 平成6年（1994）
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 特別編4 市民生活』仙台市 平成9年（1997）
- 仙台市教育委員会『仙台市文化財パンフレット第45集 仙台城下絵図の魅力 杜の都のうつりかわり』平成13年（2001）
- 仙台市博物館『仙台城－しろ・まち・ひと－』平成13年（2001）
- 吉岡一男ほか6名『絵図・地図で見る仙台 第二輯』今野印刷 平成17年（2005）
- 白井市教育委員会『白井市所蔵絵図資料群調査報告書』平成17年（2005）
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 特別編7 城館』仙台市 平成18年（2006）
- 『復刻古地図 安永年間 仙台御城下絵図』人文社

## 報告書抄録

ふりがな	せんだいじょうあと						
書名	仙台城跡7						
副書名	-平成18年度 調査報告書-						
卷次	7						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第309集						
編著者名	渡部 紀・鈴木 隆・鹿野仁子						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 仙台市青葉区国分町3丁目7-1 TEL022-214-8544						
発行年月日	2007年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	調査地点	コード	調査期間	調査面積	調査原因	
せんだいじょうあと 仙台城跡	宮城県仙台市 あひばくかわうちない 青葉区川内地内	大広間跡 (6次) [第15次調査]	市町村 04100 北緯 38°15'02"	遺跡番号 01033 東経 140°51'35"	2006.6.1 ~ 2006.8.4	311m <sup>2</sup>	重要遺跡の 遺構確認 調査
		三の丸跡 (2次) [第16次調査]	38°15'07"	140°51'41"	2006.9.1 ~ 2006.11.30	522m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
仙台城跡	城館跡	江戸時代	礎石跡・雨落ち溝跡・堀跡・堀跡・土塁	陶磁器・瓦・金属製品・石製品・木製品	第15次調査では、大広間跡の北東・南東角を確認し、それに先行する石敷き遺構を検出した。また大広間の北東周辺では堀跡や暗渠状遺構など、遺構の変遷が明らかになった。		
					第16次調査では、杭列や集石を伴う堀跡の北岸、西岸を検出した。三の丸の土塁内部では、18世紀後半から19世紀前半の陶磁器等が出土した。		

仙台市文化財調査報告書第309集

## 仙 台 城 跡 7

— 平成18年度 調査報告書 —

2007年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町7丁目7-1

文化財課 022(2)4.8551

印刷 株式会社 建設プレス

仙台市青葉区浜田二丁目2-10

TEL. 022(3)02.0177

